
華国神記
隻眼の護り人
九条菜月
Natsuki Kujo



華国神記

隻眼の護り人

九条菜月
Natsuki Kujo

NOVELS Fantasia

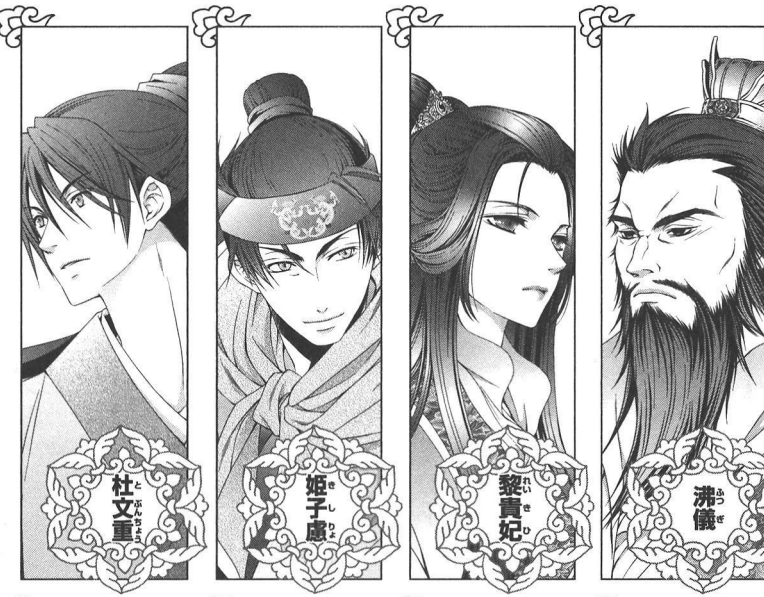
口絵・挿画　由貴海里

目次

序章……9
第一章……19
第二章……46
第三章……68
第四章……85
第五章……105
第六章……123
第七章……154
第八章……169
第九章……186
終章……203
あとがき……212

登場人物紹介




杜文重
姬子虞
黎貴妃
沸儀


冬雁
郭洪平
鄭玄楽
呂翰栄



李沸儀（りふつぎ）
現皇帝

愛妾

黎貴妃（れいきひ）
皇帝の寵姫

親子

親子

李博焚（りはくたく）
太子

腹違いの兄弟

祥安（しょうあん）

支援

花興奏（かこうそう）（57歳）
中書令（中書省の最高責任者）
太子派の筆頭

韓楊秀（かんようしゅう）（27歳）
禁軍右飛龍将軍

親友

鄭玄楽（ていげんらく）（27歳）
春蘭から真名を奪った男

幼馴染み

真名を奪う

追っている

上司

部下

腹違いの兄弟

伯父

姪

花翠蓮（かすいれん）（15歳）
花玉翠（かぎょくすい）（14歳）
花家の美人姉妹

鄭仲望（ていちゅうぼう）（24歳）
元禁軍の気術兵。
現在は中書省書物補修係

李春蘭（りしゅんらん）
（300歳／主人公）
小さな邑の元守り神。
真名を奪われ人間に戻る

家主

居候

雇い主

家僕

高友寧（こうゆうねい）（13歳）
孫啓璋（そんけいしょう）（13歳）
鄭家につかえる少年たち

冬雁（とうがん）
兎天の弟子

ひと目ぼれ

姬子慮（きしりょ）（25歳）
龍乎虎慈軍隊長

仲間

杜文重（とぶんちょう）（23歳）
子慮の副官

龍乎（りゅうこ）

郭洪来（かくこうわ）（20歳）
気術士

仲間

兎天（うてん）（？歳）
鬼面で顔を覆う
組織の二番手

猩猩緋（しょうじょうひ）

紅箏言（こうそうげん）
呪術を操る紅家の当主



人物相関図

華国神記

隻眼の護り人



邑は深い沈黙に覆われていた。

どこにでもある、地方の小さな邑だ。家屋は五十もない。

森と河に囲まれた土地を開墾し、細々と農作業で糊口を凌いでいた。邑の、北側から東側には深い山々が連なり、西側には運河の支流の一つである河川が流れていた。

土壌は豊かだったが、国の荒廃に引き摺られるように年貢の量が増え、年を重ねるごとに暮らしは傾いていった。

それでも役人たちは年に二度、屈強な兵士を連れ年貢の取り立てにやってくる。このままでは、と深刻な顔で話す邑人たちの姿がよく見られるようになった。

土と砂利を均した路を、白い袍を着た男たちがゆっくりと歩いていく。十人はいるだろう。若い者もいれば、老いた者もいる。みな等しく、痩せ細った貧相な体つきをしていた。

男たちが肩に担ぐのは、屋根のついた輦輿だ。柱や轅には美しい彫刻が施され、内側に座る者の姿を隠す帳には上等な布が惜しげもなく使われている。屋根の上には見事な龍が載り、四方を睨みつけていた。

空から糸を引くように降る雨が、男たちの袍をぐっしょりと濡らす。輿もさらに重さを増しているだろう。だが、足取りに乱れはない。不満を漏らす者もいない。誰もが口も開かずに、黙々と輿を運び続けた。

その光景を輿の中から見た少女は、まるで葬列を

見ているみたいだと、他人事のように思った。

担がれているのは生きた人――自分だが、男たちの顔は悲しみに歪められている。むりもない。少女は贄として、守り神に捧げられるのだ。逃げられないようにと、手足につけられた枷が己の置かれた境遇を物語っていた。

雨は、もう十日以上も降り続けている。雨季には珍しいことではなかったが、例年に比べ雨量は遥かに多かった。雨脚が弱まっても、空を覆う分厚い雲が薄れることはない。そして、数刻と経たずに大地を叩きつけるような豪雨が襲う。やがて田には大量の泥水が流れ込み、畑の作物も根を腐らせてしまった。

だが、なによりも恐ろしいのは、河川の氾濫だ。邑のすぐ傍を流れる河は、豊かな水を与えてくれるが、時として容赦なく荒れ、田畑や家を押し流す。雨季ともなれば、ひとつの邑が消えることも、そう珍しいことではなかった。

少女が暮らす邑は、河川の傍にありながら今まで規模の大きな水害を免れていた。守り神様のおかげだ、と邑の老人たちは口々に言う。特に豊作だった年は盛大な祭りを開き、神に深い感謝の祈りを捧げた。

雨が降り出した当初、邑人たちは守り神様がいるのだからと、大事と取る者はいなかった。しかし、時が経つにつれ、不安はじょじょに人々の心を蝕み始めた。

田に泥水が入り、畑の野菜が根腐れを起こし、それでも雨が降り続いた頃。

邑長は、占師を頼った。

邑で暮らす占師は女で、都でも評判になるほどの腕を持っていた。女の才を見込んで、わざわざ遠方から訪ねてくる客もいたほどだった。

占師は告げた。

長きにわたり邑を守り続けてきた神は、命の終わりを迎えようとしているのだ、と。

生命の火が消えるまでには、まだ時はあるが、以前のように神力を行使することはできない。守り神を失えば、この邑だけでなく近隣の邑も甚大な痛手を受けることになり、多くの人命が失われるだろう、と。

邑長は訊ねた。

邑を救う方法はないのか、と。

占師は告げた。

贄を捧げよ、と。

名指しされたのは、十二になったばかりの娘。占師の子だった。

母はどんな思いで卦を告げたのだろうか、と少女は思った。占師としての使命と、親としての情に苛まれながら、母が選択したのは前者だった。母親であると同時に、彼女は優秀な占師でもあった。その判断を恨む気持ちはない。厳しくも優しかった母は、輿が家にくるまで少女を胸に抱いて離そうとしなかった。

父はなにも言わなかった。顔を真っ赤にして、耐えるように歯を食い縛っていた。寡黙な人だった。その父が、少女を見送る際、空に向かって吼えた。言葉にならない悲痛な叫びだった。振り返れば、握り締めた拳から滴った血が、父の短服の裾を汚していた。

歳の離れた兄は、真っ先に、ともに遠くへ逃げようと言ってくれた。邑での暮らしを疎み、仕事を投げ出しては実直な父と言い合いを繰り返していた人だった。

差し伸べた手を拒めば、兄は、なぜだ、なぜ、と狂ったように叫んだ。妹を贄とした母を責め、妹を守ろうとしない父を責め、あらがうことなく自分の運命を受け入れた妹を責め、無力な己を責めながら泣き喚いた。

普段から、会話の少ない兄妹だった。嫌われているのかもしれないと思ったこともある。でも、気付かなかっただけで、ちゃんと愛されていたのだ。だ

から、悲しみや死への恐怖よりも、胸に宿る温かな気持ちが勝った。

別れを惜しむように、行列は殊更ゆっくりと進んでいく。

辺りに邑人たちの姿はない。守り神は人の気配があると、けっして姿を現さないと言い伝えられている。邑内ならばよいのではないかとも思うが、知り合いを見つけて、覚悟が揺らいでしまうのも恐かった。だから、誰も外に出てはいけないという取り決めは、少女にとってありがたいものでもあった。少女を運ぶ男たちも、祭壇に少女を置けば、すぐ邑に戻る手筈となっていた。

生温い風が、重く垂れた帳を揺らす。隙間から外を見れば、邑からだいぶ離れたことがわかった。大人の腰まで高さのある草が行く手を遮るように生い茂り、男たちは白い袍を泥で汚しながら、小高い丘を登っていく。

輿を担ぐ初老の男が、雨音に紛れ嗚咽を零してい

た。

少女を幼い頃から自分の孫のように可愛がってくれた翁だ。息子夫婦と反りが合わず、一人で暮らすと息巻いては少女の父や邑長に宥められていた。自分にも他人にも厳しい人だったが、子供にだけは優しかった。

もう二度とあの節くれ立った手で、優しく頭を撫でられることもないのだと、少女は一抹の寂しさを感じた。

その前で担ぐのは、今年に入って隣邑から妻を迎えた青年だった。

面倒見のいい青年で、少女も幼い頃によく遊んでもらった。妻となった娘は小柄で気立てがよく、腹にはすでに子が宿っていた。

「まだ産まれないの？」と、顔を合わせる度に訊いては、「雪が降り始める頃には会えるわよ」と、飽きることなく答えてくれた。

今か今かと楽しみにしていたのに、けっきょく会

えなくなってしまった。せめて、男児か女児かは知りたかった。

小さな邑だ。輿を担ぐ者は、みな見覚えのある顔ばかりだった。

やがて揺れが収まった。祭壇が設けられた崖につい たのだろう。輿から抱きかかえられるように運ばれた少女は、縄で体をくくられ、断崖の下へと降ろされた。

ごつごつとした岩肌は雨で滑りがよくなっている。断崖に吹く風が、少女の華奢な体を大きく左右に揺らす。「目を瞑っていろ。絶対に開けるんじゃないぞ」という邑人の言葉に従い、少女は強く目を閉じた。

重みで縄が体に食い込み、圧迫するような痛みが広がる。思わず呻き声が漏れた。必死に耐えていると、やがて体が受け止められた。恐る恐る目を開ければ、縄梯子で先に降りた男たちによって祭壇に運ばれているところだった。

祭壇といっても、邑に伝わってきた豪華な輿とは違い、板で作られた供物台に古びた莫蓙が敷かれているだけの簡素なものだ。

祭壇が設けられたのは、崖を降りたところにある平らな大岩の上だった。激しさを増した川はすぐ傍まで迫り、雨音を掻き消すほどの轟音に、男たちの顔も強張っていた。このまま雨が降り続けば、おそらく一日と経たずに祭壇は濁流に呑み込まれてしまうだろう。

莫蓙に降ろされると、手足を拘束する枷から伸びた鎖が、岩の裂け目に杭で打ちつけられた。木槌が何度も振り下ろされ、やがて音が止む。

「――大人しくしているのだぞ」

言い含めるように告げたのは、邑長だった。白髪交じりの髪は、ここ数日でさらに白さを増したように思う。厳格な人だったが、邑の子供たちには優しかった。

「けっして逃げようとは思うな。邑を救うには、こ

れしかないんだ」

そう言うと、邑長は気まずげに少女から目を逸らせた。わざわざ念を押す必要もないだろうに、と少女は胸中で嘆息した。この状況で、どうすれば逃げられるというのか。それに、逃げれば家族の立場が悪くなる。

少女が暮らす国は他国との小競り合いに疲弊しつつあった。邑からも若者が徴兵され、未だ戻った者は一人もいない。

戦況は不明だが、国に納める年貢の量は確実に増え続けている。今年はなんとか凌げたが、来年はどうなるかわからない。一度でも不作となれば、生活はかなり厳しくなるだろう、と大人たちは不安げに語っていた。

そこに、この長雨である。洪水が起これば、田や畑は全滅だ。

家屋にも被害がでる。死者だって、でる可能性がある。それでも、役人は手を差し伸べるどころか、容赦なく年貢を取り立てて行くはずだ。そうしなければ、逆に彼らが飢えることになる。辛いのは、誰も同じなのだ。

男たちは守り神に深い祈りを捧げると、少女を置いて次々と崖を登って行った。縄梯子も回収され、地鳴りのような水音が響く渓谷に少女だけが取り残される。

「……いっそのこと、ひと思いに殺してくれた方が楽なのに」

いつ訪れるかわからない死を待ち続けるのは、酷く疲れる。むしろ、さっさと濁流に身を投げた方が苦しまずにすむのではないかと思う。

少女は背を小さく丸めた。そうでもしなければ、ずっと押さえ込んでいた死への恐怖と、やり場のない怒りに、喚き散らしそうだった。必死に落ち着こうとしても、渓谷に反響する轟音が少女の心を掻き乱す。指先が震え、涙が滲む。

死にたくない。助けて、と両親の前ではけっして

口にしなかった言葉が漏れそうになった。その時だった。

「――生きてるか！」

頭上から声が響いた。兄の声だ。少女は己の耳を疑ったが、振り返れば風に煽られながらも縄梯子を伝って降りてくる兄の姿があった。

「兄様……」

「無事か。くそっ、なんだこの鎖は！」

少女の傍に駆け寄った青年は、岩場に打ちつけられた杭から伸びる鉄鎖に顔を顰めた。

十七歳になったばかりの兄は、上背もあり、大人に混じっても遜色がない逞しい体つきをしている。顔は寡黙な父にそっくりだが、気性の激しさは母に通じるところがあった。

身にまとっているのは、薄汚れた灰色の短服だ。長い間、雨に打たれていたようで、全身がずぶ濡れになっていた。

輿を運んできた男たちが立ち去るのを近くで見張っていたのだろう。

「どうして、ここに」

「助けに来たんだよ」

「えっ！」

妹を見殺しにできるか、と兄は吐き捨てるように言った。少女を縛める鎖を断ち切ろうと、刀を取り出す。

「この激流だ、死体があがんなくてもおかしくはねえ。お前はこのまま、俺と一緒に邑を出るんだ」

「ここを？」

「ああ」

鉄鎖に刃を突き立てながら、兄は少女を安心させるように笑みを浮かべて見せた。それを信じられない思いで見つめる。

「俺だけじゃなくて、仲間もいる。お前も小静は知ってるだろ。管小父さんの息子だ。あとは、お前も知らねえだろうけど、みんな気のいい奴らだ。都に出れば、きっとなんとかなる。いや、俺がなんとか

してみせる。だから、なにも心配しなくていい。安心してついて来い」

岩肌に打ちつける濁流は、二人を呑み込まんばかりの勢いで荒れ狂っている。その激しい音を切り裂くように、兄は渾身の力で鉄鎖に刀を打ち続けた。

だが、いつまで経っても傷をつけるくらいしかできないと悟ったのだろう。舌打ちして、頭上を仰ぐ。

「ちっ、これじゃだめか。待ってろ、上にいる仲間に言って、もっと頑丈なやつを――」

「兄様！」

少女は兄の言葉を遮るように叫んだ。そして、首を横に振る。

「私は、ここに残る」

「馬鹿！　死にたいのか！」

少女は歯を食い縛った。死にたくない。死にたくなんかない。でも、だからといって兄と逃げるわけにはいかなかった。

「私が贄になれば、邑は助かる。そういう卦がでたからこそ、私はここにいるんだ。私が逃げたら、邑は助からない」

「お前は、自分の娘を見殺しにするような女の言葉を信じるのか！」

激昂する兄に、少女は顔を歪めた。

たとえ己の命が危うかろうと、占の卦を偽ってはならない――それが占師としての戒めだ。だから、母は正直に告げたのだ。それで、娘を失うことになるとわかっていても。

「母様は立派な占師だ」

「ああ、そうだな。だが、占師としては一流でも、母親としては最低だ」

母を責める兄に、少女は目を伏せた。もしも自分が同じ境遇に置かれたら、どうしただろうか。母と同じように占師としての使命を優先させたか、それとも、子供のために卦を偽ったか。

どちらにせよ、辛いことだ。占師として守ってきた邑を取るか、それとも跡継ぎにと育ててきた娘を

取るか。

「……それでも、私はここに残る。そう決めたんだ」

先ほどよりも、水面が近付いていた。きっと、そう経たずして、この岩場は濁流に呑み込まれてしまうだろう。ならば、自分にできることは一つだ。

「兄様には私のぶんも生きてほしい。兄様は都に出ても、やっていけるよ。まじめに畑を耕している兄様の姿は、ちょっとおかしかった」

この国の未来は明るいものではない——少女の母は、暗い表情でそう告げた。

国には、人と同じで寿命というものがある。どれだけ栄華を誇っても、いずれは衰退していく運命なのだ。

「兄様の未来。占って、あげられたらよかったんだけど」

少女が困ったように笑えば、兄は涙を堪えるように俯いた。そして、両腕で少女の肩を摑みながら震える声で言う。

「……お前だって、立派な占師になりたかったんだろ。そのために、毎日、あんなに遅くまで頑張ってたじゃないか」

「うん」

母親のような、誰からも頼りにされるような占師になりたかった。

だから、自分に占師としての才があるとわかった時は、心底嬉しかった。

「占師になって、母様みたいに人の役に立ちたかった」

「なら！」

少女は空に向かって叫んだ。

「でも、邑の人たちを犠牲にしてまでなりたくなんてない！」

死にたくなかった。

だが、それ以上に邑を守りたかった。ずっと我慢していた涙が想いと共に零れ、頬を伝う。どれほど恐ろしくても、どれほど悲しくても、逃げることだ

けはできない。

「私はここにいなきゃいけないんだ！」

自分が犠牲となれば、大事な人たちを守ることができる。なんという皮肉だと、少女は己の運命を何度も呪った。

たとえ河川の氾濫で、邑が被害を受けたとしても、それは誰のせいでもない。

だが、自分が犠牲となることで邑が救われると知っていたならば——知っていて逃げた結果、大切な人たちが死んでしまったら、少女は自分を責めずにはいられないだろう。

「……なんでだよ。占は、人を助けるもんだろ。どうして誰かを助けるために、他の誰かが犠牲になんなきゃなんねぇんだよ！」

兄は少女を抱き締めながら泣いた。

やがて、いつまで経っても戻ってこない青年を心配したのか、縄梯子を伝い仲間たちが降りてきた。彼らは少女の意志が固いことを悟ったのだろう。妹から離れない兄を強引に縛り上げ、崖を登って行ってしまった。

水面はもうすぐそこまで迫っている。だが、不思議と心は凪いでいた。

死に対する恐れはある。しかし、ここに連れて来られた時のような、喚き散らしたくなるような衝動はきれいに消えていた。

足に雨よりも冷たい感触を覚えた。荒れ狂う河川が、岩場を乗り越え迫ろうとしている。少女はそれを祈るような気持ちで見つめた。

母の、占師としての腕は確かだ。

これで邑は救われるのだろう。否、救われてくれなければ困る。

少女はすべてを受け入れるように、ゆっくりと目を閉じた。濁流に呑まれる寸前。少女は「春蘭！」と叫ぶ兄の声を聞いた気がした。



小鳥の囀りで、李春蘭は目を覚ました。
どうやら、揺り椅子に座ったままうたた寝をしてしまったようだ。こんなところを紅燕に見られたら、文句を言われてしまう。
今日は、病に罹った者たちを寝かせていた房室の掃除を頼まれていたのだ。祥琳と蒼羽が、先に始めているかもしれない。どうせなら、一言声をかけてくれればいいものを。
「早く、行かなくては……」
揺り椅子から立ち上がったところで、春蘭は違和感に気付いた。
房室の中央にある円卓には、干し杏や葡萄が盛られた白い陶器の平皿と、手のひらに収まる大きさの茶器が置かれている。
壁に目を向ければ、複雑な形に組み上げられた格子窓から光が差し込み、床に見事な牡丹の影絵を描いていた。
他に調度品と呼べる物はないが、それは春蘭が不要だと告げたからだ。
「……そうか、ここは」
妓楼ではないのだな、と春蘭は脱力する。
もう一度ゆっくりと揺り椅子に体を沈め、天井を見上げた。
後宮に来てから、五日が経った。
宮中で開かれた宴に、春蘭が占師として働いている黄海楼の妓女たちが呼ばれた。春蘭も占の腕を見せることになったが、〝謎の占師〟を謳っていたため、妓楼の者を占師に扮させ、自身は介添えの振りをして占を行った。

しかし、それを観ていた皇帝が春蘭を気に入り、傍にと命じた。猩猩緋と称する賊徒が宴を襲ったのは、その直後のことである。混乱のさなか、春蘭は命の危機に瀕しながらも無事に宮中から逃れることができた。

妓楼の者たちと合流したまではよかったのだが、すぐに兵士たちに囲まれ、皇帝の命令で後宮に召されてしまったのだ。

以前、春蘭は一度だけこの場所に忍び込んだことがあった。

華安を騒がせていた、攫猿と呼ばれる妖が退治された頃だ。まさか、自分が妾として後宮に入れられるとは思ってもみなかった。

連れて来られた先に待っていたのは、数名の侍女だった。

逃げる際に汚れた襦裙をはぎ取られ、火傷しそうな熱い湯で体を洗われた。それまで着ていた服の代わりにと用意されたのは、あまりにも華やかな衣裳で、春蘭のもっと簡素で動きやすいものがいい、という主張はついぞ受け入れられることはなかった。

おかげで今も、紅色の上衣に花びらのように広がる白い下衣、腰裙には大輪の牡丹が刺繍されたものを合わせられ、さらに金糸を複雑に編んだ腰紐が結ばれていた。

髪も自分では解くことができないくらい複雑に結い上げられ、きらびやかな簪で彩られている。頭が重いと苦情を言っても、「おきれいですよ」の一言で終わってしまった。

唯一、化粧だけは頑なに拒み、紅を軽くさすだけに留めることができた。なぜ、妃妾たちは先を争うようにして、真っ白な粉を顔に塗りたくるのだろうか。未だに疑問である。

飾り立てられた春蘭が案内されたのは、高価な調度品で飾られた房室だった。黄玉宮の一室です、と説明を受けたが、後宮の配置がわからない春蘭は首を傾げるしかなかった。

しかし、そこで寝起きしたのは一日だけで、次の日には、さらに広く、日当たりもよい室に移動することになった。室数もあり、いつの間にか侍女の数も増えていた。

妃妾は誰もがこのような好遇を受けているのだろうかと驚いたが、わけはすぐに明らかとなった。以前、後宮で顔を合わせた人物と、宴で占った妃妾が便宜を図ってくれていたのだ。

後者はわかるが、なぜ前者が手を差し伸べてくれたのかは不明である。彼女にとって秘密を知る春蘭は邪魔な存在でしかないはずだ。刺客を送り込まれる可能性まで考えていたのだが、それは杞憂だったようだ。

「それにしても、疲れた……」

窓からは心地よい風が入ってくる。そこから見える、壁に囲まれた小さな中庭は春蘭に与えられたものであり、真ん中に植えられた紅葉の木が、青々とした葉を茂らせていた。秋ともなれば、室内から風流な景色を楽しむことができるだろう。

もっとも、一日中ここに閉じ籠められている春蘭にしてみれば、新鮮味は薄れ、見慣れたものとなってしまったが。

だが、ここから出るのも問題があった。

皇帝自らが後宮に招いたという噂は瞬く間に広まったようで、廊下を歩くだけで妃妾や宦官らの注目を浴びてしまうのだ。

遠巻きにしている者はまだいい方で、好戦的な妃妾と顔を合わせようものなら、容赦のない言葉が浴びせかけられる。後宮にやってきた初日に、嫌というほど味わわされた。それで傷つくほどの繊細さは持ち合わせていないが、不愉快であることに変わりはない。

――それでも、皇帝に呼ばれないだけましか。

それさえなければ、これ以上、妃妾たちの嫉妬心をむだに煽ることもない。そもそも、皇帝はそういった意味で、春蘭を後宮に召し上げたわけではない

のだ。

春蘭は皇帝の言うところの、大魚を釣り上げるための餌である。理由は不明だが、皇帝はさらなる強敵を求めているように見えた。

春蘭自身もまた、安全な避難場所という理由で、後宮に留まることを選んだ。

とある邑の守り神であった春蘭から〝真名〟を奪った男、鄭玄楽。目的は未だにわからないが、春蘭を捕らえて隷属させ、その力を利用しようとしていることは明らかだ。そして、悔しいが守り神としての力を封じた春蘭では気術を使う玄楽に勝てない。警備の厳重な後宮ならば、玄楽も簡単に乗り込んでは来られないだろう。

「目的、か」

春蘭は天井を見上げながら呟いた。守り神の力は、人間の体には耐えられぬほど強力なものだ。たとえ春蘭を隷属させたところで、一日と持たずに玄楽は死ぬ。しかし、玄楽はそうと知っていて、力を望んでいる。

己の命を犠牲にしてまで成し遂げたいこととは、いったいなんなのだろうか。

「まあ、奴が猩猩緋の一員であったことは驚きだが……」

民衆の間で義賊として持て囃される猩猩緋。先日の襲撃のさなか、春蘭の前に現れた玄楽は、猩猩緋の証である深紅の布を腕に結んでいた。義賊の一員である鬼面の人物と行動を共にしていたことから、まず間違いはないだろう。

「む。となると、黎貴妃は玄楽のことを知っているのか？」

春蘭と本人以外は知らないことだが、黎貴妃は後宮に召される前、猩猩緋の一員として活動していた。しかし、不運なことに、黎貴妃は攫猿に攫われ、そのまま救い出されることなく見捨てられた。

かつての仲間ではあるが、恨んでいるとしても不思議はない。はたして、快く問いに答えてくれるか

どうか――。

春蘭は嘆息した。考えれば考えるほど、思考の深みに嵌まっていく。

華安に来てから今まで、一度として暇を感じたことはなかった。鄭家に居候していた時は己の食い扶持を稼ぐため、街へ職を探しに出掛け、妓楼にいた時は、占やら復興の手伝いやらと、休んでいる余裕もなかった。

常に誰かが隣にいて、充実した日々に、己の置かれた立場を忘れそうになったことも少なくない。けれど今は、この広い後宮で春蘭は一人だ。お付きの侍女はいるが、気心の知れた相手ではない。自分で望んだこととはいえ、孤独を感じずにはいられなかった。

「――誰か居るか」

ふさぎ込みそうになる気持ちを、払拭しようと声をあげれば、扉の外に控えている蘭明佳が顔を見せた。

二十代前半の、穏やかな雰囲気の女性である。美人と言うほどではないが、愛嬌のある顔立ちだ。体つきは、ほっそりとしている。他にも数名の若い侍女がいるが、春蘭の傍らに控えているのは彼女であることが多かった。

「いかがなさいました？」

「ずいぶんと遅れてしまったが、黎貴妃殿と薛昭儀殿にお礼を申し上げたい。どうすればお会いできるのだ？」

「でしたら、文を差し上げてはいかがでしょうか。私が代筆することもできます」

「直に会いに行ってはだめなのだな？」

「はい。後宮ではよほど親しい間柄でも、不作法と取られてしまいます。気心の知れた方でも、おつきの侍女を通して事前に連絡を差し上げるのが礼儀というものでございます」

「そうか」

郷に入っては郷に従え、という言葉がある。面倒

ではあるが、明佳の言葉に従っていれば間違いはないだろう。

「では、代筆を頼む」

「文面はいかがいたしましょう」

「ぬしに任せる」

「かしこまりました」

侍女たちを呼んだ明佳はてきぱきと指示を出し、ついでとばかりに冷めてしまった茶を煎れなおす。皿の干し果実がさほど減っていないことに気付き、「水菓子をお持ちいたしますか？」と、春蘭に訊ねた。

「いや、充分だ」

至れり尽くせりの環境は楽ではあるが、気の休まる時がない。一人にしてほしいと告げても、姿が見えないだけで明佳の声が届く範囲にいて、常に春蘭に意識を向けている。侍女としては当然のことなのだろうが、慣れない春蘭にとってそれは苦痛でしかなかった。

妓楼にいた時も、周囲には誰かしらの気配はあったが、ここまで神経が過敏になったことはない。それだけ、心を許した相手が多かったのだ。そんなことにすら気付かず、毎日を送っていた。離れた今だからこそわかる。

「……ところで、後宮を見て回りたいのだが」

この五日間、春蘭は怠惰に過ごしていたわけではない。

室を移動してから、衣裳の手配や家具の選定など、春蘭の房室を侍女たちがひっきりなしに出入りしていた。春蘭が直接動くわけではなかったが、あれこれと訊ねてくる侍女への応答に追われていたのだ。それは実に根気のいる作業だった。

そして、五日目にしてようやく解放されたわけだが、気疲れが祟ってか、春蘭は揺り椅子に座ったままうたた寝していた。

だが、そろそろ動き出す必要がある。

重要なのは、後宮の内部を把握することだ。黄玉宮の他にある離宮や、妃妾たちの室、厨房などと

いった大まかな配置を確認しておけば、万が一、玄楽が忍び込んできた際に助けとなる。なにも知らないまま逃げ惑い、飛び込んだ先が行き止まりという事態は避けなければならない。

「春蘭様。お暇でしたら、お気晴らしをお持ちいたしましょうか？」

「遊びたいわけではない。気晴らしに散歩したいだけだ」

「散歩、でございますか……」

明佳がわずかに眉を寄せた。どうやら、室から出るのは歓迎されないらしい。

先の宴が猩猩緋に襲撃された際、春蘭は妃妾の一人に殺されそうになった。皇帝が春蘭に興味を示したからだ。妃妾は憎々しげな表情で、「これ以上、陛下の寵を受ける者は邪魔なのよ」と吐き捨てるように言っていた。

その言葉から察するに、他の妃妾も似たような感情を抱いている可能性は高い。初日からあの出迎えようだったからな、と春蘭は面倒臭いとばかりに胸中で嘆息した。

ごたごたは極力避けて通りたいが、だからといって、いつまでも室に閉じ籠もってばかりもいられない。

「私は命を狙われているのか？」

「いえ、そういうわけでは……」

明佳は言い淀む。春蘭を気遣って、率直な物言いを避けているようだ。

「ただ、春蘭様は未だ後宮における位が定まっておりません。自分より上にいかれては、と思う方々に嫌がらせをされるかと」

「どの程度のものか？」

「……嫌なことを言われたり、お衣裳を汚されたり、でしょうか」

「嫌味は初日にたんと貰ったぞ。危害を加えられる恐れはあるのか？」

「春蘭様は、黎貴妃様と薛昭儀様が目をかけている

方ですので、さすがに表立ってそこまでなさる方はいらっしゃらないかと」
「ふむ。たとえば、私が陛下に寵愛されたらどうなる？」
「その場合ですと、けっして室から出られない方がよろしいかと」
即答である。もっとも、万が一にもそのようなことはありえないのだが、明佳の表情は真剣そのものであった。
「なに、言葉での嫌がらせくらいならば問題はない」
「ですが……」
「室の周りを見るだけでもだめなのか？」
明佳の顔が葛藤に揺れ動く。わずかな逡巡のち、苦渋の決断であると感じさせるような声で、「本当に周りだけですか？」と言った。
「約束する」
「……わかりました」

退出した明佳は、しばらくして一人の男性を伴い戻ってきた。
「宦官の陳安世です」
「初めまして、春蘭様」
ゆっくりとした動作で拱手する安世は、これといって特徴のない人物だった。
年齢は三十歳くらいだろうか。背は低く、明佳とさほど変わらない。体つきはふくよかで、背丈の割には大柄に見えた。
宦官は、後宮の様々な雑務に携わる存在だ。皇帝以外の男子の立ち入りを禁じる場所のため、子を為せないように体の一部に特殊な処理を施されている。三百年以上前から続く制度で、春蘭も人であった頃、噂として聞いた覚えがある。
「この者がご案内いたします」
「よろしく頼む」
春蘭がそう言えば、安世はおっとりとした仕草で「かしこまりました」と頷いた。

「では、行くか」
　椅子から立ち上がると、不意に春蘭の視界がぐらりと揺れる。尻餅をつきそうになるが、とっさに椅子の肘掛けを摑み難を逃れた。
「……すまぬが、頭の飾りを減らしてくれぬか」
　妓楼で占師として働いていた時も、思わずふらつきそうになるくらい着飾らされたものだ。まさかここでも似たような目に遭おうとは。苦笑して告げれば、明佳は慌てて春蘭の髪から大振りの簪を抜き取った。
　黄海楼では、「それくらい耐えて当然」と言われたものだ。懐かしさが込みあげ、春蘭は気付かれないように唇を嚙み締めた。
　――こんな些細なことで動揺していてはだめだ。
　玄楽に居場所を知られてしまった以上、もう二度と黄海楼には戻れない。それに、真名さえ取り戻してしまえば、華安に用はない。いずれにせよ、別れる運命なのだ。己にそう言い聞かせることで、春蘭は胸に湧いた未練を断ち切った。

　後宮は、内装だけを見れば、身分のある者の邸宅とさほど代わりはなかった。ただ、その規模は小さな街に匹敵するが。
　春蘭が働いていた黄海楼も室の数は多かったが、ここは比べること自体が無意味だ。
「東西南北にそれぞれ四夫人が住まわれる離宮があり、黄玉宮はその中心に位置します。ここでは九嬪より下の妃妾様方や、後宮で働く下女、屋敷を持たない宦官たちが暮らしています」
　安世は春蘭の一歩前を歩き、後宮の説明する。
　春蘭たちがいるのは、宛がわれた室からそう離れていない回廊だ。右手には手入れの施された中庭があり、季節の花が彩りを添えている。
「見事な庭園だな」
　春蘭は感嘆の声をあげ、辺りを見回した。随所に

趣の異なった中庭が点在しているようだ。
「先帝陛下のご趣味です」
「ふむ」
「それまでの後宮は、この半分ほどしかございませんでした。先帝の時代、妃妾様が増えるに従い、これほどの規模となったのです。妃妾様だけでなく、宦官や侍女、下女も、今とは比べものにならない数の者が暮らしていたものです」
「大変そうだな」
女同士のいがみ合いもだが、後宮を維持するための資金は相当なものだったに違いない。国民の怨嗟は先帝の時代から少しずつ膨れあがっていたのではないだろうか。
「ここにいた者たちはどうなったのだ？」
「陛下が帝位に就かれた際に、大半の妃妾は暇を出されました。宦官や侍女、下女もふるいにかけられ、先帝陛下の時代からここに残っている方は、ほんの一握りとなっております」
安世の説明に耳を傾けながら、春蘭は中庭を眺めた。甘い花の香りに誘われたのか、一匹の白い蝶が宙を舞っていた。
「では、ぬしも先帝の時代からここにおるのか」
「……どうして、そう思われたのですか？」
「まるで見てきたように説明するのでな。なんとなくそう感じたのだ」
間違っていたらすまぬ、と春蘭が告げれば、返ってきたのは苦笑だった。正解かどうか、答えるつもりはないようだ。
詮索するつもりのない春蘭は、たまに回廊を横切っていく宦官を観察しながら辺りを見回す。すると、頭上から不思議そうな声が響いた。
「……春蘭様は、宦官に知り合いでもおられるのですか？」
「いや。知る者はいないが、なぜそんなことを訊く？」
「先ほどから、宦官ばかりを目で追っておられまし

たので。誰か捜されているのか、と」

　指摘されて、春蘭は思わず己の行動に溜息をつきたくなった。ここにいるはずもない人物の姿を、無意識に捜していたようだ。

　差し伸べられた手を拒んだのは、他ならぬ春蘭自身だ。それなのに、姿を捜してしまう。華安に辿り着いた時は、すべて自分一人の力で解決する気でいたのに。いつの間に、こんなにも弱くなってしまったのかと、春蘭は自嘲した。

「ここ数日、室に閉じ籠もりきりだったのでな。侍女以外の姿が珍しかったのだ」

「そうでございましたか……あ、春蘭様。こちらにどうぞ」

　なにかに気付いた安世が、春蘭の手を引く。柱の陰に隠れるように身を潜めると、突き当たりの回廊から女性の集団が姿を現した。誰もがきらびやかに着飾っているため、一目で妃妾であるということがわかる。

　会話の内容までは聞こえなかったが、楽しげな笑い声が中庭に響いている。春蘭たちが柱の陰で息を殺していると、一団はこちらに気付くことなく去って行った。

　しばらくして、安世は安全を確認するように辺りを窺う。

「……大丈夫のようですね。春蘭様、こちらへ」

「あの者たちと、顔を合わせてはまずいのか？」

「できるだけ他の妃妾様と会わせないように、と仰せつかっておりますので」

　どうやら、明佳にしっかりと言いつけられているようだ。春蘭もできれば面倒事は避けて通りたかったので、安世にすべて任せることにする。

「ちなみに、この辺りは黄玉宮のどこに当たるのだ？」

　春蘭は辺りを眺め回しながら質問した。安世は春蘭にもわかりやすいよう、噛み砕いて説明してくれる。

「九嬪の間は、黄玉宮の西側に当たります。この辺りは出歩いても、あまり妃妾様方とは顔を合わせないのですが……。あのご様子では、どなたかのところで茶会でも開かれていたのでしょうね」
「どういう意味だ？」
「本来ならば、この辺りは九嬪の位にある妃妾様方が住む所なのですが、ほとんどの方がご自身の主張で別の室に移ってしまわれまして。空き室が多いのです」
――なぜ、移る必要があるのか。
春蘭が首を捻っていると、安世は困ったような顔つきで告げた。
「九嬪の間は、西離宮に近いのですよ。その主である黎貴妃様を恐れているのです。些細なことでも、黎貴妃様のご機嫌を損ねるようなことがあれば首が飛ぶ、と。これは、春蘭様には不要の心配でしょうが」
「それほど恐れられているのか」
「黎貴妃様にまつわる話は、大半が根拠のない噂ばかりです。ですが、ここでは真偽のほどがわからぬ噂でも、平然と真実のように語られてしまうのですよ」
ご不快になられたでしょう、と安世は春蘭を気遣う。だが、後宮で暮らす以上、その手の話は面倒でも覚えておく必要があった。
「ところで、春蘭様は黎貴妃様とご面識が？」
「さて。それは私の口からは言えぬな」
春蘭は皇帝に見いだされ、後宮に召されたというのが周囲の認識だ。そこに黎貴妃との接点はない。下手に説明するよりは、適当に言葉を濁した方が無難だろう。
「続きを案内してくれ」
「これ以上ですと、春蘭様の室から離れてしまうことに……」
「せっかくだ、もう少しくらいかまわぬだろう。明佳には、あとで私から謝罪しておく」

安世の説明で、後宮内部の配置、それと己に宛がわれた室の位置はだいたいわかった。

しかし、逃走経路の見定めまでには至っていない。五日を無駄に過ごしてしまった手前、早急にことを進める必要があった。せめてもう少し、探索する範囲を広げておきたかった。

「……そこまでおっしゃるのなら。本当にあと少しだけですよ」

「うむ」

諦めた様子で安世は歩き出した。そのあとを、春蘭は長い裳裾を引き摺りながら続く。

中庭に面した回廊を抜け、辿り着いたのは幅も長さもある廊下だった。今までの人気のなさが嘘のように、そこは人々で賑わっている。

「黄玉宮で働く侍女や下女、宦官たちです。ここは主に裏方を担う者たちの通路となっています」

「忙しそうだな」

料理を運ぶ侍女や、両手に巻物を抱えている宦官、洗濯籠を運ぶ下女などが慌ただしく通り過ぎていく。肩がぶつかるなどの出来事はよくあるようで、時折、怒号のような叫びが響いていた。街の大路でも見られる光景だ。

「もしも、他の妃妾様方に強引にどこかへ連れて行かれそうになったら、ここへ逃げ込んでください。あの方たちは、人目があるところで酷いことはしませんから」

「ここ以外ではだめなのか？」

「裏方の者がたくさん集まっている場所の方が好ましいですね。二十七世婦以下の妃妾様方のところですと、逆に便乗しそうですので」

「確かに。私はあまり歓迎されてはいないようだからな」

「わかっておいでならば、室からお出にならないのが一番なのですが」

安世の言い分ももっともなのだが、退路を見定めない限り、室に閉じ籠もることはできない。春蘭は

曖昧に微笑み、返答を濁した。

「こちらはどこに続いているのだ？」

室へと戻る途中、春蘭は脇道を見つける度に安世に説明を求めた。

逃げた先が行き止まりでは意味がない。幸いにも先帝のおかげで、四方を回廊で囲まれた中庭の数は多かった。

いざとなれば、屋根に逃げることもできる。行き止まりとなっている廊下さえ選ばなければ、最悪の事態は免れるだろう。

「突き当たりは下女たちの大部屋ですね。といっても、かなり歩かなければなりませんが。途中には書庫もございますよ」

「先ほどと似たような通路か」

後宮では、下女や宦官らが通る廊下と、妃妾たちが通る廊下がある。規則はないが暗黙のうちに棲み分けがなされており、特に下女は許しもなく妃妾の使う廊下を歩いてはならないようだ。

侍女はどちらも使っているが、自分が仕える妃妾の身分によって立ち入ることのできない場所もあるとのことだった。それは妃妾も同様であるらしい。面倒なことだ、と春蘭は思わず呆れた。

「でも、ここを使う人はいません」

「いない？」

「はい。大部屋から、西離宮や春蘭様が住まわれている室への近道でもあるのですが……。不気味な声が聞こえると言い出す者がいまして。気味が悪いと、遠回りしているそうです」

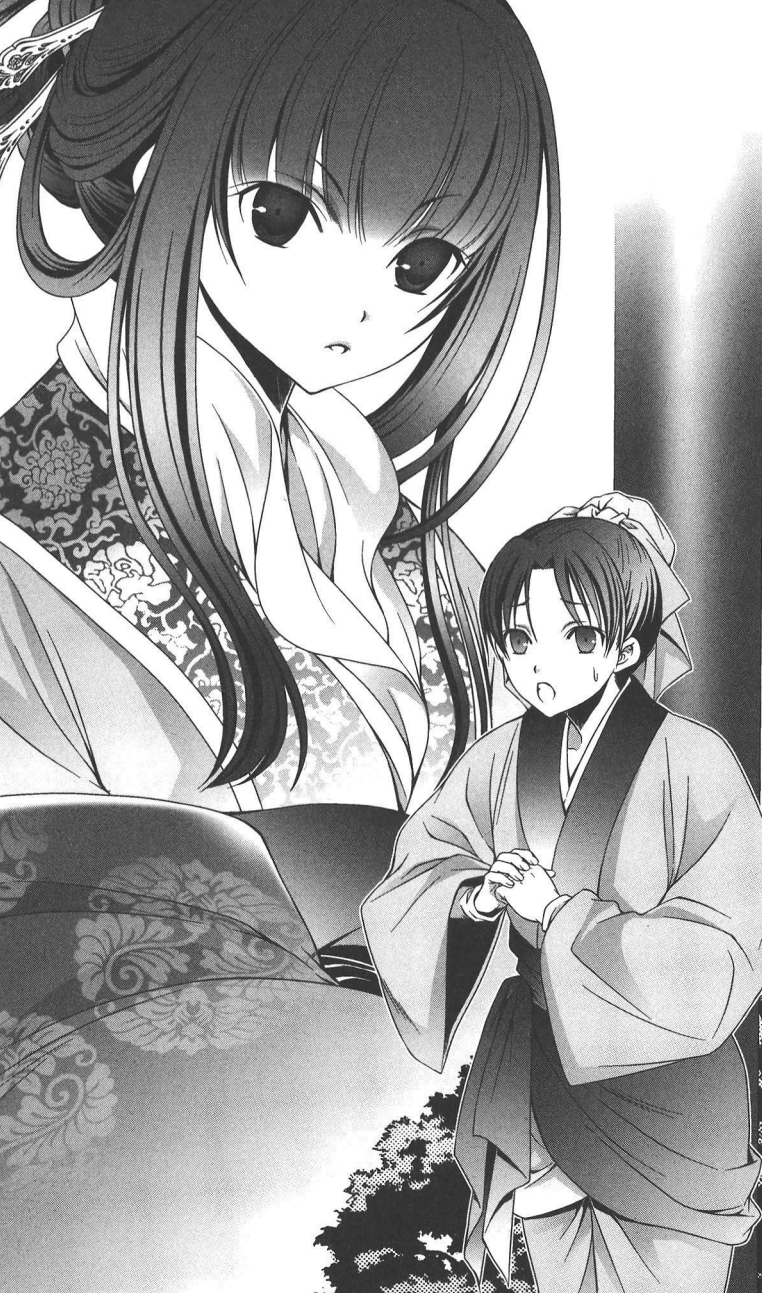
両方の側面を壁に挟まれた廊下は、日が高いにもかかわらず夕暮れ時のように濃い影を落としている。不気味な声が聞こえると言われたら、通りたくなくなるのも道理だろう。

「なにぶん、怪談の類には事欠かない場所ですので」

安世が苦笑した時だった。その廊下の奥から、けたたましい叫び声が響き、続いて小柄な少年が飛び

出して来た。
　歳は春蘭よりも一、二歳下だろうか。可愛らしい顔立ちだが、その表情は傍から見てもわかるほど恐怖に強張っていた。
「あ、安世様！」
　少年は安世の姿を認めるなり、助けを求めるように抱きついた。
　顔は気の毒なほど蒼白で、袍を握り締める手も小刻みに震えている。
「青乎。妃妾様の前ですよ。落ち着きなさい」
　背を撫でるように摩られて、青乎と呼ばれた少年は涙声で頷いた。そして、春蘭に気付き慌てたように安世から離れる。
「す、すみません！」
　焦った様子で拱手する姿に、春蘭は首を傾げた。どこかで見たような顔なのだが、はっきりと思い出すことができない。
「宦官見習いの、陶青乎と申します。お見苦しい様をお目にかけてしまい、申しわけありませんでした」
　改めて謝罪する少年に、春蘭は気にするなと、首を横に振った。
「私は李春蘭という。ところで、さっきの悲鳴はなんだったのだ？」
「ええと……」
　青乎はうろたえながら、許可を求めるように安世を横目で窺った。安世は溜息をつきながら、「お答えしなさい」と答える。眉を下げた青乎は、肩をぶるりと震わせ口を開いた。
「廊下を通っていた時、誰もいないのに声が聞こえたんです。初めは空耳かと思ったのですが……それで噂を思い出して」
「不気味な声が聞こえるというあれか？」
「はい。でも、日中なら大丈夫だろうと思ったんです」
　声が聞こえた時のことを思い出したのか、青乎は

気味悪げに肩を震わせた。
「どんな声なのだ？」
「……よくは聞き取れませんでしたが、呻き声のようなものでした――あ」
青乎は思い出したように声をあげた。そして、真っ青な顔で安世と春蘭を見る。
「ど、どうしましょう。頼まれた書物を置いてきてしまいました……」
どこに、と訊くのは気の毒だろう。不気味な声に驚いて、手にしていた書物を、その場に放り投げてきたに違いない。青乎は縋るような眼差しを安世に向けた。
「あの、安世様、い、一緒に……」
「私は春蘭様を送り届けなければなりません。赤子ではないのですから、自分の撒いた種は自分でなんとかしなさい」
「そ、そんな！」
「大丈夫ですよ。たかが声が聞こえるだけです。襲われたという話はありませんから」
そういう問題じゃないです、と青乎が涙声で訴える。しかし、安世は耳を貸す様子はなく、春蘭を促して歩き出した。
「よいのか？」
「甘やかしていては本人のためにはなりません」
もっともな言い分であるが、安世の顔には〝面倒臭い〟と書いてあるように見える。
背後からは、青乎の情けない声が響いていた。あの様子では、書物を取り戻すのに日暮れまでかかりそうだ。
室に戻ると、明佳はよほど首を長くして待っていたのか、「捜しに行くところでしたわ」と開口一番に小言を述べた。
頼んでいた文は、春蘭が出かけている間に清書が終わり、すでに黎貴妃と薛昭儀つきの侍女に渡し終えたとのことだった。
「明日にでも返答がいただけるでしょう」



「そうか。で、ぬしらはなにを始めようとしているのだ？」

「準備でございます」

明佳は侍女を集め、招待を受けた際の衣裳の選定にかかっていた。今すぐやる必要があるのか、と疑問を口にすれば、「いつお招きを受けてもいいように、今から準備しておく必要があります」と、即答が返ってくる。

妓楼にいた際に、衣裳や髪型、飾りの重要性を嫌というほど語られたが、ここでもか、と春蘭は肩を落とす。

せめて巻き込まれないように寝たふりをしよう。そう心に誓い、春蘭は揺り椅子に身を預けて目を閉じたのだった。

その日の夜半、春蘭は異変を感じた。なにかに呼ばれた気がして目を開ければ、暗闇の中にぼんやりと光る塊があった。

「……白桃？」

呼びかければ、真っ白い大虎が嬉しそうにすり寄ってきた。

白桃は守り神である春蘭の神獣である。先代の守り神から譲り受けたため、力を封じられた今でも自由に呼び出すことができた。

「なにかあったのか？」

普段は腰紐に結わえた玉の中にいる白桃は、春蘭が呼び出すか、主の身に危機が迫った時以外に、自らの意志で外に出ることはほとんどない。

警戒している様子はなく、危険が迫っているわけではなさそうだ。

「バウウゥ」

白桃は、寝台に上半身を起こしている春蘭の寝間着を口に咥えて、軽く引っ張った。どうやら、どこかに連れて行きたいようだ。

「ふむ。なにか見つけたのか？」

「バフ」

そうだよ、と言うように白桃は頷く。眠気はあったが、しかたなく闇の中を手探りで寝台から降りた。

「扉の外には侍女が控えている。あまり物音を立てるでないぞ」

春蘭は卓に置いてあった燭台を持つと、寝室の窓をそっと開けた。月の光に、暗闇が薄れる。四方を壁に囲まれた中庭へと通じる窓は、小柄な春蘭が通るには充分な大きさがあった。

白桃は心得たとばかりに跳躍し、音もなく中庭に降り立った。春蘭も縁に足をかけ、勢いよく飛び降りる。寝間着のため、襦裙よりは動きやすい。白桃の背に跨がる形で着地し、片手でふわふわの背中にしがみついた。

春蘭の準備が整うと、白桃は中庭の低木を足場に屋根へと駆け上った。夜空には雲一つなく、星々が輝きを散らしている。白桃は春蘭の言いつけを守り、足音一つ立てることなく、昼間に通った中庭へと降り立つ。辺りは静まり返っていた。

「ここになにかあるのか？」

春蘭の問いに、白桃は首を横に振って答えた。どうやら、目的の場所はまだ先らしい。迷う素振りもなく、闇に包まれた廊下を奥へ奥へと進んでいく。

「……む。ここは、声がどうとかという廊下ではないか」

暗くて辺りを確認することはできないが、道順を覚えていた春蘭はすぐにあの場所だと気付くことができた。

「バウッ」

白桃は躊躇うことなくその廊下を歩いて行く。恐ろしいとは思わなかったが、なぜ白桃がここへ来たがったのかがわからず、春蘭は首を傾げた。

やがて白桃はなにもない場所で脚を止めた。左右の側面は壁であり、扉も窓もない。背から降りた春蘭は、持ってきた燭台を白桃の前に差し出した。白桃が息を吹きかけると、蠟燭に小さな火が灯る。

「さて、そなたはどうしてここに、私を連れて来たのだ？」

　すると白桃は、前脚で壁を引っ掻いた。春蘭を見て、また引っ掻く。

「壁になにかあるのか」

「バウゥ」

　正解だとばかりに、白桃が頷いた。しかし、見たところなんの変哲もない白塗りの壁である。試しに手で押したり、叩いたりしてみるが変化はなかった。

「そういえば、なにか聞こえるな」

　低く掠れたような音だ。聞きようによっては、話し声のようにも取れる。だが、風の音だと言われれば頷けるほど曖昧なものだ。

　しばらく耳を傾けていると、その声はぷつりと止んでしまった。

「……ずっと聞こえているわけではなさそうだな」

　燭台の明かりで壁の隅をくまなく照らしていると、床と壁の隙間に埃が溜まっているところと、溜まっていないところがあることに気付いた。

「そういえば、床も汚れているな」

　噂に怯えた者が、掃除を怠ったのだろう。明かりで照らしてみれば、廊下の両脇にうっすらと白く埃が積もっていた。

「ふむ」

　一部分だけ埃が積もっていないというのも不自然だ。春蘭は埃がない場所から壁に沿って、ゆっくりと手のひらを這わせた。

　すると、わずかに窪んだ箇所を見つける。ちょうど春蘭の視線の高さだ。そこに力を込めれば、壁はあっけなく内側に開いた。

「おお、やったぞ」

「ガウ」

　白桃も嬉しげに尻尾を揺らす。燭台を翳せば、細長い通路が奥へと続いていた。突き当たりまでだいぶ距離があるのか、その先を見通すことはできない。

「どこへ続いているのだろうな」

するりと体を滑り込ませた白桃が、春蘭を先導するように歩き出す。そして、壁の入り口からそう遠くないところで脚を止めた。

「ここか？」

通路の側面には、扉のない土間があった。その手前で白桃は行儀よくお座りしている。愛らしい姿に、春蘭は顔を綻ばせた。

「どれ」

室内に入り、春蘭は燭台で辺りを照らした。そこは思った以上に狭く天井も低い。空気が淀んでいて、黴臭さが鼻についた。

なにもないな、と思った時だった。春蘭は隅で蹲る黒い塊に気付いた。

「人、か？」

慌てて駆け寄れば、それが見知った人物であることに気付く。少女のような外見と、肩の辺りで切り揃えられた髪。華安の守り神を訪ねた際、春蘭たちを襲った人物の一人だ。

猩猩緋の一員で、確か冬雁と呼ばれていた。どうやら白桃は、昼間の散策中に彼女の匂いに気付いていたようだ。

冬雁は四肢を鉄鎖で拘束された状態で転がされていた。口には猿轡をはめられ、目も分厚い布で覆われている。

「生きているのか？」

ぴくりとも動かない相手に、春蘭は燭台を土間に置いて冬雁の目隠しと猿轡を外した。きつく結ばれていたせいで、白い肌には赤い痕がくっきりと残っている。

「しっかりせい」

首筋に手を当てれば、微かにだが脈が感じられた。死体ではないことにほっとし、春蘭は冬雁の頬を軽く叩いた。

「うっ……」

「気付いたか？」

春蘭は寝間着の袖で、顔についた汚れをきれいに

拭いた。目を開けた冬雁は、意識がぼんやりとしているのか何度か瞬きを繰り返している。やがて春蘭と白桃の姿を認識したのだろう。ありえないものでも見たかのような顔つきで声を荒らげた。

「――貴様はっ！」

冬雁は焦ったように距離を取ろうとするが、動けるわけもなく、四肢を縛めている鉄鎖が音を立てただけだった。

周囲を忙しなく見回したあと、冬雁は改めてこちらに顔を向けた。

「ここはどこだ」

「落ち着け。私はぬしに危害を加えぬ」

「……信じられるか」

冬雁は横たわったまま春蘭を睨みつけた。だが、その瞳にはわずかに怯えが滲んでいる。

「貴様は何者だ」

「ああ、ぬしはあの場にいたのだったな」

呪に囚われていた華安の守り神を救うため、春蘭は危険を承知で守り神に戻った。冬雁には、春蘭が光を放ち忽然と姿を消したかのように見えたはずだ。警戒するのも当然である。

「今は力のない人間だ。そう警戒せずともよい」

「なぜ、ここにいる。貴様もあいつらの仲間か」

「あいつら？」

「私を捕らえた者たちだ」

「違う、と否定しておこう」

なおも疑いの籠もった視線を寄越す冬雁に、春蘭は肩を竦めて見せた。

「私がぬしを捕らえる理由は？」

「それは……」

冬雁の気持ちもわからなくはない。どこともつかない場所で、四肢を拘束されているのだ。視界に入った相手を疑うのも当然だろう。

春蘭は黙り込んでしまった冬雁の体を、ゆっくりと起こしてやった。

「ぬしは、ここが何処かわかっているのか？」

「宮中……紫宝宮の隠し通路のどこかだ」
「ふむ。通路は様々な場所に繋がっているようだな。ちなみに、ここは後宮の中だ。黄玉宮という場所になる」
　予想もしていなかっただろう言葉に、冬雁は困惑に眉を寄せ、春蘭を凝視している。それならば、なぜ春蘭がここにいるのか、疑問に思ったのだろう。
「私は運悪く皇帝の目に留まってな。妃妾として、後宮に入れられてしまったのだ」
「こんなに、幼いのに、か？」
　冬雁の目に同情の色が宿った。もっとも、春蘭が後宮に召された理由は別にあるのだが、それはあえて口にはしなかった。
　いつ冬雁を捕らえた者が様子を見にやってきてもおかしくはない状況下で、悠長に説明している余裕はない。
「ぬしはなぜここに？」
「……言えない」
「猩猩緋の任務か」
　返ってきたのは沈黙だ。十中八九、猩猩緋絡みで間違いない。どうやら、冬雁は嘘のつけない性格のようだ。
「まあ、言いたくないことをむりに訊く気はない。とりあえず、拘束しているということは殺すつもりはなさそうだな」
　今のところは、と春蘭は付け加えた。衰弱しているようではあるが、血の匂いは感じられない。「尋問は受けなかったか？」という春蘭の問いに、冬雁は首を横に振った。
「尋問を受けたことはない。日に一度、食事も運ばれてくる。頼めば厠にも連れて行ってもらえる……ただ、妙な薬は飲まされた。わずかだが手足に痺れを感じるのはそのせいだろう。確かに、私を殺す気はないようだ」
「一目見れば、ぬしが猩猩緋であることはわかる。忍び込んだ目的も、わざわざ訊かずともわかってい

たのかもしれぬな」

冬雁の腕には赤い布が巻いてある。街の子供でも、それがなんの証なのか答えられるだろう。

「助けてやりたいのはやまやまなのだが、さすがに白桃の牙でも鉄鎖は食い千切れぬ」

木枷であれば、なんとかしようもあったかもしれないが、冬雁の四肢を拘束するのは鉄でできた鎖だ。手首と足首の部分に筒状の腕輪が嵌められており、そこから鎖が壁へと伸びていた。これでは冬雁を連れ出すこともできない。

「……これは私の落ち度だ。手助けはいらない。そもそも、刃を向けたことのある相手に助けられてどうする」

「強情だな」

しかし、今の春蘭ではどうすることもできない。房室に匿うには侍女たちの協力が必要で、冬雁の姿を見た彼女たちは、春蘭の命令など聞かずに宦官を呼ぶだろう。侍女たちは、春蘭が皇帝の妾だからこそ付き従っているにすぎない。春蘭個人に忠誠を誓っているわけではないのだ。

「また、暇をみて来る」

「必要ない。次に現れたら、あいつらにお前のことを言うぞ」

馴れ合いはごめんだといわんばかりの態度に、春蘭は苦笑した。自分と冬雁は、ただ顔を合わせたことがあるだけの、知り合いとも呼べない間柄だ。かかわるな、という冬雁の気持ちもわからなくはない。

「猩猩緋ということは、ぬしは洪采の仲間なのだろう？」

「なぜ、あいつを知っている！」

冬雁が驚いたように目を瞠った。

「攫猿騒ぎで少しばかり世話になったのだ。洪采の仲間を見捨てたとあれば、私は恩を仇で返すことになる」

春蘭が、夜半に白桃を伴い外出した際の出来事だ。運悪く、華安を徘徊していた攫猿に見つかり、追わ

れることとなった。

さすがの白桃も、相手が攫猿ともなれば春蘭を守りながら逃げ切るのは難しい。あわや、という時に助けに入ったのが猩猩緋の一員でもある、郭洪采だったのだ。

「冬雁？」

俯き加減のため表情はわからなかったが、冬雁の肩は震えていた。

心配になって顔を覗き込めば、なぜか怒りに顔を赤く染めているところだった。

「あの馬鹿め……人に顔を見られてどうするっ！」

「ぬしも同じだぞ」

すぐに切り返せば、冬雁は正論なだけになにも言えず春蘭を睨みつけてくる。

「まあ、私はぬしらのことを誰かに告げるつもりはない」

冬雁は疑わしそうな視線を向けてくるが、信じる信じないは春蘭にとってさほど重要ではない。

「ということで、様子を見に来るくらいは多めにみてほしい」

来るな、と冬雁の目は物語っていたが、春蘭は気にせずに言葉を続けた。

「さて、私は戻る。次に来た時に持ってきて欲しいものはあるか？」

「……短刀があれば」

「わかった。手に入るかどうかはわからぬが、覚えておこう」

春蘭は、目隠しと猿轡を元に戻すと冬雁の体を横たえた。自分が入りこんだことを気取られるわけにはいかない。

「では、またな」

もう少し冬雁の傍にいてやりたかったが、いつまでも寝室を留守にするのは危険だ。春蘭がいないと知れば侍女は騒ぎ立てるだろう。

白桃を連れて廊下に戻り、音を立てないように扉を元に戻す。燭台の火を吹き消すと、たちまち辺り

は暗闇に支配された。
　白桃の背に乗った春蘭は、誰に見咎められることなく無事に室へと辿り着いた。

　翌日のことである。昨日の今日では、さすがに外へ出たいという春蘭の願いは叶えられなかった。手持ちぶさたに、揺り椅子に座りながら中庭を眺めていると、青乎が芍薬が生けられた花瓶を持って春蘭を訪ねてきた。
「昨日はお見苦しいところを御覧に入れて、申しわけありませんでした。これは安世様からです」
「きれいだな」
「今日は室からお出になられないから、と」
　陳安世はずいぶんと気が利く人物のようだ。それとも後宮暮らしが長くなると、この程度の配慮は当然なのだろうか。
「どこに置きましょうか？」
「そうだな。卓の上にでも置いてくれ」
　慰めに、と贈られた花はそれだけで室内を華やかに彩ってくれた。微かに漂う芳香も、春蘭の気持ちを穏やかにする。
　と、そこで春蘭はあることを思い出した。
「ところで、ぬしとはどこかで顔を合わせなかったか？」
　唐突な問いに、芍薬を生け直していた青乎が驚いたように顔を上げる。
「え、奇遇ですね。私も、どこかでお会いしたような気がしていました」
「ふむ」
　青乎の全身をじっくりと眺め回すが、答えはでない。それは青乎も同じ思いのようで、手を動かしながらもしきりに首を傾げている。
「まあ、気のせいということもあろう。そういえば、青乎は置いてきた書物をちゃんと取り戻せたのか？」

「……はい」

春蘭の前で見せた醜態を思い出したのか、青乎は頬を赤く染めた。

「噂の声とやらは、どれくらい前から聞こえ始めたのだ？」

「正確な日付まではわかりませんが、確か、今年に入ってからだと聞いています」

「……？」

春蘭は、不気味な声の原因が冬雁のうめき声だと予想を立てていた。しかし、今年に入ってからだというならば話は違ってくる。

隠し通路の奥には、まだ秘密があるようだ。気にはなるが、迂闊な行動は自分の首を絞めかねない。春蘭が抱える〝真名を取り戻す〟という最大の難問も、未だ解決の糸口すら見えない状況である。

「……焦るものではないな」

急いたところで妙案が浮かぶわけではない。春蘭は揺り椅子に身を預け、目を閉じた。今は真名を取り戻すことだけを考えよう。

弱気になる度に浮かぶ〝彼〟の幻影を払いながら、春蘭は溜息をつくのだった。



幾夜、後悔したところで朝は変わらずにやってくる。眼前まで迫った剣の切っ先を、鄭仲望は既のところで撥ね除けた。その勢いで反撃を試みるが、あっさりと受け流されてしまう。

鄭家の中庭に、激しい剣戟の音が響き渡った。

「遅い！　足下がふらついてるぞ！」

「くっ」

容赦のない叱咤が飛ぶ。韓楊秀は、迷いのない剣捌きで仲望の剣を撥ね上げた。重い音を立てて、剣が地面に転がる。

「これで五勝目だ。ずいぶんともつようにはなったが、まだまだだな」

額に滲んだ汗を短服の袖で拭った楊秀は、精悍な顔に笑みを浮かべてみせた。

服の上からでもわかる鍛え抜かれた肉体は、いくら挑もうとも疲れを知らないようだ。鍛錬を再開して、ようやく体が引き締まってきた仲望とは雲泥の差である。

右目を覆う前髪を払い除け、仲望は肩で息をついた。撥ね上げられた剣を拾い鞘に戻す。もう一戦、と粘りたい気持ちはあったが、楊秀にも仕事がある。

「わざわざすまないな」

「一人で剣を振るうよりは、相手がいた方がいいだろう。こっちもいい運動になる」

「そう言ってもらえると助かるよ」

回廊の床に座り、準備しておいた竹筒から茶器に水を注ぐ。それを一気に飲み干して、仲望は溜息をついた。ほどよく冷えた水が、体の火照りを冷ましてくれる。

庭というよりは、畑として開墾されてしまった敷地を眺め、仲望は口を開いた。

「猩猩緋の捜索は進んでいるのか？」

「かなりの人数を捕らえたが、残念なことに下っ端ばかりだ。肝心な情報は知らされていないときてる。隠れ家の場所を特定しても、踏み込んでみればもぬけの殻。紅主に繋がる手掛かりすらない」

猩猩緋の首領は謎に包まれた存在だ。〝紅主〟と呼ばれている以外、容姿、年齢、性別すらも不明だ。実在しないのではないか、と噂する者さえいるほどである。

「では、太子の行方は……」

「猩猩緋は、未だになんの声明も出していない。太子は生死すら不明の状態だ。公にはしていないが、人の口に戸は立てられんからな。宮中はその噂で持ちきりだ」

太子は、皮肉にも仲望の目の前で誘拐された。白昼夢でなければ、太子を担いでいたのは実の兄、玄楽である。

「なんのために猩猩緋は太子を攫ったのだろうな」

楊秀の疑問に、仲望も同意した。太子を殺すだけならば、わざわざ攫うことはない。民衆の支持を受けている太子を害した場合、痛手を被るのは猩猩緋の方だ。いっぽう人質とするには、太子は父親である皇帝に疎まれすぎていた。

そこまで扱い辛い相手を、なぜわざわざ攫う必要があるのか。

「宮中はどうなってる？」

襲撃を受けてから、すでに六日が経過している。混乱状態だった当時に比べ、だいぶ落ち着きを取り戻した頃だろう。

「官吏にも、だいぶ怪我人と死人が出たからな。どの部署も忙しいようだ。お前に声はかからなかったのか？」

「俺も出仕したんだが――禁軍の詰め所で鍛錬していたことがばれたらしい。野心を燃やしていると勘

ぐられたのか、邪魔だから自宅で大人しくしていろと、同僚らに追い出されてしまってね」

「有事の際でも、醜い足の引っ張り合いはなくならんな」

不快げに顔を歪めた楊秀は、ふと思い出したように仲望を見た。

「そういえば、今まで日和見していた者たちが、少しずつ公子派に流れているようだぞ」

「やはり、太子の不在は大きいか」

猩猩緋に攫われたのならば生還の可能性は低いと、判断したのだろう。ならば、さっさと公子派におもねった方が見返りも期待できる。

「それもある。しかし、襲撃の際に見せた陛下の武勇に、太子派の不利を悟った者が多かったらしい。近々、均衡が崩れるとみて間違いはない」

「太子派はどうしてる？」

「あそこはもともと結束が硬いからな。花中書令を中心にまとまりを見せ、未だ離反者を出してはいない」

ただ、と楊秀は難しげな表情で続けた。

「不利な状況に変わりはない。太子の身柄を無事に取り戻したところで、いったん勢いづいてしまった形勢を覆すのは至難の業だ。花中書令も、なりふり構わず味方を抱えにかかる可能性がある。気をつけろよ、仲望」

「わかってるさ」

猩猩緋の襲撃をきっかけに、太子派と公子派の均衡は崩れようとしている。沈みゆく船に乗りたいと思う者はいない。楊秀が考えるよりも急速に天秤は傾き始めるだろう。

「韓家はどうするつもりだ？」

「……私はどちらにも肩入れする気はない。太子派が勝っても公子派が勝っても、韓家は冷遇されるかもしれないが、そこは地味に実績を積んでいくつもりだ」

腹は決まっているようだが、楊秀は眉を寄せたま

ま地面を睨みつけていた。
「他の将軍たちはどうするつもりなんだ？」
「話し合いの結果、禁軍に属する者は内乱の激化を防ぐために、全員が中立ということで意見はまとまった。異論がある者は、軍を辞すだろう」
「そうか……」
「これで太子派はますます不利になった。花中書令は禁軍の将を引き込んで、公子派を牽制しようと考えていたようだからな。それに、将軍と繋がりを持っていれば、陛下側の情報も入ってくる」
太子派にとって、もっとも問題なのは皇帝の存在だ。
太子と皇帝は、血の繋がった親子にもかかわらず冷え切った関係を続けている。皇帝が〝廃嫡〟の言葉を発すれば、太子はその座を追われるだろう。不服として太子派と共に造反したところで、禁軍の前には児戯に等しい。先手を打つためにも、皇帝側の情報は重要だった。
「陛下が禁軍を動かせば太子派は終わる。疑問なのは、陛下がそれをわかっていて静観しておられることだ」
皇帝は動く気配を見せない。太子派と公子派の駆け引きを観察しているだけだ。
「太子派がある程度、固まったところで叩く腹積もりかとも思ったが違うようだ」
「なにを考えているのか、か」
仲望の脳裏を、春蘭の顔が過った。なぜ、皇帝は春蘭を後宮に召したのか。妃妾として、と考えるのが普通だが、どうも裏がある気がしてならなかった。
自分を拒むように背を向け、一度も振り返ることなく去って行った少女の姿が忘れられない。
「仲望。春蘭のことだが……」
「わかっている。自分の不甲斐なさに、嫌というほど自己嫌悪した」
春蘭が唯々諾々と従ったのは、なにも皇帝を恐れ

ているからでも、妓楼や仲望に迷惑をかけるからでもない。

後宮が堅牢な檻だからだ。厳重な警備は、春蘭を追っ手から守ってくれる。妓楼に留まるよりも、その方が安全だと判断したのだ。だが、頭でわかっていても、受け入れることは難しかった。

「……今の俺では、どうすることもできない」

春蘭のために真名を取り戻してやることも、兄から守ってやることも。せめて禁軍にいた頃の実力があれば、と幾度悔やんだことか。

しかし、現実は厳しい。怠惰に過ごした日々のつけが、今になって回ってきたのだ。自業自得という言葉が脳裏を過る。それでも、春蘭を諦めることはできなかった。ならば限界まで足掻くしかないだろう。いざという時、今度こそ守れるように。

「春蘭については、後宮での様子がわかるように伝手を探してみる」

「すまん」

「なに、親友の嫁が盗られたのだ。黙って見ているわけにはいかんだろう」

笑いながら膝を叩いた楊秀は、剣を片手に立ち上がった。

「まだ戻るまで余裕がある。もう一度、手合わせするか」

「いいのか？」

余裕がある、と楊秀は言うが、いつまでも将軍が不在のままでは副官が困るだろう。今日は報告がてらに顔を出しただけで、仲望が手合わせを望まなければここまで長居はしなかったはずだ。

「忙しくなれば、顔を見にも来られなくなるからな。なに、戻っても待っているのは不機嫌な副官と、大量の報告書だ。あと少し遅れたくらいでは、なにも変わらんさ」

「なら、いいが」

休息というには短い時間だったが、仲望は躊躇なく立ち上がった。足下はふらつくが、まだ限界で

はない。
しかし、剣を鞘から抜こうと柄に手をかけたところで、回廊の奥から忙しない足音が響いた。
「旦那様！」
走ってきたのは、鄭家の家僕である高友寧だった。今年、十三になった少年は、優しげな容貌に不安の色を滲ませていた。
今まで洗い物をしていたのだろう。着古した短服に巻いた前掛けで手を拭きながら、駆け寄ってくる。
「あの、門前に花家の使いの方がいらしてます……」
〝花家〟の言葉に、仲望は眉を曇らせた。今もっとも聞きたくない家名である。見れば楊秀も顔を顰めていた。
「お断りしますか？」
「いや、いい。いつまでも待つと言われそうだ」
自分のよく知るあの上役ならば、どれだけ粘ってでもかまわないから、必ず連れて来いと命じているだろう。溜息をついて剣を鞘ごと友寧に渡し、外出の準備を頼む。友寧の姿が見えなくなったところで、楊秀が仲望の肩を叩いた。
「私もついて行こう」
「いや、止めた方がいい。この時期に、お前が花家に入るところを見られたら面倒なことになる」
楊秀は中立の立場を貫くと言ったが、裏で太子派に通じているのでは、と勘ぐる者がいないわけではない。
楊秀の不用意な行動は、疑心暗鬼を生むだろう。下手をすれば一つにまとまっている禁軍に、一石を投じる結果になりかねない。
「俺は出仕すらしていないからな。太子派に転んだと噂されても、影響はないだろう」
「やれやれ。お前が思っている以上に、お前の存在は大きいぞ。出仕する度に突っ掛かられるのは、閑職にあっても、それだけ影響力があると恐れられているからだ」

「……みんな幻でも見てるんじゃないか？」

肩を落とした仲望は、着替えをするべくゆっくりとした足取りで自室へと向かった。

誰かに求められるほど、自分は有能な人間ではない。みなが言うような人物だったならば、春蘭を助けることも容易かったに違いないのだから。

久し振りに訪れた花家は、以前よりも閑散としていた。どこがどう違うというわけではないのだが、屋敷全体が沈んでいるような印象を受ける。

俥を降りて案内されたのは、見事な庭園を望むことのできる客室だった。花家を訪れるのは、攫猿の件以来である。

「ただいま、主を呼んでまいります」

仲望は椅子には座らず、窓辺に立った。長居するつもりはない。

眼前に広がる庭園は、手入れの行き届いた立派なものだった。広い池には色鮮やかな鯉が泳ぎ、季節によって様々な色を添える低木が秩序をもって植えられている。ちょうど芍薬が美しい時季で、至るところに薄桃色や赤紫色の花を咲かせていた。

規模こそ違うが以前は、鄭家の庭にも見られた光景だ。

怪我が元で禁軍を辞した時、屋敷に残ったのは家僕の少年たちだけだった。彼らでは庭の手入れまでは難しく、職人を頼むような余裕もない。だから潰してしまった。

昔を懐かしんでいると、廊下に人の気配を感じた。花興奏が室内に入ってくる。

「久しいな、仲望。宮中で会った以来になるか」

「まだ六日しか経っていませんよ」

その間に、興奏の体は一回り縮んでしまったようだ。もとより体格のよい人物ではないが、今は気の毒なほどに痩せ細っている。その中で、落ち窪んだ瞳だけが炯々とした光を湛えていた。

仲望の知る興奏は、どれほどの逆境にもめげずに立ち向かっていくような人物だった。あの皇帝相手にも、一歩も引かぬといった気概を見せつけたほどである。

それが、今はどうだろうか。諦めてはいない。だが、中書省を束ねる者としての職務と、太子派筆頭としての重責が、興奏の体に重くのし掛かっているのだろう。気を張っているのだということが、仲望から見てもよくわかった。

「お招きありがとうございます。今日はどのようなご用件でしょうか？」

「そう急くな。ようやく屋敷に戻って来たのだ、少し休ませてくれ」

自分が帰ったあとで思う存分休めばいいでしょう、という皮肉を仲望は口に出さずに呑み込んだ。今の興奏には、あまりにも酷な言葉だ。仲望が屋敷を辞せば、またすぐに宮中へと向かうのだろうから。休む余裕があれば、ここまで窶れることもなかったはずだ。

椅子に座った興奏は、女中が運んできた花茶を一息に飲み干した。

「そういえば、鍛錬をしているそうだな。いったいどんな心境の変化だ？」

「ただ体を鍛えたくなっただけです」

「なんの理由もなく、か」

「ええ」

興奏は興味深そうに目を細めた。

「理由もなく、朝から晩まで鍛錬を？」

「いけませんか」

「悪くはない。体を鍛えるのはいいことだ。なに、少し気になったものでな」

確かに、今まで出仕すらせず怠けていた部下が、急にやる気を出したとなれば、上司として気になるのも当然だろう。だが、興奏には関係のない話だ。それを、こうも含みのある言い方で訊かれると、なにかあるのでは、とつい勘ぐってしまいそうになる。

「ふむ。先日、妓楼から後宮に召された娘がいたな」
「……」
「名は春蘭といったか」
仲望は悟られないように、官服の下で手のひらをきつく握り締めた。嫌な汗が額に滲む。春蘭の名が出たとなれば、次に持ち出されるのは十中八九、後宮絡みだろう。
「単刀直入に訊く。お前は、あの娘を取り戻したくはないか？」
「どういう意味です？」
「自分の嫁にと育てていた娘を、陛下に盗られたのだ。取り返したいと思うのが当然だろう。娘も、お前の助けを待っているとは思わんか？」
告げられた言葉に、仲望は眉を寄せた。まさか、興奏がここまで直接的な物言いをするとは思ってもみなかった。
今までの興奏は皇帝に対する不満を滲ませてはいたが、あくまでも仲望の反応を見る程度に留まっていた。それが、今は確実に皇帝への不満を口にし、同意を求めている。
自宅ということで気を緩めているのか、それとも仲望が同調するという確信があるのか、いずれにせよ興奏の態度は今までにないほどあけすけとなっていた。
「花中書令には関係のないことでは？」
「泣き寝入りするしかない部下を、上司として助けたいと思ってはいかんか」
これほどまでに説得力の乏しい言葉もないだろう。興奏の言い分は強引である。その裏に隠された意図は明白だ。
「なにを言いたいのですか？」
「簡単なことだ。手を組まぬか、と言っておる」
「――太子派に肩入れしろ、と？」
「わかっているならば話は早い。太子に忠誠を誓わずとも、協力さえしてくれればよいのだ。太子が皇帝となったあかつきには、わしが責任をもって娘を

取り戻してやろう」

「太子が行方知れずの現状で、持ちかけられるような取引だとは思えません」

それ以外に春蘭を取り戻す方法がなかったとしても、興奏の取引はあまりにも馬鹿げている。たとえ仲望が太子派に協力したところで、劣勢を覆すことは不可能だろう。それをわかっていてなお、協力を求める興奏の姿勢に仲望は疑問を覚えた。

「太子の件は問題ない」

「……なぜ、断言できるのですか？」

「太子は安全な場所で静養されておられる」

「猩猩緋に攫われるところを、あなたも一緒に見たはずです。なのに、なぜ安全な場所にいると断言できるのですか」

「文が届いたのだ。太子が病と偽り、身を隠されている時も同じように文でのやりとりを行っていた。筆跡もご本人に間違いはない」

力強い口調で断言した興奏だったが、仲望はどうしてか違和感が拭えなかった。興奏は慎重な男だ。それが、筆跡が同じだからといって、太子からの文だと信じるものだろうか。

それに、太子が無事だというならば、興奏がここまで憔悴している理由がわからない。

「約束は守る。娘のためにも太子派に入れ」

「……春蘭の名を出せば、俺が靡くと思いましたか？」

唇から漏れた声は、思った以上に低かった。

世の中はきれいごとばかりではない。むしろ、権力が絡めば絡むほど、醜い取引が行われていたはずだ。

だが、仲望の知る興奏は、清濁併せ呑みながらも、けっして揺らがぬ芯のある人物だった。己の部下に、脅迫紛いの取引を持ちかけるような人ではなかった。

「お断りします」

わずかに繋がっていた縁を断ち切るように、仲望は告げた。

「私は、私の力で彼女を守ります」
豪語はしたものの、今の仲望には春蘭を守れるほどの力はない。それでも、断言せずにはいられなかった。
「花中書令。お話がここまでならば、私は屋敷に戻ります」
「……そうか。気が変わったなら、いつでも訪ねてきてくれ。歓迎する」
返答はせず、仲望は戸口に向かった。そこでふと、屋敷の中が異常なまでに静まり返っていることに気付く。
「人の気配がありませんね」
「姪たちを、東都の親戚に預けたからな。静かなのはそのせいだろう」
「なぜ、わざわざ地方に？　華安に置いた方が安全では？」
華国の都、華安は禁軍や都を守る龍乎のおかげで、比較的、治安が守られている。疫の流行によって一時的に暴動なども起こったが、今は以前の活気を取り戻しつつあった。
逆に、地方は行政の目が届き難いところからじょじょに治安が悪化し、特に西の辺境は無法地帯になっていると聞く。東都は華安に次ぐ都で、まだ治安は守られているというが、それがいつまでも続くという保証もない。
承知の上で、あえて華安から出したというならば考えられることは一つ。興奏は――太子派は一か八かの賭に出ようとしている。万が一、失敗した際に姉妹を犠牲にしないため、地方に逃がしたのだ。これで興奏になにかあれば、姉妹はお供の者たちと姿を晦ますだろう。
「かなりの数の猩猩緋が華安に入り込んでいるという情報があった。いつなんどき、この屋敷が襲われるかもわからん。ここに留まるよりは、遥かに安全だろう」
「猩猩緋が狙うのは、不正を行っている官吏宅では

ありませんか？」

人望のある興奏を狙うよりも、まずは確実に悪事を働いている者を狙うだろう。それに、猩猩緋は先日の襲撃で、かなりの痛手を負ったはず。今すぐに活動するほどの余裕はないはずだ。

「相手は手負いの獣だ。見境なく官吏の屋敷を襲うこともあるだろう」

興奏の説明に、仲望は内心で首を傾げた。手負いの獣が、こんな見るからに警備兵の多そうな屋敷を狙うものだろうか。それに、いくら猩猩緋とはいえ、襲撃する官吏の情報くらい事前に調べておくだろう。

「そうでしたか。確かに、おっしゃる通りかもしれませんね。では、私はこれで」

そうそうに会話を打ち切ると、今度こそ仲望は花家をあとにした。今までにない興奏の態度に、不審を感じながら――。

花茶の残りを口に含み、興奏は溜息をついた。

予想していたとはいえ、完全な拒絶に苦笑いが零れる。

どこまでも真っ直ぐな男だ。だからこそ、太子の傍に相応しいと思ったのだが、願いは潰えてしまったらしい。

皇帝の圧倒的な権力に大切な者を奪われ、己の無力さを痛感している、そこに付け込む算段だったのだが。姑息な手段を用いてまで根回ししたが、それもむだに終わったようだ。

せめて太子本人に会わせることができたのならば、話は違ったかもしれないが、と興奏は肩を落とした。自嘲しながら振り向けば、意地の悪い笑みを浮かべた男と目が合った。

「失敗したようですね」

「もとより望みは薄かった。しかたない」

「あいつも頑固ですから」

「父親に似たのだろう」

遠慮なく興奏の真向かいの椅子に座ったのは、鄭玄楽だった。

華国では見慣れない赤銅色の髪に、それよりはいくらか茶色に近い瞳。仲望と半分とはいえ血が繋がっているようには思えない。性格を知れば、より強く感じることだろう。薄汚れた短服姿は壮麗な禁軍の甲冑よりも、この男らしさを引き出しているように見えた。

野性味のある端整な容貌に笑みを浮かべた玄楽は、卓に用意してあった干し葡萄を口に入れた。

「……未だに信じられん」

「まあ、死人がいきなり訪ねてきたんですから、当然の反応ですよ」

玄楽は四年前に起こった西奴の役で戦死したはずだった。

異民族との抗争にしては規模も大きく、遺体が見つからなかった雑兵も多かった。しかし、玄楽は禁軍でも高位にあった。手柄次第では、将軍職への抜擢もあり得ただろう。

故に、捜索は雑兵とは違い念入りに行われた。それでも遺体すら見つけられなかったことから、〝戦死〟として処理されたのである。

死んだと思っていた男が、宴の襲撃が行われた翌日、なんの前触れもなく花家に現れたのだ。しかも、太子博焚からの文を携えて。実は生きていたのだと言われても、そう簡単に納得できることではない。

「本当にご無事なのだろうな」

「文を見たでしょう。それに、俺が博焚様を攫ったところも」

「確かに……」

興奏は呻いた。太子を攫った犯人は顔を隠していたが、言われてみれば、その瞳の色は紛れもなく目の前の男のものだった。そして、もたらされた文も見た限り太子の筆跡と変わりない。

「しかし、お前がよりによって猩猩緋の一員になっているとは」



本来ならば、こうして言葉を交わしている時点で興奏は国を裏切ったことになる。猩猩緋に通じた反逆者として処罰されてもおかしくはない。頭痛を堪えるように頭を振った興奏は、干し葡萄を摘む玄楽に視線を戻した。

「なぜ、猩猩緋が太子を攫うのだ」

「あのまま宮中にいたら、博焚様は間違いなく暗殺されますよ」

「わかっておる」

悔しいが、先日の宴を境に公子派は勢いを増している。特に日和見を決めていた者たちが、一斉に傾いた形だ。

太子が健在だと証を立てこちら側に取り込む手筈が、皇帝の武勇の前に霞んでしまったようだ。運がなかった。あそこで猩猩緋が雪崩れ込んでくるなどと、誰が予想しただろうか。

「我々としては、皇族の血を根絶やしにするわけにはいかないんですよ。新しい王朝を興すとなれば、大勢の民が犠牲となる。ならば、上に立つ者の首をすげ替えればいい。幸いにも、博焚様は賢君の資質がある。博焚様が帝位に就き、その周囲を信の置ける官吏で固めれば、数年もせずにこの国は持ち直しますよ」

「猩猩緋は、皇帝を弑逆するつもりか？」

「ああ、博焚様は幽閉なさりたいんですよね」

それもまた、大きな難問の一つだ。道徳的に、子が親を害するのは不徳とされる。それがどれほど人道に反した親でもだ。

だが、相手は皇帝でありながら、年を経た今でも気術兵としての衰えを見せない。気術兵は、胸に埋め込んだ玉を介し、地脈に流れる〝気〟を用いることで肉体の強化を可能にする。特に皇帝は、より〝気〟の巡りがよいとされる龍玉を用いたため、通常の気術兵ですら太刀打ちできないほどの強さを誇る。

同時に、〝気〟が体内の不浄なものをすべて無効

かしてしまうため、毒や薬で意識を奪うことも難しい。しかし、そうと知りながらも、太子派としては皇帝を幽閉する以外の選択肢を持てずにいた。

「なら、その問題も解決しますよ。猩猩緋が皇帝を殺せばいい」

「そう簡単にいくとは思えん」

猩猩緋がどれほどの手練を抱えていようが、相手は百戦錬磨の皇帝だ。目の前の玄楽でさえ、太刀打ちできる相手ではない。

「太子派よりは有望ですよ」

「……太子が猩猩緋に匿われていると知られたらどうする。どう言い繕っても、廃嫡は避けられんぞ。それどころか、太子の命すら危ない」

「ちゃんと考えていますよ。太子は猩猩緋に攫われた。そう認識させるように動いたんです。当分は平気ですよ。それよりも、同盟の件は考えていただけましたか？」

興奏は口を閉じた。太子からの文には、猩猩緋との同盟を推奨する旨が書かれてあった。目の前の男が強制して書かせたのではないか、という危惧もある。

しかし、その反面、猩猩緋の有する兵力は興奏がのどから手が出るほど欲しているものだ。禁軍の将への勧誘はことごとく失敗に終わった。

公子派に靡く者がいなかったのは幸いだが、そもそも禁軍は皇帝直属の兵だ。中立だからと言って安心はできない。

「宴の襲撃で、だいぶ戦力を削られたのではないか？」

「おっしゃる通り、下っ端はそれなりに捕まってしまいましたがね。でも、今は地方からぞくぞくと仲間たちが集結しつつあります。個々の質は禁軍兵に劣りますが、そこは人数で対抗するしかないですね」

「陛下はどうする」

「こちらに任せていただければ」

「信じてよいのだな？」
「もちろんです」
興奏は呻いた。どれほど民から慕われようとも、親殺しを行った太子には、〝簒奪〟という罪が生涯ついて回るのだ。だが、その親殺しを行ったのが猩緋だったとすれば――。
少なくとも、太子の名に傷はつかない。猩猩緋との同盟が明るみに出たとしても、太子ではなく己の一存で行ったと訴えれば犠牲は最小で済む。
「わかっているとは思うが、二度目の襲撃は、より警備が厳しくなるぞ」
「だからこそ、宮中に強い権力を持つあなたの協力が必要なんですよ」
今のままでは、確実に太子派が負ける。起死回生の一手が必要だということは、興奏も嫌というほどわかっていた。
――猩猩緋をその手段として使う。
中書令ともあろう自分が追い詰められたものだ、と興奏は皮肉げに口の端を持ち上げた。
「いいだろう。ただし太子の身柄はなにがなんでも守り通せ」
「もちろんです」
この決断が吉とでるか凶とでるか。
自分の画策によって後宮に召されたあの娘ならば、占うことができるだろうか――。

深夜、怪我を負って休んでいた郭洪采の元に来客があった。
洪采が身を置いているのは、華安の花街にある隠れ家の一つだ。表向きは妓楼だが、内部に隠し部屋を有している。楼主も猩猩緋の一員で、妓女の中にも情報収集を目的とした仲間が潜んでいる。
洪采はちょうど上衣を脱ぎ、室の主である妓女に包帯を巻き直してもらっているところだった。手当が必要なほどの怪我は先の襲撃で皇帝に負わされた

左肩のものだけだが、全身にも細かい傷がある。
妓女の手が傷口の近くに触れるたびに、洪釆は整った顔を苦痛に歪めた。熱と腫れは引いたが、痛みばかりはどうにもならない。
「驚きました。ずいぶんといいところですね」
室内に入るなり、応槍幽は羨ましそうに内装を見回した。年齢は三十歳くらい。小柄で、猫背ぎみに背を丸めた平凡な人物である。
ずいぶんといいところ、と槍幽が評するように、ここは客を取るところではなく、妓女の私室の奥に隠されている室だ。
怪我に障りがないようにと、寝台には厚手の布が二重に敷かれ、すぐ傍の卓には冷えた水差しが置かれている。今は夜だが、通気口代わりの天窓を開ければ、日差しを室内に入れることもできた。清潔に保たれた室内は家具こそ少ないが、今まで暮らしていた隠れ家とは比べものにならないほど居心地はいい。
「では、私はこれで」
艶やかに微笑んだ妓女は、洪釆と槍幽に一礼して室を出て行った。槍幽はその背を名残惜しそうに眺め、溜息をつく。
「私も一度でいいので、こういう隠れ家でのんびりと暮らしてみたいですよ。今日なんて、隠れ家巡業で足が棒のようです」
「負傷して、たまたまここが空いていたら運び込んでもらえるぞ」
「……遠慮しておきましょう」
洪釆がここに運ばれたのには理由がある。左肩に大怪我を負っていた洪釆は、すぐに治療する必要があった。
この妓楼には雇われ医師がいて、薬の種類も豊富に用意されていた。医師も猩猩緋の一員であるため、口止めする必要もない。
「怪我の具合はいかがです？」
「あと五日もすれば抜糸できるそうだ。それまでは

なにがあっても動くなと厳命された」
「いやいや、傷が治るまで動いてはだめですよ」
槍幽が呆れたように首を横に振る。己の傷の話はどうでもいいので、洪釆はさっさと本題に入ることにした。
「そっちはどうなんだ？」
「酷いことになってますよ」
宴の襲撃前に会った時よりも、いくらか窶れた顔つきで槍幽は語った。
「捕虜、死者ともに正確な人数は不明です。助かった者もいれば、あのまま息を引き取った者もいるでしょうから。合計すれば、五十人ほどの戦力を失ったことになります。負傷者はその倍と考えてください。重傷者は三割です。朱緋殿とあなたが皇帝の足止めをしてくれなければ、もっと酷いことになっていたでしょうね」
予想以上の被害に、洪釆は渋面を作った。覚悟はしていたが、まさかそこまで酷いとは。説明する槍幽も、心なしか気落ちした様子である。
「あとは、複数の隠れ家が禁軍に押さえられました。事前に知らせがあったので逃れることができましたが、残る隠れ家は満杯ですよ。早急に、どこか別の場所を確保する必要がありそうです」
「……そうか」
「悪い知らせがもう一つ。冬雁殿が行方知れずとなっているそうです」
「冬雁が？」
洪釆は驚きに目を瞠った。
「配下の方々が、血眼になって捜しています。なんでも紫宝宮に忍び込んだあと、ぱたりと姿を消したとか」
「なんだと。あいつは襲撃に参加していなかったのか？」
洪釆たちが襲ったのは、宴が行われていた華宴宮である。そう言われてみれば、あの場に冬雁の小柄な姿はなかったように思う。

「どうやら、別の任務を命じられていたようですね」
「……兎天殿か」
槍幽は声に出さずに頷いた。
洪釆たちの上役は、鬼面で顔を隠し、他者と馴れ合うことを好まない。年齢も不明で、女にしては低めの声から男ではないだろうかと、推測できる程度だ。
身内に対する情というものが一切なく、必要とあれば躊躇なく仲間を見殺しにするような人間だった。
「襲撃に乗じて、紫宝宮でなにかを探っていたようです」
「そこで行方知れずになったんなら、捜すのは大変だろうな。逃げられずに、どこかに潜んでるだけならいいが……」
「さすがに今は、宮中のどこも警備は厳重ですからねぇ」
無事だといいのですが、と槍幽は仲間の身を案じる。宮中で姿を消したとすれば、捕らえられた可能性が高い。
頑固な冬雁のことだ、どんなに拷問を受けても口を割らないだろうが、それが仇となる可能性も高い。責められ続ければ、冬雁の体力が先に尽きてしまうだろう。
洪釆に対し、憎まれ口しか叩かなかった冬雁だが、仲間としての情はあった。行方がわからないといわれれば、自らも捜索に加わるくらいはする。もっとも、今は怪我のせいで満足に動くことはできないが。
「兎天殿はどうしている？」
「いつも通り、淡々と指示を出しています。冬雁殿のことは、なにも」
「だろうな」
正直、感情があるのかすら怪しいものだ。弟子である冬雁すら、駒の一つでしかないのかもしれない。
「そういえば、師匠はどうしてる？」
洪釆の師である朱緋は、襲撃の翌日から一度も顔

を見ない。ここに洪采を運び込み、やることがあるからと、行き先も告げずにどこかへ行ってしまったのだ。

「さあ……。私も一緒にいるわけではありませんから」

「確か、師匠も別の任務があると言ってたからな。もしもどこかで会ったら、冬雁のことを伝えてくれるか？」

「わかりました」

「それから、冬雁の任務だが……」

「すでに探りは入れてますよ。配下の方々が兎天様に対し懐疑的なので助かります」

「ほどほどにしとけよ。気付かれると面倒だ」

「わかってますよ」

任せてください、と槍幽は告げて隠れ家を出て行った。洪采は傷口を庇いながら、ゆっくりと体を寝台に横たえる。

頭を支配するのは、先日の襲撃の件である。兎天は、都が荒れ、民が疲弊しているにもかかわらず、状況を顧みることなく宴を催そうとしている官吏たちに罰を下すのだと言っていた。そのための襲撃だ、と。

しかし、何度考えても、あの襲撃は無謀だった。それに猩猩緋が今まで行ってきた活動とは、一線を画している。反対の声は、紅主の命だとして兎天が抑え込んだ。

なぜ、そんなに急ぐのだろうと不審に思っていたが、重要なのは襲撃ではなく、その背後で行われていたことの方だったとしたら――。

「……襲撃は陽動だった」

口に出してみて、洪采は顔を顰めた。猩猩緋にあれほどの犠牲を出したものが、他へ注意をそらすための囮だったなどと、考えるだけでも気分が悪くなる。

だが、冷徹なあの男ならば、眉一つ動かさずにやってのけるだろう。

「この段階で考えていてもむだか」

体の力を抜いて、洪釆は目を閉じた。今は傷を癒やすことだけを考えればいい。情報は槍幽が持ってきてくれる。

忍び寄ってくる睡魔に身を委ねながら、洪釆はゆっくりと意識を手放した。



興奏と会った翌日。客間とは名ばかりの、調度品一つない殺風景な一室で、楊秀から告げられた言葉に仲望は絶句した。

「宴を仕切り直すだって……？」

「ああ」

対する楊秀も、渋い顔つきで頷いた。縄を丸く編んで作られた円座に腰を下ろしていた仲望は、口元を片手で覆う。

「陛下のご命令だ」

「また襲撃されたらどうするんだ」

「存外、それが狙いかもしれんな」

楊秀は茶器に注がれた白湯を口に含んだ。一息に飲み干し、鋭い眼差しを仲望に向ける。

「宴を餌にして、集まってきた猩猩緋を一網打尽にする――陛下の考えそうなことだとは思わんか」

「確かに……」

帝位にありながら、自ら剣を取って前戦に向かうような人物だ。好戦的なところは、禁軍時代となにも変わっていない。宴を囮にするくらいのことは、平然とやってのけるだろう。

「だが、先日の襲撃では、猩猩緋もかなりの損害を受けたんじゃないか？　罠の可能性も考えるだろうし、そう簡単に誘いに乗るとは思えない。徒労に終わる恐れもある」

「そうなっても構わないのだろう。こちらは猩猩緋を恐れていないという宣伝になるし、襲撃がなければ賊徒もしょせんその程度だった、と主張することもできる。猩猩緋にしてみれば、面白くない展開だ」

「……民の反感は必至だろうな」

「わかっている。我々がいくら反対したところで、陛下の勅命が撤回されることはない。これからは宮中に詰める日々が続くな」

禁軍の将である楊秀は、宴の警備の任も負っている。先の宴以上に警備は物々しいものとなるだろう。その手配を考えれば、楊秀でなくとも頭が痛くなるというものだ。

「それで、いつ開かれるんだ？」

「十日後だ。担当の官吏たちは、突然の触れに死人のようになっていたぞ」

「場所はどうする？　華宴宮は使えないぞ」

「別に用意するそうだ。おそらく、後宮の近くにある北鵲宮だろう」

宮中には、いくつか宴を催すために建てられた宮がある。規模がもっとも大きかったのが、焼失した華宴宮だった。北鵲宮はその次だ。後宮に近く、妃妾たちによる節句の祝いにも使用されることが多い。

「前回と同じように、また黄海楼の妓女たちを呼ぶそうだ。妃妾たちも参列を命じられている。おそらく、春蘭もそこにくるだろう」

「ああ……」

「もしも猩猩緋の襲撃があったら――お前は、混乱に乗じて春蘭を連れ出せ」

「ちょっと待て。楊秀、それは本気で言っているのか？」

妃妾が行方知れずとなったら、責任を問われるのは警備の任を負っている楊秀ら禁軍の将である。仲望は愕然として、職務を無視するような提案をする楊秀を見つめた。

「本気だ。猩猩緋によって殺されたことにすればいい。遺体は私が確認したと報告する。疑ったところで、証拠さえなければなんとでもなる」

「だが」

「春蘭はお前の嫁だろう。奪われたのならば、取り戻せ」

楊秀は、春蘭が鄭家に居候を始めた時から、仲望

の嫁という姿勢を崩していない。身寄りのない春蘭が、仲望に惚れて屋敷に押しかけた、と独自の解釈をしているのだ。

　このままでは、鄭家は仲望の代で断絶してしまうのでは、と危惧していたため、絶対に春蘭を逃すなと耳に蛸ができるほど忠告されたものだ。もっとも、今は後宮に召された春蘭を純粋に心配しているようだが。

　仲望が沈黙していると、楊秀は重々しい口調で告げた。

「知人からの情報だ。妃妾たちが春蘭を快く思っていないらしい。なにしろ、陛下が名指しで後宮に入れた娘だからな。未だ位は決まっていないが、高位だと推測されている。自分の地位が揺らぐことを恐れた妃妾が、毒殺などの卑怯な手段に訴えることも考えられる」

「それは……」

　考えなかったといえば嘘になる。だが、仲望の脳裏を過ったのは、仲望が山堺で行方知れずとなった際、助けに来てくれた春蘭の姿だった。

　山の奥には、地脈が狂う場所がある。それが山堺だ。普通の人間ならば、一日と経たずに体調を崩し、やがて死に至ると言われている。気を操ることのできる気術兵や、地脈を流れる気を視ることのできる仲望は例外だが、それでも不調を覚えずにはいられなかった。

　しかし、春蘭は違った。守り神であった頃の神気が肉体に残っていたため、山海の狂った気に触れても影響を受けないのだという。ならば気術兵同様、毒物にも耐性があるのではないか、と仲望は感じていた。

「春蘭を華安から逃がし、お前は頃合を見て体調を理由に官吏を辞せ。地方でならば共に暮らすこともできるだろう。なに、春蘭は東都で暮らしている韓家の親戚に預ければいい。名を変えて一年も大人しくしていれば、成長した姿に気付く者もいないはず

だ」

確かに、春蘭が普通の少女ならばそれも可能だろう。だが、彼女は守り神なのだ。真名を取り戻せば、人ではなくなる。

「ありがとう、楊秀」

辛い立場に置かれるだろうに、それでも友人である自分のことを優先してくれた。その優しさに、仲望は心から頭を下げた。

「だが、その話はなかったことにしてほしい」

「……なぜだ」

「春蘭は理由があってあそこにいる。それに……彼女には成さねばならないことがある」

「仲望、お前は本当にそれでいいのか。体を鍛え始めたのも、すべて春蘭のためなのだろう？」

仲望は苦笑して、己の手を見つめた。柄を握り締め続けたせいで、手のひらの皮は剝け、指の付け根には血豆が固まっていた。

兄の背を追いかけていた時も血を吐く思いで体を鍛えていたが、力を欲する気持ちは今の方が遥かに強い。

「ああ」

正直な気持ちで仲望は頷いた。そして、真剣な眼差しを楊秀に向ける。

「猩猩緋が再び襲撃してくるというなら、俺も剣が欲しい。頼めるか？」

「……わかった。準備しておこう」

諦めたように笑みを浮かべた楊秀は、仲望の肩を叩いた。

よろしく頼む、と言った裏側で仲望は考えていた。猩猩緋が来るというならば、そこには兄の姿もあるだろう。彼の目的は宴の妨害ではなく春蘭本人だ。玄楽ならば、春蘭が後宮にいることくらい知っているだろう。

――今度こそ、守ってみせる。

強い決意を胸に、仲望は手のひらを握り締めた。

とんとん、と野菜を切る音が厨房に響く。畑から取って来た野菜を切り終えた友寧は、大瓶から柄杓で水を掬いまな板の汚れを流した。

「なんだ、もう作ってんのか？　夕餉の準備にはまだ早いだろ」

薪割りから戻ってきた孫啓璋が、友寧の手元を覗き込みながら言った。

啓璋は友寧と同じ鄭家の家僕である。年齢や背格好まで一緒なのだが、穏やかな雰囲気を纏っている友寧に比べ、啓璋は気の強さが顔や態度に滲み出ている。

「楊秀様がこのままお仕事に戻るそうだから、その前になにか軽く召し上がっていただこうと思って」

「そういうことか。じゃあ、俺も手伝うぞ」

「こっちはあと煮るだけだから、啓璋は白雪にごはんをあげて」

〝白雪〟と、友寧が告げた瞬間、啓璋の体が固まった。啓璋の視線がさまよい、卓の上へと行き着く。そこには陶器の茶碗が置かれてあった。

ひょこり、と碗から顔を出したのは一匹の真っ白な蛙である。黒い瞳を啓璋に向け、口をかぱりと開いた。

『ごはんー』

「ひぃ！　ばっ、友寧！　なんでここに連れて来るんだよ！」

戸口まで飛び退いた啓璋は、必死の形相で友寧に訴える。友寧は手元から視線を放さずに答えた。

「だって、一人でいたら寂しいでしょ？」

「だからって、厨房にまで持ってくんな！」

『めしー』

「ほら、早く干し肉をあげてよ」

白雪は、鄭家の居候である少女が残していった蛙だ。文で、面倒を見てやってほしいと頼まれ、友寧と啓璋が交代で世話をしているのだが——啓璋は白雪が苦手だった。毎回のように、飛び上がらんば

かりの反応を見せている。
「可愛いのに……」
「お前、蛙が喋るんだぞ。どこが可愛いんだ」
確かに、言葉を解する蛙というのは異質な存在だ。だが、文には〝白桃と同じような者だ〟と書かれてあったので、友寧はそれほど不気味だとは感じていない。むしろ、たどたどしい口調や、茶碗の中を泳ぐ姿は愛嬌があって好感が持てる。
『けいしょー』
「な、名前を覚えられた……」
『けいしょー、くれくれ』
顔を真っ青にして震えている啓璋に、友寧はやれやれと肩を落とした。
このままでは、いつまで経っても白雪がご飯にありつけない。啓璋に向かって両手を差し出す格好は、思わず笑みが零れてしまいそうなほど可愛らしいというのに。
「はい、干し肉。のどに支えるから、硬いまま丸呑みしないようにね」
『おー』
硬直している啓璋の代わりに、料理の手を止めた友寧が準備しておいた干し肉の欠片を、白雪が住処としている古びた茶碗に入れてやった。常に水が張られているため、そこで干し肉をふやかすことができる。
「くそっ、春蘭も早く帰って来いよな！」
苛立ちを紛らせるように、啓璋はぶつぶつと文句を言い始めた。
「仕方ないよ。妓楼のお手伝いで忙しいっていうんだから」
春蘭からの文には、当分の間、妓楼で世話になると書かれてあった。疫の流行で、貧民窟の周辺はかなりの被害を受けたと聞く。花街もそこに含まれていた。
「……なぁ。あいつは本当に、妓楼で働いてると思うか？」

「だって、そう書いてあったよ」
神妙な顔つきの啓璋に、友寧は首を傾げた。
「おかしいと思わないか？　旦那様はいきなり鍛錬を始めるし……そりゃ、昔に戻ったみたいで俺は嬉しいけどさ。でも、あんまりにも突然だろ」
「うん……」
「なにかあったのかなって、そう思えてしかたないんだ」
確かに、主の行動はあまりにも突然だった。禁軍に所属していた際に使用していた剣を研ぎに出してほしいと頼まれ、自らは弓の手入れを始めた。それに、毎日のように行われる鍛錬は、友寧や啓璋から見ても度を越したものだった。
変わったのは、少し前。春蘭が妓楼に連泊するようになってからだ。それまでは、三日に一度の割合で鄭家に戻っていた春蘭が、ほとんど顔を出さなくなった。代わりに仲望が妓楼に通う日々が続き、宮中で行われた宴の日を境に、より鍛錬に身を入れるようになった。
「旦那様が変わったのは、あいつが来てからだろ。だから、姿を見せないことと、なんか関係あるのかなって思ったんだよ」
「つまり、旦那様が僕らに隠しごとをしてるっていいたいの？」
春蘭の身になにかあったのならば、友寧と啓璋にも知らせるはずである。なにも言わないのならば、それはかなり深刻なものではないだろうか。
だが、友寧は努めて明るい声を出した。
「じゃあ、僕らは余計になにも知らないふりをしなきゃいけないね」
「な、なんでそうなるんだよ！」
「だって、本当のことを知ったら、僕は絶対に落ち込むもの。啓璋だってそうでしょう？　旦那様にいらない心配をかけたくないから、なにも聞かない方がいいと思うんだ」
「それは、そう、だけど……」

啓璋は自分を頼ってほしかったのだろう。寂しげな表情を浮かべ――白雪から離れたところにある――椅子に座った。

「大人だったら、違ったかな？」

「違ったと思うよ」

「俺たち、まだ十三だもんな……」

使用人たちが鄭家を出て行った際、友寧と啓璋はここに残った。

頼る親戚もなければ、十歳にも満たない子供を住み込みで雇ってくれる場所もない。正直なところ、行く当てがなかった。

養う余裕はないと、屋敷を追い出されてもおかしくない状況だった。だが、いたいならいればいいと、仲望は言ってくれた。それがどれだけ嬉しかったか。啓璋と抱き合って大泣きした。

「今は、僕たちにできることをしようよ」

「わかったよ……」

励ますために肩を叩けば、啓璋はふて腐れたように頬杖をついた。

友寧は竈に鍋をかけた。水を半分ほど張って、沸騰したところに切った野菜を硬い順に入れていく。味を調え、とろみをつけたあと、そこに古くなった餅を砕いて揚げたものを加え、しばらく煮込めば完成だ。

「器に盛るから、旦那様と楊秀様のところへ運んでくれる？」

「おー、任せとけ」

大きめの器にたっぷりと取り分け、先に準備しておいた蕪の漬け物を盛った小鉢と一緒に盆に載せる。仲望も食べるだろうと、こちらは少なめによそう。

啓璋に手渡せば、満面の笑みを浮かべ軽い足取りで厨房を出て行った。白雪から離れられるのがよほど嬉しいらしい。

「こんなに可愛いのに」

『ほしにく、うまー、まー』

「……ねぇ、白雪。お前のご主人様はどうしている

のかな？」

小さな頭を指先で撫でれば、気持ちよさそうに目が細められた。

友壽だって、主の様子がおかしいことくらいわかっていた。でも、自分たちにできることは限られている。

だから、不安そうな顔はしないで、なにも気付かないふりをして、いつものように笑うのだ。

『しゅんらん、げんき』

「ふふふ。きっと、そうだろうね」

干し肉をもう一欠片、摘んで碗に入れると歓喜の声があがった。

藍色の襦裙に着替え終えたところに、その使者はやってきた。

薛昭儀と黎貴妃から返答があったのは翌日のことだ。身籠もっている薛昭儀には具合が優れないことを理由に面会は断られたが、文の末尾には日を改めてとあった。

一方、黎貴妃の文には、面会を承諾する旨が書かれており、差し障りがなければ二日後に、とのことだった。

春蘭は準備を侍女たちに任せ、自身は退路の選定に取り掛かっていた。玄楽から逃げる道と、後宮から抜け出す道の二通りを考えておけば問題はないだろう。むろん、日中は明佳たちの目があるため、室で大人しくしている。主に行動するのは夜だ。

白桃に跨がり、安世の説明を思い出しながら屋根伝いに建物の位置を確認した。後宮の外壁まで行って、禁軍兵たちが警備をしている姿も見た。総じて外へと通じる門のある場所の警備が厳しく、外壁の周囲は常に禁軍兵が巡回を行っていた。

やろうと思えば、誰に姿を見られることなくここから脱出することは可能だろう。もっとも、それは後宮での立場が悪くならない限り、実現することは

なさそうだが。

おかげで日中はうたた寝していることが多く、明佳に気分が優れないのではと心配されてしまったほどだ。

そして、早朝から眠い目を擦りつつ明佳たちに着飾られ、昼を過ぎたあたりでようやく終わったところに、一人の宦官がやってきた。

若い男だ。二十歳を過ぎた辺りだろうか。妃妾たちに引けを取らないほど整った容姿に、花が綻ぶような笑みを湛えている。

春蘭の傍に控える侍女たちが、一様に頬を赤く染める。唯一、明佳だけが硬い表情で宦官を見つめていた。

「――初めまして、春蘭様。私は張元法と申します」

凛とした張りのある声だ。だが、侍女たちがうっとりと聞き入るそれに、春蘭は感情の籠もらない冷たい印象を受けた。もっとも、貼り付けられた微笑みも同じようなものだが。

「本日は、陛下の命でお迎えにあがりました」

「お待ちください。そのような先触れは受けておりません」

柔和な表情を崩さない明佳には珍しく、厳しい声が飛ぶ。元法は花のような笑みを一転させ、咎めるように明佳を睨みつけた。

「侍女風情が口答えをするか」

「通例ならば、先触れを出すものです」

あくまでも非礼はそちらの方だ、と明佳は強硬な態度を崩さない。

「私が他の妃妾の手先だとでも？」

「可能性は否定できません」

「陛下の命に逆らえば、主も罰せられるぞ。それでも楯突くというのか？」

元法の言葉に、明佳の顔は青ざめた。それを横目で見ていた春蘭は、いつにも増して重量のある頭に気をつけながら椅子から立ち上がった。

「すまぬな。明佳はしっかりしているようで、とても心配性なのだ」
「……そのようですね」
「ぬしについて行けばよいのか？」
「はい。ご案内するよう仰せつかっております」
「では、よろしく頼む」
元法は意外そうな眼差しを春蘭に向けた。侍女に守られているだけの、か弱い娘だとでも思っていたのだろうか。
「明佳。先方には、遅れるという旨を伝えてもらえるか？　場合によっては、日にちを改めてもらった方がよいかもしれぬな」
「……承りました」
春蘭を見つめる明佳の眼差しは、不安そうに揺れている。皇帝からの急な呼び出しが、本物であるかどうか心配なのだろう。それだけ、元法という宦官は信用できない人物なのか。
「さて、参ろうか」

今日の装いはいつもの暖色系統ではなく、春蘭には珍しい藍色でまとめられている。
上衣と下衣は深みのある青で、腹部に巻かれた腰裙は白地に青い花柄が染め抜かれた一品だ。下衣の合わせ目から覗く白い裳裾が、襦裙の色をより際立たせていた。
そして、髪型も侍女たちの気合いで調えられていた。頭上で蝶が羽を広げたように結い上げられた髪には、見事な細工が施された銀色の簪と、青みがかった乳白色の石で作られた小さな花の簪が挿されている。これが見た目よりもかなり重い。化粧も当然のように、ここにきて一番の厚塗りをされてしまった。
――皇帝の前に出る格好としては、及第点か。
黎貴妃と会うためのものだが、これから準備していたらこうはいかなかっただろう。
「ご予定がおありでしたか？」
「少しな。なに、陛下からのお呼びの方が重要だ。

先方もわかってくれるだろう」
　元法は探るように目を細めた。それに気付いた春蘭は、適当にはぐらかす。
「して、なぜ私は呼ばれたのだ？」
「申し訳ありませんが、理由は存じ上げておりません」
「ふむ。では、このような唐突な呼び出しはよくあることなのか？」
「……後宮に棲まう者、常に陛下のお召しに応えられるよう支度しておくべきではありませんか」
　答えをはぐらかすような返しに、春蘭は歩きながら元法を一瞥した。
「もっともな意見だ」
　追及することもできたが、春蘭はあえて同意するだけに留めた。
　元法がどのような人物かは不明だが、無闇に反感を買ってもろくなことはない。後宮に来て、初日以降は、明佳や安世、青乎といったこちらを慮ってくれる者たちとばかり接していたため、このように詮索されるのも、値踏みするような視線で見られるのも久し振りだ。
　――やはり、あまり気分のよいものではないな。
　裳裾を踏まないように気をつけて歩きながら、春蘭は元法の視線に気付かぬ振りをし続けた。
　九嬪の間に出ると、当然のように妃妾たちの姿が見られるようになった。すれ違う妃妾たちは、元法に熱い視線を向ける者と、顔を真っ青にして足早に去る者に分かれた。憧れはあるが、同時に恐れられてもいるようだ。
　一方の春蘭は、妃妾たちにこれでもかというほど憎しみの籠もった眼差しを向けられた。これで皇帝から呼び出されたと知られたら、さすがに妨害はされないだろうが、すれ違い様に嫌味の一つや二つは頂戴していたかもしれない。
　ときおり確認するように春蘭を振り返る元法の視線を感じながら進めば、やがて人気のない廊下へと

至った。

宦官や侍女、妃妾の姿どころか人の気配すら感じられない。元法は迷うことなく、静まり返った廊下を歩いていく。

「こちらにございます」

やがて辿り着いたのは、重厚な扉の前だった。両脇には、鉄製の棒を持った屈強な警備兵が立っている。

「李春蘭様をお連れいたしました」と、元法が告げれば、中より「入れ」と、重みのある声が響いた。元法が振り返り、春蘭を目で促す。どうやら、ここからは一人で向かわねばならないようだ。開かれた扉を、春蘭は一人で潜り抜ける。

室内は皇帝の居室かと疑いたくなるほど、質素なものだった。室を飾る装飾品や調度品の類はなにもない。中央に朱塗りの座卓が置かれ、その左右には古い装丁の書物が積み重なっていた。

皇帝沸儀は、円座に腰を下ろし座卓の脇にある書見台を使っていた。書物を捲り、準備された半紙に筆を走らせている。

こういう場合は決まった口上のようなものがあるのだろうか、と春蘭が考えていると、再び沸儀の声が響いた。

「傍に座れ」

なるべくならばこの男の近くには行きたくない。春蘭は手を伸ばされたら届くかどうかという辺りに腰を据えた。

沸儀と顔を合わせるのは、先の宴以来だ。改めて見れば、巌のように重厚な印象を受ける。そこにあるだけで、人を威圧して止まない。年齢は四十を過ぎているが、上品な袍の上からでも未だ衰えを知らぬ隆々とした肉体が見て取れた。

「近々、宮中で宴を催すゆえ、そなたにも出席を命じる」

先日、宴を猩猩緋に襲われたばかりだというのに、また同じことを繰り返すつもりなのか、と春蘭は呆

れた。だが、内心を顔には出さず、了承の言葉を告げる。
「わかった。ところで、それを告げるために私を呼んだのか？」
「いや。宴の前にもう一度、餌の様子を見たくてな」
「大物はかかりそうか？」
沸儀は春蘭に向けていた目を細めた。
「ふむ。その様子だと、大物はなかなか姿を見せぬか」
「手強い獲物ほど、そういうものだ」
「何度も言うが、私に餌の役目が果たせるとは思えぬのだがな……」
嘆息した春蘭は、ふと思いついたように沸儀を見上げた。
「――疑問なのだが、なぜ太子を呪殺しようとしているのだ？」
ことり、と沸儀が手にしていた筆を硯に置く音がした。こちらに向ける目からは、感情の色は読み取りにくい。
「気付いたか」
「あの時は気付かなかったが、宴で披露した占はどれも自分でも驚くほどはっきりとした結果が出た。あの場所は異常なほど、地脈の巡りがよい。それは宮中全体にも言えることだ。ここまで規模が大きいと、意図的に仕組まれたものだと考えた方が自然だ」
同時に、春蘭は龍天山でのことを思い出した。守り神である龍は、何者かに呪をかけられ本来の力を封じられていた。もしも華安の守り神が健在であったならば、このような地脈の流れはすぐに正されていたことだろう。
その土地を守る神の力を抑え、自分たちが呪殺を行うに適した環境を作る――それは、春蘭が人として生きていた時代。もっとも恐れられた呪術の集団が用いていた手法だ。
「そして、太子は異様なまでに弱っていた。もしか

したら、と思ったが当たりだったようだな」
「あれと会ったか」
「呪殺は、暗殺が困難な人物に用いられる手段だ。皇帝であるぬしか、それとも太子か。これは、実際の姿を見ればどちらが標的となっているか、一目瞭然であったがな」
それは、春蘭が太子と知り合いだったから気付けたことでもある。
春蘭は太子としてではなく、茶屋に居候している呂翰栄(りょかんえい)として知り合った。一度目は往来で春蘭が怪我を負ったところに居合わせ、二度目は妓楼の客として顔を合わせた。
だが、翰栄は華安に疫が流行(はや)り始めた頃、突如として行方を晦ませた。居候していたはずの茶房は店を畳み、捜そうにも手掛かり一つない。しかし、春蘭は意外なところで翰栄と再会することになる。
猩猩緋の襲撃から逃れていた時のことだ。たまたま助けた人物が翰栄だった。きらびやかな礼装に疑問を覚えたが、それ以上に翰栄の衰弱振りが激しく、行方を消してから今までの間になにがあったのかと、驚愕したくらいだ。
その翰栄が太子博焚だと知った時、春蘭の脳裏に引っ掛かったのは、呪術者の集団だった。
試しに、沸儀に鎌(かま)を掛けてみれば、案の定、肯定の言葉が返ってきた。
「ぬしは強敵と戦いたかったのではないのか？　呪殺によって太子が死ねば、今まで静観を決め込んでいた意味がなくなるぞ」
詳しくは知らなかったが、次代の帝位を巡って太子派と公子派の争いが繰り広げられていることは理解していた。
沸儀は、己の一言で決着がつくにもかかわらず、なにもせず傍観に徹していた。それは、太子が自分に牙を剝くのを待っていたからではないのか。呪殺という方法で解決してしまっては、意味がないだろう。

「あれは生温い。余を殺すのではなく、幽閉するつもりのようだ」
「親殺しは大罪だ。子として、当然の判断ではないか」
「それではつまらぬ。死を意識すれば、あれも、あれの周囲の者らも、幽閉などと悠長なことも言っていられまい。本気で余を殺しにかかるだろう」
　殺意をもたれることに、なぜそれほどまでに喜びを感じられるのだろうか。憎しみの目で見られること自体、常人には耐え難い苦痛だ。それをあえて求める沸儀に、春蘭は眉を顰めた。
「わからぬな。どうして、そこまでして争いを求める？」
「――娘よ。これが見えるか？」
　片手で袍の上衣をくつろげた沸儀は、己の左胸を春蘭に見せた。そこには、金色の玉が埋め込まれていた。
「生き残るために埋めたものだ」
　気術兵の証である玉は、使い手に強大な力をもたらす。だが、施術は難しく、適応する肉体と適応できない肉体があった。
　それでも、施術を望む者は多いと聞く。危険ではあるが、成功によってもたらされる利益は莫大だ。一介の平民から、禁軍の将に上り詰めることも可能だと言われるほどに。
「これがなければ、余はここにはいなかっただろう」
　胸に埋め込まれた玉が、争いを求めることと関係があるのだろうか。袍を戻した沸儀は、唇の端を持ち上げた。
「争いこそが余の人生なのだ。それ以外に生きる術はなかった。ならば、命が尽きるまで争いを求めようではないか」
　人の数だけ、様々な生き方がある。春蘭が人でありながら守り神となったように、この男の生涯は戦で満ちているのだろう。

ただ、それに巻き込まれた者たちは、不憫としか言いようがない。実の父親に呪殺されかかっている翰栄は、いったいどうするつもりなのか。沸儀が望むように刃を向けるか、それとも己の運命を受け入れるか――。

親しいというほどの間柄ではなかったが、できれば翰栄には生き延びてほしい。しかし、それは目の前の男との争いにも繋がっていた。

「ふむ。宴を仕切り直すことにも意味がありそうだな」

「なに、こちらから戦の場を提供しただけのこと」

「それは猩猩緋にか？　それとも、太子にか？」

「どちらもだ」

双方を同時に相手取ってもなお、勝利するという自信があるのか。そこまで争いを求めるのか、と春蘭は嘆息した。

一途なほどに争いを求める男の気持ちが、邑を守ることに己を捧げた春蘭にはわからない。

「用件は済んだ。下がれ」

沸儀は興味を失ったかのように、書物へと目を落とした。

この男が健在な限り、華国は滅びることはないだろう。だが、生きるために争いを求める男によって、幾千もの血が流れ、民は疲弊する。

だが、春蘭にはそれをどうすることもできない。守り神である自分とは対極に立つ相手を眺め、春蘭はなにも言わずに室を去った。



書見台の書物が閉じられるのを見計らって、脇に控えていた元法はすかさず次を差し出した。

「――時に、新しい妃妾様の位が決まっておりませぬが、いかがなさるおつもりですか？」

沸儀は元法を一瞥しただけで、渡された書物の頁を捲った。文字を読み、必要な箇所を半紙に書き写していく。

「二十七世婦あたりなどいかがでしょうか。頃合を見て九嬪に位上げなされば角も立ちますまい」

「黙れ」

元法の肩が揺れた。沸儀の鋭い視線に慌てて平伏する。

扉の傍に控えていた、管招達はそれを横目で眺め、愚かなことだと嘆息した。今の発言は、明らかに宦官の権限を逸脱している。

妃妾の管理は確かに彼らの仕事だが、新しい娘は諸侯から押しつけられたものではない。皇帝自ら後宮に召し上げた娘の位に口出しするなど、思い上がりも甚だしい。

沸儀の寵愛を受けていると慢心しているようだが、それはあまりにも脆弱な土台である。元法は無能ではないが、けっして有能な人物でもない。唯一、他人を蹴落とす能力に長けているおかげで、沸儀の傍に侍ることができるのだ。

「下がれ」

無慈悲な命が下る。ここで下手な弁明をしないのが、今まで元法が生き残ってこられた理由だ。沸儀に泣きつき、そのまま剣の錆となった宦官は数え切れない。

「小賢しい真似はしないことだ」

すれ違う際、元法にだけ聞こえるように呟けば、嫉妬に塗れた視線で睨みつけられた。まるで鬼の形相だ。

宦官と官吏では、立場も職務も違うのだが、顔を合わせる度に憎悪の籠もった眼差しを向けられる。個々が持つ権限や位では、門下省の最高責任者である招達が上回っているが、名家の出ではないため侮られているのだ。

元法の足音が消え、居室に沈黙が降りる。しばらくの間、書物を捲る音だけが響いていた。書物を閉じた沸儀は、筆を硯に置くと招達に視線を寄越した。

「用件をもうせ」

「宴の手配が完了いたしました。おそらく、すでに猩猩緋側も情報を摑んでいるかと」

「そうか」

沸儀の顔が愉悦に歪む。

思えば、沸儀の歩んで来た道は無数の屍と、それらが流した血で彩られていた。だが、そうする以外に生き残る術がなかったのだ。沸儀に一番近い場所で、招達はその生き様を見続けてきた。

「……陛下に初めてお会いした時のことを思い出しました」

ふと心に浮かんだ過去の情景に、招達は懐かしげに目を細めた。

沸儀は禁軍の将として、己は一介の官吏として。もっとも、それは出会いと呼べるほどのものではなく、皇帝に反逆した官吏を斬り捨てる沸儀の姿を、遠巻きに見ただけだったが。

「あなたは昔から、罠を仕掛けるのが上手かった。こちらからはけっして手を出さず、相手をぎりぎりの淵まで追い詰め――」

自棄になって暴動を起こしたところを、圧倒的な力によって平らげるのだ。なんと理不尽で見事な策略だろうか。

帝位に就いてからの沸儀は、五大夫との戦に明け

暮れた。五大夫は禁軍の将を勤めた武官と、三省に属し、中書令、侍中、尚書令のいずれかを勤めた文官から選ばれる。私兵の所有など、様々な特権が認められ、時には皇帝を傀儡とし、自らが専横を振るうこともあった。五大夫との戦いは、策略を巡らせての駆け引きだった。その時には招達も沸儀の傍にあり、自らも様々な献策をした。

五大夫の権限を形骸化させ、再興が不可能なほどに叩き潰したあと、沸儀が目を向けたのは西だった。辺境を騒がせている異民族を次なる標的に定めたのだ。

沸儀は強敵を求める。だから、あえて異民族を連合させるように動いた。一つ一つ虱潰しにするには、労力も時も掛かりすぎるということもあったが、一番の理由は、まとめた方がより楽しめるからだ。その結果、皇帝自らの出陣により連合軍は見るも無惨に大敗した。

そして今、沸儀の目は実の息子である博焚と猩猩緋に向けられている。

「太子と猩猩緋を倒したあとは、いかがなさるおつもりですか？」

「余が帝位にある限り、敵は嫌というほど沸いてくる。そうではないか？」

ならば、華国の未来はより凄惨なものとなるだろう。それでも沸儀についていくと決めたのは、他ならぬ自分自身だ。その決断を後悔したことは一度としてない。

「招達。貴様も敵として余に挑んでもよいのだぞ」

冗談ではなく、本気でそう考えているあたりが沸儀らしい。

「では、めぼしい敵がいなくなってしまったあかつきには、この私が敵となり、陛下を楽しませてみせましょう」

沸儀が望むのであれば、全力で応えなければならない。招達は苦笑しながら了承したのだった。

無事に室へと戻った春蘭を待っていたのは、黎貴妃つきの侍女だった。

二十代後半の、意志の強そうな美女である。明佳に似ていると思って尋ねて見れば、二人は姉妹なのだという。蘭凜凜というのが、その侍女の名だった。確かに並べてみれば、姉妹とわかるほどよく似ていた。

「黎貴妃様がお待ちでございます」と告げられ、連れられて向かったのは、西離宮だった。

てっきり日を改めるものだと思っていたのでそう訊ねれば、「それには及びません」と、凜凜は言った。

真夜中に幾度か屋根伝いに観察したことはあるが、西離宮の内部に足を踏み入れるのは初めてのことである。

「こちらにございます」

案内されたのは、庭に面した客房だった。風通しのよい室内には、そのまま庭に出入りできる内扉があり、見事な景色を望むことができた。

客房の中心に、卓を挟んで向かい合わせる形で置かれた長椅子は、背もたれ部分に見事な透かし彫りが施され、色鮮やかな布の袋に綿を入れて作られた背あてが並べられていた。

左右の壁には掛け軸の代わりに、美しい異国の壁掛けが飾られ、室内には香木を焚いたのか、うっすらと甘い香りが漂っている。

黎貴妃は庭に通じる扉のところに立っていた。驚くほどほっそりとした女である。

憂いを含むように寄せられた柳眉は艶めかしさを強調し、佇んでいるだけにもかかわらず壮絶な色香を振りまいている。傾国とは、このような人物のことを言うのだろうな、と春蘭は内心で感心しながら頷いた。

「李春蘭様をご案内いたしました」

「ありがとう。もう下がっていいわ」

黎貴妃は薄紫色の裳裾を靡かせながら、優雅な所

作で長椅子に座った。春蘭も勧められるまま、向かい側に腰を下ろす。

「お久しぶり、と言った方がいいかしら」

「やはり覚えていたか」

気付いていなければ、ここまで春蘭に便宜を図ってはくれなかっただろう。凛凛の妹である明佳を春蘭につけたのも、黎貴妃からの指示だったに違いない。

「しかし、それならば、なぜここまでよくしてくれるのだ？」

春蘭は黎貴妃の弱味を握っている。

むろん、一介の妃妾でしかない春蘭が、夫人の座にある黎貴妃の秘密を暴露したとしても信用はされないだろう。だが、わずかな疑念から種が芽生えることもある。

春蘭の問いに、黎貴妃は寂しげに目元を緩めた。

「……あなたのおかげで、私は兄を恨まずにすんだ。そのお礼だと思ってくれればいいわ」

「あれは自己満足のようなものだ。礼をされるようなことではないが、さすがに今回はとても助かった。特に明佳をつけてもらわなかったら、私は苦労しただろう」

妃妾には必ずしも侍女がつくとは限らない。位の低い妃妾は、侍女に雑用を頼むことはできても、こちらから声をかけない限り必要最低限のことすらしてもらえないのだという。

むろん自分のことくらい自分でできるが、春蘭は後宮の仕来りにかんする知識を持ち合わせてはいない。そういう面では難儀したはずだ。

「役に立ててよかったわ。あなたはなにをして陛下に気に入られてしまったの？」

黎貴妃の眼差しは真剣そのものだ。そこには廊下ですれ違った妃妾たちのように、嫉妬や憎悪といった負の感情は見られない。四夫人という高位に立つ黎貴妃だったが、望んでその場にいるわけではないようだ。

「私は餌なのだそうだ」
「……どういう意味かしら？」
「敵は強い方がいいらしい。私を手元に置くことで、相手の憎悪を煽る――そんなところか。もっとも、効果があるとは思えぬがな。私は都合がいいので、ここに留まっているだけだ。その気になればいつでも逃げられる」
「そう……なら、心配はないわね」
安堵に胸を撫で下ろす黎貴妃を眺め、春蘭は違和感に首を傾げた。
以前に顔を合わせた時よりも、身に纏う空気が穏やかになったように見える。復讐するのだと、壮絶な笑みを浮かべていたあの頃の危うさは感じられない。
「ところで、ぬしに少しばかり訊きたいことがあるのだ。猩猩緋の一員で、鄭玄楽という男を知らぬか？」
かつて己を見捨てた者たちの名に、黎貴妃は一瞬ではあったが体を強張らせた。だが、すぐに気持ちを落ち着け、反芻するように視線を宙に彷徨わせる。
「……聞いたことはないわ。でも、本名を名乗っているのはごく一部の者だけよ。親族がいる者たちは、たとえ仲間内だったとしても本名を隠すことがほとんどだったわ」
「では、赤い髪と眼を持つ男はどうだ？　年齢は二十代後半で、恐ろしいほど腕が立つ」
目立つと思うのだが、と告げる春蘭に黎貴妃は驚いたように目を瞠った。どうやら、心当たりがあるようだ。
「知っているのか？」
「え、ええ。名は〝朱緋〟。それ以外に、赤い髪と眼を持つ人物はいないわ」
黎貴妃はそう言いながら、複雑そうな表情を浮かべた。
「知り合いだったのか？」
「……兄に戦い方を教えた人よ」

おそらく、黎貴妃にとっても親しい間柄だったに違いない。玄楽は彼女が攫猿に攫われたと聞いた時、助けに向かおうとは思わなかったのだろうか。

「でも、どうしてあの人のことを？」

「追われているのだ。しかし、なぜ玄楽――朱緋が私を狙うのかがわからない。あやつが携わっていた任務について、なにか聞いたことはないか？」

「私が猩猩緋を抜けてかなり時が経っているから、詳しいことはなにも……」

「そうか。嫌なことを思い出させて、すまなかったな」

黎貴妃――梁華は、攫猿という妖に攫われた。しかし、それを知った仲間たちは、あえて梁華を見捨てた。

攫猿が住むのは、人がけっして近付かない山塊だ。それでも、地道に捜せば、梁華を見つけることはできただろう。

ただ、それにはかなりの時と人員がかかる。猩猩緋側にその余裕はなかったがため、行方知れずとして処理されたのだ。唯一、彼女の兄だけが真実を知らされなかった。

「さて、あまり長居するのも悪い。そろそろ戻るとしよう」

しかし、腰を上げようとした春蘭を黎貴妃が呼び止めた。

「いいえ、もうしばらくいた方がいいわ」

「なぜだ？」

「あなたが陛下に呼ばれたことは広まっている。昼間に呼び出されることはとっても珍しいの。だから、余計に妃妾たちの嫉妬を買っているはずだわ」

「面倒なことだな」

交わされた内容は、実に殺伐としたものだったのだが、それで妬まれても迷惑だ。もっとも、自分は競争相手になり得ないといくら語ったところで、信じてもらえるとも思わないが。

「でも、私があなたを西離宮に招いたと知れば、彼

女たちは静観するわ。自分たちがわざわざ手を出さなくても、私があなたを追い出しにかかると考えるはずだから」

「だが、ぬしが私に便宜を図ってくれたことは、誰もが知っているのだろう？」

「私は気まぐれで嫉妬深い女なの。室に戻ったあと、落ち込んだ素振りをしなさい。それだけで、侍女たちが勝手な解釈を広めてくれるわ」

黎貴妃にまつわる噂を逆手に取った作戦である。しかし、と春蘭は顔を顰めた。

「よいのか。ぬしの悪い噂が、また一つ増えるぞ」

「今更よ。悪評が立つように、せっせと動き回っている人たちがいるから」

脳裏に浮かんだのは、先の宴で春蘭を殺そうとした王恵妃である。あの性格ならば、侍女たちを使って黎貴妃の不利となるような噂を流していてもおかしくはない。

「それと、妃妾たちのこともあるけど、張元法には気をつけなさい」

「私を皇帝の元まで案内した宦官だな」

「あの男は、人を蹴落とすことが上手だから。そうやって、今の地位を手にいれたのよ」

黎貴妃は心底忌々しげに顔を歪めた。四夫人にまで上り詰める間に、彼女もその被害にあったのだろう。

「明佳に聞いたわ。先触れがなかったのも、元法の仕業でしょうね。時間がないからと、そのままの格好で陛下の御前に連れて行って、恥をかかせようとしたのよ。あの男が使いそうな手だわ」

「では、私は運がよかったな」

黎貴妃と会うために準備をしていたので、気付かずに姑息な嫌がらせを免れていたらしい。もっとも、着飾らずに皇帝と面会したところで、なんの問題もないのだが。

「難癖をつけてきたら、平然としていなさい。弱さを見せれば、ここぞとばかりにつけ込まれるわ」

「わかった」
　室に閉じ籠もっていれば、顔を合わせる心配もないだろう。それに、宴まではその準備で誰もが慌ただしくしているはずだ。
「気になることがあったら、明佳を寄越して。たいていのことなら、私の方でどうにかできるわ」
「手間をかけさせてすまぬな」
　ありがとう、と笑顔で告げれば、黎貴妃はなぜか泣きそうな顔で微笑んだ。
「こんな形でしか、罪滅ぼしはできないから」と、言って。

　槍幽が再び姿を見せたのは、終刻の鐘が鳴る前のことだった。
　酷く疲れた様子で、床に座っていた洪采の前に腰を下ろす。
「悪い話ばかり持って来たっていう顔だな」
「ご名答ですよ。まあ、一つだけいい話もあるにはありますが」
　はぁ、と槍幽が脱力するように溜息をついた。
「宮中でまた宴が催されるようです」
「……どういうことだ？」
「宴を仕切り直すことで、猩猩緋を恐れていないと、喧伝するつもりなのだと思います。もう一つは、我々を誘い出そうとしている可能性ですね」
「馬鹿馬鹿しい。禁軍が待ち構えていると知って、そんな誘いに乗ってられるか」
「それが微妙なところなんですよ。妨害しなければ、今度はこちらが先日の襲撃で懲りたのだ、もしくは、もう朝廷を脅かすほどの力はないのでは、と民に勘違いされる恐れもありまして」
　だからと言って、迂闊に動くこともできない。あれは奇襲だからこそ効果があるのだ。真正面からぶつかって勝てるほど、禁軍は——皇帝は生易しい存在ではない。それを、洪采は先日の襲撃で嫌という

ほど味わわされた。
「それでも、むりなものはむりだ。下手をすれば猩猩緋は壊滅するぞ」
「わかってますよ。ですが、兎天様より、猩猩緋の全総力を結集して襲撃をかける旨が通達されました」
そんな馬鹿な、と洪采は思わず呟いていた。明らかに罠とわかっていて、それにわざわざ掛かりに行くというのか。あまりにも無謀な命令に、さすがの槍幽も顔色が悪い。
「勝算はあるのか？」
「はい。なんでも、皇帝を討ち取れる秘策があるそうです」
「……秘策？」
「詳しいことはわかりません。皇帝が姿を見せる宴こそが、絶好の機会だと言っていました」
「なら、なぜその秘策とやらを前回の襲撃に使わなかったんだ」
洪采は皮肉たっぷりに吐き捨てた。あれほど無防備に姿をさらしていたのだ、秘策とやらを実行するまたとない機会だっただろう。
「ううっ、私に訊かれても困りますよ。それに、いくら無謀だと抗議しても、兎天様は命令の一言で終わらせてしまって……。正直、私にもなにがなんだか……」
これは本当に紅主からの命令なのだろうか。兎天が捏造しているのではと、疑いたくなる。しかし、任務にもっとも忠実なのは、他ならぬ兎天自身だ。任務成功のためには、どんな犠牲も厭わないほど。
「宴はいつ行われるんだ？」
「十日後と聞いています」
「……わかった。俺も出る」
洪采の言葉に、槍幽は慌てたように身を乗り出した。
「だ、だめですよ。その怪我でなにができるというんですか！」

「片腕があれば槍くらい振るえる。兎天殿がまたなにかを企んでいるとすれば、真偽を見極めるいい機会だ」

正直、痛みはかなりある。左肩自体が熱を帯びたように熱く感じられるほどだ。十日もあれば痛みはだいぶ引くだろうが、槍幽の言う通り槍を握るのは無謀だ。相手が皇帝なら、一瞬で斬り捨てられてしまうだろう。

だが、兎天を尾行して、その目的を探る程度なら問題はない。

「むりはしない。〝全総力を結集して〟と言うんなら、俺も入るだろ」

「はぁ……。わかりましたよ。どうせ、止めても無駄でしょうしね」

「悪いな。そういえば、師匠はこの話を聞いているのか？」

兎天と対等の立場である朱緋ならば、この無謀な襲撃を止めてくれるのではないだろうか。一抹の期待が洪采の胸を過るが、返ってきた言葉はその逆だった。

「朱緋様は反対しませんでした。むしろ、精力的に動いているようです」

「賛同したっていうのか？」

「はい」

槍幽は神妙な態度で頷いた。洪采同様、朱緋の態度に違和感を覚えているようだ。

「師匠は〝秘策〟について、なにか知っている様子だったか？」

「いえ、顔を合わせたのは一度きりでしたから。さすがにそこまでは……」

自分が会いに行ければいいのだが、洪采は医師から外出を禁じられている。

「俺が自由に動けりゃ、話は早いんだがな」

せめて、兎天の奇妙な行動を朱緋に相談できたなら。解決はできなくても、信頼できる相手に話したということだけで気持ちが軽くなる。

「だめですよ。怪我が悪化したらどうするんですか」
「でもさ、一日中ここに閉じ込められていると、暇で暇で」
　室内での鍛錬も当然のように禁止されているため、毎日、暇で仕方がない。疲れを滲ませながらも、わざわざ見舞いに来てくれる槍幽に申しわけなさを感じてしまうほどだ。
「今まで働き通しだったんですから、これを機会に体を休めてください。私にしてみれば、羨ましい限りですよ」
「はぁ……そうするか。じゃあ、次はいい話をしてくれ。悪い話は聞きたくない」
「まあ、これ以上に悪い話もないですよ。いい話というのは、冬雁殿の行方が判明したことです」
「生きてたのか？」
　洪采は思わず腰を浮かした。それに、槍幽は笑顔で答える。
「はい。ただ、まだ救出には至っていません」
「動かせないほどの怪我でも負ってるのか？」
「いえ、衰弱しているとの報告はありましたが、怪我はしていないようですよ。衰弱の度合いも、酷いものではないそうです」
「配下の奴らは、詳しい情報を持ってなかったのか？」
「どうも、冬雁殿を見つけた人間というのが、宮中で働いている内通者でして。情報の漏洩防止のため、配下の方々ですら詳細は知らされていないとのことでした。怪我の有無と、救出するまでには時間がかかるということしかわからなかったようです」
「無事ならいいんだけどさ」
　とりあえず、冬雁が無事に見つかったことに洪采は安堵した。
　妹と同じように大事の前の小事として見捨てられたなら、未だに癒えていない心の傷がより深さを増したに違いない。

「他に目新しい情報は？」
「今のところはなにも」
喜びが引くと、洪采の脳裏は先ほどの命令に支配された。
猩猩緋の全総力を結集したことは、今までに一度もない。前回の襲撃ですら、華安とその付近から集められた者たちばかりだ。
西に潜伏している者たちは間に合わないとしても、東都で活動する者たちは間違いなく華安に集められるだろう。いったい、紅主はなにを考えているのだろうか。
「洪采殿は、怪我を治すことに専念してくださいね」
よほど難しい顔をしていたのだろう。医師の言いつけを破って、朱緋に会いに行ってしまうのではないかと、槍幽は危惧したようだ。
自分も信用がない。「今日はここに泊まって行きます」と言って、槍幽はその場で横になって寝てしまった。すぐに健やかな寝息が聞こえてくる。夕餉も取らずに寝てしまうのだから、よほど疲れていたのだろう。
「襲撃、か」
おそらく、前回よりも悲惨な結果が待っていることだろう。それを知りながらも、兎天と朱緋は異を唱えない。洪采が知りえない、なんらかの情報を握っているからだろうか。
――仲間だというのに、わからないことばかりだ。
身の内から湧き起こる不快感に、洪采は深い溜息をついたのだった。

いつものように房室を抜け出した春蘭は、屋根の上に座り夜空に輝く三日月を眺めていた。隣には、白桃が寄り添うように寝そべっている。毎日のように玉から出られるのが嬉しいのか、しなやかな尻尾が機嫌よく左右に振られていた。

「……罪滅ぼし、か」

黎貴妃の言葉が脳裏を過る。あれは、誰に対して感じた贖罪の念だったのか。そして、なぜ今になって心境が変化したのか。

「まあ、復讐に身をやつすよりはよいか」

「バウッ」

同意するように、白桃が咆えた。春蘭は立ち上がり、その背によじ登る。

「そろそろ冬雁の様子を見に行こうか」

そう告げれば、白桃は嬉しげにのどを鳴らした。冬雁のことを気に入っているらしい。

主である春蘭に刃を向けたにもかかわらず、妙に懐かれてしまった冬雁は、顔を白桃に舐められながら、躾がなっていないのではないかと春蘭を睨んでいた。しかし、白桃は誰彼かまわずに懐いているわけではない。むしろ、素っ気ない態度を取ることの方が多いくらいだ。

おそらく、春蘭に対する殺意が消えたことと、強気を装っているが実は素直な性根を、白桃が気に入ったのだろう。子供のように無垢な魂は、神獣の好むところである。

回廊に音もなく降り立った白桃は、ときおり立ち止まって人の気配を探りながら、迷うことなく隠し通路のある廊下まで進んだ。白桃の背を降りた春蘭は、壁の窪みに手を這わせる。

ここ数日で歩き慣れた通路を、燭台の明かりを頼りに進む。

冬雁の衰弱が気になっていたので、今日は干し杏と水の入った竹筒も持参してきた。強情な冬雁は拒むかもしれないが、体力がなければいざという時に逃げられない、と説得すればしかたなく口にしてくれるだろう。

「冬雁？」

小部屋へ入り、燭台で辺りを照らす。しかし、隅に横になっているはずの冬雁の姿はなかった。

床には、冬雁の四肢を拘束していた鉄鎖が無造作



に転がっている。鍵が外されているわけではなく、鎖の途中になにかで切断したような痕があった。ということは、ここに捕らえていた者たちが、彼女をどこかへ移動させたわけではない。

「仲間が助けに来たのか……？」

「ウォオン……」

お座りの体勢で待っていた白桃は、冬雁がいないことを知り悲しげに鳴いた。

「仕方ない。戻るか」

春蘭が通路に出た時である。

奥へと続く路から、低い呻き声にも聞こえる音が響いた。耳を澄ませば、それが複数の声からなっていることに気付く。

「なにかあるのか？」

春蘭が足を向けると、それを阻止するように白桃が立ちはだかった。どうやら、この先に進むのは危険らしい。

「確かに、一本道ではちとまずいな」

前方と後方から挟まれてしまったら、逃げ場はない。むろん、こちらには白桃はいるが、相手がかなりの手練である可能性は否定できない。少なくとも、冬雁を捕らえることのできる人物が一人はいると見て間違いはないだろう。

「ふむ……」

奥でなにが行われているのか、知りたいのも事実だ。しかし、悩んだ末に、春蘭は探索を諦めることにした。

「今日のところは、いったん引き上げよう」

白桃の警告もあるが、この通路がどこに続くかもわからない中、興味本位で進むのは無謀だ。それに、冬雁が逃げたことに気付いて、すでに捜索の手が回されている恐れもあった。

「戻るぞ」

念のために燭台の明かりを消し、春蘭は白桃の背に跨がる。白桃も、いつもより慎重な足取りで歩き出した。

気付けばいつの間にか、不気味な声は聞こえなくなっていた。

通路を出た春蘭は壁を元に直し、白桃の背に戻る。すると、廊下をこちらに向かって進んでくる小さな明かりがあった。

――こんな深夜にいったい誰が。

白桃は音を立てずに走り出した。

春蘭は振り落とされないようにしがみつきながら、背後を見る。暗闇の中、明かりに照らされてぼんやりと浮かび上がったのは、隠し扉の前に立つ陳安世の姿だった。

異様な光景だった。

薄暗い室内に、円を描いて男たちが座している。床は剝き出しの土間で、中央に向かうように緻密な文様が掘られてあった。要所には玉が配置され、中央にはひと束の髪が置かれている。

燭台の炎が揺れる度に、男たちの影も妖しく蠢く。頼りない明かりの中でもわかるほど、男たちの頬は痩け、体は枯れ木のように痩せ細っていた。

男たちが一心に唱えているのは、呪歌だ。人を呪い殺すための術である。

「よろしいですか？」

初老の配下に肩を叩かれた紅箏言は、疲労でまともに機能しない体に辟易しながら呪歌を中断した。ただでさえ白い肌は病的なまでに血の気を失い、眼窩が異様なほど落ち窪んでいる。以前を知る者は、その変わりように驚愕するだろう。

激しいめまいと吐き気に耐えながら、箏言は男の言葉を待った。

「捕らえていた女が逃げました」

「……そうならないように、拘束してたはずでしょ」

猩猩緋の一員と目される女を捕らえたのは数日前だった。

秘密を知られてしまったため、手足を縛って隠し通路にある小部屋に監禁しておいた。さらに、自力で逃げられないように、服用から数日は手足の痺れが続く薬物を少量水に混ぜ、食事も一日一回に抑えた。屈強な男でも、そう簡単には逃げ出せないだろう。

すでに術は阻止できないところまで進んでいるが、情報が漏れ、この場を一網打尽にされるのは困る。今回の成功を足掛かりに、紅家は自分の名の下に復興するのだから。

「仲間がいたようです」

「へぇ。じゃあ、やっぱりここの情報は漏れてたってわけか。まあ、ここまで知られずにいたこと自体が、奇跡みたいなものだけどねぇ」

「室には、切断された鉄鎖だけが残されていました。やはり、あの娘は口を封じてしまうべきだったのでは？」

「だめだよ。呪殺する人間以外の命を奪ってはならない――紅家の家訓だ」

面倒な規則ではあるが、呪術を操る者への戒めが含まれている。

紅家の呪術は、どれほど頑丈な砦に籠もろうとも、確実に相手の息の根を止める。そのうえ、遺体からは外傷も、毒物も検出されず、ほとんどが病死として判断される。それが呪術の利点だ。

しかし、口封じのためとはいえ明らかな他殺体が見つかれば、そこから綻びが生じる恐れがある。呪殺の途中で気付かれる危険もあれば、呪殺が行われたことに気付かれてしまう危険もある。

つまり、呪殺は慎重に行え、ということだ。

「最悪、今回の呪術は外部に知られても、依頼主が陛下だから。誰も恐ろしくて糾弾できないよ。こっちが警戒しなきゃいけないのは、この場に踏み込んで来られることだ。捕らえられるだけならまだしも、斬り捨てられたら復興もなにもなくなってしまうからね」

「では、捜索はしませんか」
「うーん。そう簡単に宮中から出られないとは思うけど、仲間がいるならもう街に逃げてる可能性もある。陛下に頼んで捜してもらっても、無駄じゃないかなぁ」
　それに、呪術は最終段階に入っている。せっかく封じた華安の守り神を、何者かに解放されてしまうという出来事はあったが、もともと宮中は地脈の巡りがいい。
　予定していたよりも少し延びてしまったが、そう遠くない日に呪殺は完了するだろう。
「用件はそれだけ？」
「もう一つあります。数日後にまた宴が行われるようですよ」
「陛下もなぁ」
　やれやれ、と箏言は頭を振った。どうせ、宴を餌にして色々なものを釣るつもりなのだろう。先の襲撃で味を占めたのかもしれない。
「隠し通路に気付かれたことだけは気になるな。最小限の出入り口だけ残して、あとは内側から開かないようにしてくれる？」
「かしこまりました」
「対処としては、そんなとこかな。じゃあ、私は呪歌に戻るから」
「少しは休まれた方がよろしいのでは？」
「まだ平気だよ」
　本当はこのまま眠ってしまいたいが、箏言は気力を奮い立たせる。呪歌は歌い手の数だけ、威力が強まる。
「紅家を再興するためだもの」
　箏言は、父の恨み言を子守歌に育った。先帝に呪術を餌に取り入ろうと画策した父は、貢ぎ物が少ないという理由から面会を拒まれ続け、やがて絶望のうちに憤死した。
　――そう思えば、沸儀に出会えた自分は運がよかったのかもしれない。

紅家の再興という悲願は、箏言を突き動かす。本心から願っているのか、それとも父の妄執に囚われているのか。自らの身のうちはあまりに混沌としていて、判断することはできなかった。



十日の猶予は、あっという間に過ぎた。少なくとも、仲望にとっては、もう当日なのか、といった気分である。

仲望はただひたすら体を鍛え続けた。少しでも昔の勘を取り戻そうと、就寝時以外は剣や弓を握っていたように思う。

宴を猩猩緋が襲撃する確証は、どこにもなかった。ましてや、春蘭を狙う兄がそこに紛れ込んでいるのかどうかすら、あやふやなままである。

しかし、これ見よがしに再開される宴を、猩猩緋が見て見ぬ振りをする可能性は低いように思われた。兄も、春蘭が後宮から出る機会を見逃さないだろう。

――これで、どこまで渡り合えるか。

溜息をつき、仲望は歩みを進めた。宴が催されるのは、楊秀の予想通り後宮にほど近い、北鵺宮だった。

すでに官吏たちが集まっているようで、ざわめきが聞こえてくる。仲望と同じ、官服を着た者たちが集団でぞろぞろと段を登って行く姿も見受けられた。

北鵺宮は、広さに違いがあるだけで華宴宮と似た構造だ。違うところを挙げるとすれば、二十段ほどの石段を登ると、朱塗りの楼門があるところだろう。さらに、北鵺宮をぐるりと囲んでいる外塀は、乗り越えるにはかなりの高さがある。

襲撃され難い造りだが、中にいる者たちも逃げ場は限られている。前回のように火矢を用いられれば、被害はかなり大きくなるだろう。

もっとも、前回とは違い、今回は猩猩緋の襲撃が

予測できるため、北鵲宮に至るまでの間に殲滅できれば、被害が格段に抑えられる。華宴宮では、禁軍兵が逃げ惑う者たちに押され、本来の力を発揮できなかった。

それに今回は、奇襲という手は使えない。襲撃されることを予測して警備も組まれている。官吏たちの中には、楽観視する者もいるほどだ。

これが罠であると猩猩緋側も気付いているだろう。待ち伏せされていると知って、馬鹿正直に向かってくる者はいない。襲撃自体を諦めてくれればよいが、なんらかの対策を講じてくる可能性が高かった。

「あ、仲望様！」

名を呼ばれて振り返れば、黄海楼の妓女見習いである魏祥琳がこちらに向かって駆けて来るところだった。

桃色の上衣に、紫の腰裙、短めの下穿きを合わせていた。髪も飾り気がなく簡素に結い上げられているだけである。手伝いなのだろう。年相応の姿に春蘭を重ね、仲望は思わず口元を綻ばせた。

「あの、まだお時間はありますか？」

「大丈夫だ」

「よかった。仲望様を見かけたら、寄っていただくように月儀姐さん――じゃなくて、楼主様に言われていたんです」

祥琳はまだ幼さの残る顔に、安堵の表情を浮かべた。案内されたのは、北鵲宮の脇にある細い通路だ。北鵲宮の石段前は華宴宮に比べると狭く、俥を置くと通行の邪魔となるため、横道を待機場所として代用していた。

坂になっている部分に、人一人通れるほどの石段が斜めに伸びており、外塀部分に小さな木戸がついている。妓楼の者たちは、そこから出入りするのだろう。

通路には三台の俥が置かれ、周りでは美しく着飾った妓女たちが慌ただしく動き回っている。前回よりも護衛の数が多い。黄海楼も猩猩緋の襲撃に備え

ているのだ。宮中のため帯剣はできないが、代わりに鉄製の長細い棍棒を持っている。

面識のある者たちに挨拶し、仲望は奥へと向かった。そこには、一番奥の俥の荷台に腰掛けながら、帳面を片手に指示を飛ばしている樊月儀の姿があった。

先代の楼主、淘蟬英が亡くなったあと、その座を継いだのが彼女だった。おっとりとした雰囲気の美女だが、今では楼主としての貫禄もついたように思う。

妓女たちと共に宴に出るため、山吹色を基調とした派手な襦裙を身に纏っていた。

「仲望様をお連れしました！」

祥琳が声をあげると、こちらに気付いた月儀が荷台から立ち上がった。

「うるさくて申しわけありません。ばたばたしているもので」

「いや、気を遣わないでくれ。それにしても、また呼ばれるとは災難だったな」

「うちには目立った被害はなかったので、呼んでいただけて助かりますよ。前回分もきっちりと支払っていただけましたしねぇ」

疫の被害を受けた黄海楼にとって、それは一息つけるだけの金額だったようだ。

「宮中の宴に呼ばれたおかげで、ご新規様も増えたんですよ。ただ、噂を聞きつけたのか、秋菊に会わせろとおっしゃる方が多いのには閉口しますが。これぱかりは、なんともできませんからねぇ」

「その件はどうしてるんだ？」

「宴以来、体調を崩していることになっています。春蘭が戻って来てくれるといいんですが……」

そう告げる月儀の表情は寂しげだ。〝秋菊〟は春蘭の占師としての名である。占っているのが子供では、いくら腕がよくても客がつかないだろうという先代楼主の判断で、顔をさらさずに占をしていたのだ。

先の宴では、妓楼の者が顔を隠して秋菊に扮し、春蘭はその介添えとして舞台に登った。それがきっかけで、春蘭が皇帝の目に留まるなどと誰が考えただろうか。

「あ、あの、仲望様！　春蘭から文がきませんでしたか！」

脇に控えていた祥琳が、我慢しきれずに声をあげた。妓楼で一番仲がよかった祥琳は、その後が気になってしかたないのだろう。だが、すぐ月儀の叱責が飛ぶ。

「おやめ。後宮ってところは、妓楼と違ってそんな簡単に文の遣り取りはできないんだよ」

「でも、あんな強引に連れて行くなんて、私、納得できませんっ」

両手を握り締めた祥琳は、理不尽だと必死に訴える。月儀は眉尻を下げて、宥めるように祥琳の頭を撫でた。

「皇帝陛下の思し召しだからね。私らがどれだけ抗議したところで、端から聞く耳なんてもっちゃもらえないよ」

そういうもんなのさ、と月儀は諦めた口調で告げた。春蘭が大人しく連れられて行ったのは、ただ単純に権力に屈したからではなかったのだが、それを説明するのは難しい。

妓楼の者たちにとって、春蘭は占を得意とするだけの無力な少女なのだ。

「仲望様、なんとかならないんですか？」

「祥琳。度が過ぎるよ。一番辛いのは誰だと思ってるんだい」

再び、月儀の鋭い叱咤が響く。己の無配慮な言葉に気付いたのだろう。祥琳は愛らしい双眸に涙を湛え、「ごめんなさい」と震える声で呟いた。

「いや、気にしないでくれ」

「まったく。あんたは、あっちで紅蕪たちを手伝ってきな」

「……はい」

頭を下げて、悔しげに唇を噛み締めた祥琳は通路の奥へと足早に消えた。それを見送って、月儀は肩を竦める。

「申しわけありませんでした。あの子は名家の出なんですけどね、権力がどういうものかいまひとつわかっていないんですよ」

子の成長を見守る母親のように目を細め、月儀は祥琳が去った方向を眺めた。そして、再び仲望へと顔を戻す。

「お呼びたてしたのは、本日の宴のことです。猩猩緋がまた現れる、という噂を耳にしましてね。真偽を確認したかったんですよ。楊秀様からなにか聞いておられませんか？」

「襲撃に備えて、警備を厚くしているとは聞いたが、本当に猩猩緋が姿を見せるかどうかまではわからない」

「そうですか……」

「力になれなくてすまない」

「謝らないでください。なにがあってもうちの子たちを守れるように、警戒を怠らなければいいんですから」

むしろ、わざわざ足を運ばせて迷惑をかけたと、月儀は頭を下げた。用件はそれだけだったようで、月儀はすぐに指示出しを再開する。仲望も宴に向かうべく、その場をあとにした。

官吏たちは大半がすでに大広間へ入ったようで、まわりに官服を着ている者の姿は少ない。代わりに、緊張した面持ちで周囲を見回す兵士たちの姿が目立つようになった。

それを横目で見ながら、仲望が楼門に続く石段を登ろうと足をかけたところ、いきなり横合いから肩を掴まれる。驚いて振り向けば、そこには龍乎である姫子慮と杜文重の姿があった。

「いよっ！」

親しげに声をあげた子慮は、胸甲と背甲を肩の部分で繋げた鎧甲を身につけていた。さらに腕を防御

するための披博と、足を防御するための膝裙、頭部には鉄製の額当てが結ばれている。文重も同じ格好だ。

華安の街を守る龍乎が、なぜ宮中に、と仲望は首を傾げた。

子慮はしてやったりと言わんばかりの笑みを浮かべている。

「びびったか！」

「あんたは子供ですか」

すかさず言葉を挟んできたのは、子慮の副官を務める文重だった。頭痛を堪えるような仕草をしながら上官を窘める。

「どうしてここにいるんだ？」

「聞いて驚け。禁軍に頼まれたからだ！」

「説明しますと、猩猩緋の襲撃が予想されるので、龍乎からも人手を出してほしいと禁軍から要請があったんです。虎慈軍の他に、二隊が加わっています」

「だから、そこまで物々しい格好をしてるのか」

「まあ、北鵺宮の周辺を固めるのは禁軍兵ですけどね。敗走する猩猩緋を、一網打尽にするための要員みたいなもんです。それでも、三隊しか出せないのかと渋い顔をされましたけどね」

雑用ですよ、と文重は冷めた口調で告げた。宮中は広い。すべての通路に禁軍を配置していたのでは、手薄になる箇所が出てきてしまう。龍乎はその穴埋めに呼ばれたということだ。

「じゃあ、なぜここに？」

「隊長が北鵺宮を見てみたいというので、ここまで歩いてきたんですよ。俺はその付き添いです。宮中なんて、迷子にならない方がおかしいですからね。配置場所は、もっと遠くですよ」

子慮の方向音痴は筋金入りだ。巡回の道筋ですら、彼の頭に入っていない。よって、常に部下の誰かしらが子慮の傍に張りつくのが常である。さすがに宮中で迷子になられては堪らないだろう。

「ここが北鵺宮か。なかなか攻めやすそうなところ

だな」

おかしな感想を述べる子慮に、文重が慌てたように周囲を見回す。幸いなことに、今の発言を耳にした者はいなかったようだ。安堵に胸を撫で下ろし、子慮を鋭い眼差しで睨みつけた。

「変なことを言わないでください。それより、さっさと戻りますよ」

「本当のことだろ。こっそり忍び込んで、建物の内側から火をつけたら一発だ。逃げるにも門はあのちっさいのしかないし、俺だったら絶対にそうするけどな」

「まず、北嶋宮に忍び込むこと自体がむりですよ。建物の入り口という入り口は、禁軍の兵士が守ってますからね。さあ、いい加減に戻りますよっ」

「ふーん。でも、三日くらい前から忍び込んどけば見つからないだろ」

文重は反論に詰まったようだ。確かに、宴が催される場所は限られている。事前に忍び込んでおくことも可能だろう。

「建物の内部は巡回とは別に、宴が始まる前に禁軍兵によって、隅々まで確認されているはずだぞ」

仲望は文重に助け船を出した。禁軍に所属していた際、宴などの前には早朝から建物内部の確認を行っていた。それも一人や二人ではなく、一部隊を使っての地道な作業だ。

「へー、そういうもんなのか」

「では、安心ですね。それじゃあ、俺たちはこれで失礼します。行きますよ、隊長」

なぜか妙に焦った様子の文重は、おかしなほど子慮を急かしている。

「ちょ、なんで耳を引っ張るんだよ」

「戻るって言ってんのに、あんたが聞かないからでしょうが！」

「待て。まだ春蘭のことを聞いてねぇだろ！」

「うわぁあああ！　せっかく避けていた話題を！」

どうやら、文重は仲望に気を遣ってくれていたよ

うだ。顔を真っ青にして、子慮を叱りつけている。
「このお馬鹿。あんたには思い遣りってものがないんですか！」
「はぁ？　お前だって気にしてただろうが」
「本人の目の前では、その話題に触れないのが優しさってもんでしょうが！　どうしても気になるなら、仲望さんじゃなくて韓将軍にでも訊いてくださいよ！」
「いや、だって本人がここにいるんだぞ」
「そこを我慢するのが大人なんです！」
ふて腐れたような表情を浮かべる子慮に、配慮の必要性を懇々と説いている。これには、仲望も口元を引き攣らせた。
ここは北鵺宮の真ん前だ。龍乎の詰め所ではない。石段を登って行く官吏たちや、巡回の禁軍兵が奇妙な眼差しを向けていた。頼むからここで騒がないでくれ、と内心で辟易する。
「春蘭のことなら大丈夫だ」
ぴたりと動きを止めた二人は、互いの顔を見合わせた。先に口を開いたのは文重である。
「……まさか、奪い返すつもりですか」
「それでこそ男だ！」
俺の好敵手に相応しい、と子慮は仲望の背中を叩いた。
かなり曲解されたが、いちいち説明するのも面倒なので、「……そういうことだ」と、仲望は曖昧に言葉を濁した。
「そろそろ持ち場に戻った方がいいんじゃないか？」
「あ、そうですね。では、またあとで。行きますよ、隊長」
宴の開始は近い。文重は、まだいいだろうと抗議する子慮を追い立て、あっという間に走り去った。
ここに来るまでは、かなり気負っていたのだが、あの二人のおかげで肩の強張りも取れた。官服の裾を払い、仲望は石段に向かう。その双眸に力を込め

て。

緩やかな楽が流れ、宴が始まった。

先と同じく、黄海楼の妓女たちが花を添えるらしい。離れた場所からではよく見えないが、懐かしい面々に胸が温かくなった。

――しかし、よりによって皇帝の脇とはな。

与えられた座に溜息をつく。

しかも、他の妃妾たちは御簾で姿を隠しているにもかかわらず、春蘭は未だ位を得ていないという理由から素顔をさらしている。よりによって、皇帝の隣で。

二人が並ぶのは、北鵠宮の露台だ。そこだけ屋根がなく、石畳の広場より一段ほど高い。透かし彫りの美しい欄干が露台を囲み、武装した禁軍兵が一定の間隔で警護を行っている。

舞台はその露台から少し離れた前面、広場の中央に設けられていた。官吏たちは舞台を挟み、対面するような形で用意された席に座っている。

その衆目の中で、春蘭は皇帝の脇に腰を落ち着けていた。傍から見れば、誰もが邪推せずにはいられないだろう。これが新しい寵妃か、と。

春蘭が溜息をつけば、過去最大の重量を誇る頭部がぐらりと揺れた。本日の髪型は、明佳率いる侍女たち渾身の作品である。

複雑に編まれた髪は、もはや髪とは呼べぬほど緻密な形を描いている。しかも長さが足りないと、かなりの付け毛を足された。

髪と一緒に朱染めと金糸の飾り紐が編み込まれ、房のついた先端は肩まで垂れている。簪は嫌だと拒否したためだ。せっかく苦労して説得したにもかかわらず、余計に重量感のある仕上がりとなってしまった。

襦裙は明佳たちの熟考の末、桃色を基調としたものに決まった。腰裙だけが鮮やかな紅色に染め抜か

れている。

万が一、玄楽に見つかってしまったら、この格好ではあまりに不利だ。そのせいで捕まったとしたら、嘆くに嘆けない。わざわざ徹夜までして、退路を探した意味がなくなってしまう。

「浮かぬ顔だな」

頭上から響く声に、春蘭は誰のせいだと抗議したくなった。

頭に気をつけながら顔を上げれば、沸儀の感情の籠もらない眼差しとかち合った。

「……私は隅の方でよかったのだが」

「余の隣に侍れるのだ、他の妃妾ならば感涙するぞ」

「一緒にしてくれるな」

先ほどから憎しみの視線が痛い。目で人が殺せるのならば、自分は命がいくつあっても足りないだろう。

舞台上では、妓女たちが舞を披露していた。地面につくほどに長い袖を巧みに操り、きれいな弧を描いたり、靡かせたりしている。秩序のある動きは、なかなかに壮観だ。

だが、春蘭はすぐに大広場から視線を逸らせた。油断すると、つい仲望を捜してしまいそうになる。

「侍らせるなら、ちゃんと寵妃を傍に置けばよいではないか」

「確かに、あの女でも面白い反応が見られただろうな」

沸儀の目が、ある御簾のところで止まった。奥には黎貴妃がいる。

「あれは面白い女だ。人を傷つけることを厭うが、復讐を望まずにはいられない」

舞の終わりに、大広間から歓声があがった。

沸儀は黎貴妃の事情をどこまで知っているのか。すべてを見透かしたような口調に、春蘭は思わず眉を曇らせた。

「だから黎貴妃を寵愛しているのか？」

「傍に置くのならば、面白い者がいいだろう。あれがもたらす狂気は、いずれ余に向けられる。その時が楽しみだ」

黎貴妃もまた、太子と同じ理由で目をつけられているらしい。

沸儀が、黎貴妃の産んだ子が自分の血を引いていないこと、猩猩緋の一員だったことまでは知らないだろうが、世の中を恨んでいることには気付いていたようだ。

それを自分に向けさせたら面白い、と考える辺り沸儀らしいが。おかげで、黎貴妃は寵妃としての座を守り続けている。

「今日は気分がよい」

「本当に猩猩緋は来るのか？」

返答はない。来るという確信が沸儀にはあるのだろうか。

だが、猩猩緋が来るということは、玄楽も必ず姿を見せる。命を捨てるほどの覚悟なのだ。この機会を逃す男ではない。

「こうも警備が厳重では、猩猩緋はここに辿り着く前にすべて捕らえられてしまうのではないか？」

大広間の隅に配置された禁軍兵の数は、前回よりも遥かに多い。おそらく外塀の向こう側には、さらに厳重な警備が敷かれていることだろう。そのすべてを掻い潜って、ここまで辿り着けるとはさすがに思えない。

訊ねてみれば、容赦のない答えが返ってきた。

「その程度ならば、余がわざわざ手を下すこともない」

沸儀は杯に注がれた酒を一息に飲み干した。大広間では、琴と笛の演奏が行われている。

完成された技を披露する妓楼の面々と、外塀の傍で出番を待ちながらも嫉妬に塗れた視線で睨みつける宮妓たち。

先の宴と似たような光景だ。違いは酒を楽しむ席にもかかわらず、どの官吏たちも硬い表情を浮かべ

ていることだ。

襲撃があるのではないかとの恐怖に、どれほど美味い酒や、目が醒めるほどの美女たちであっても、霞んでしまうのだろう。

猩猩緋は、この厳戒態勢の中でどのように攻めてくるつもりなのか。真正面から仕掛けるのは不利だ。戦術を知らぬ子供でもわかる。

――ならば、答えは一つ。

優雅な音階が、じょじょに激しさを増し始めた時だった。

顔を真っ青にした禁軍兵が、妓女を押し退け沸儀の前に膝をついた。

「申し上げます。紫宝宮から火の手があがりました！」

――陽動による攪乱だ。

宴の場は混乱した。

それでも、官吏たちに逃げようとする者がいないのは、戦場がここではないからだ。警備の兵士たちが慌ただしく動き始めた。

仲望が広場から舞台に目を向けると、月儀が妓女たちを端に集めているところだった。そんな中、次々に報告がもたらされる。

「申し上げます。賊は宮中の至るところに火をつけて回っているようです！」

「申し上げます。建設途中の望楼からも火の手があがりました！」

「申し上げます。複数の賊徒によって、北鵺宮周辺の防壁が破られました！」

「申し上げます――」

身の危険を感じた官吏たちが、逃げ出そうと腰を上げかけた時だった。

露台に座したまま黙って報告を受けていた沸儀が、ゆっくりと立ち上がる。混乱していた場内が水を打ったように静まった。

「逃げる者は止めぬ。好きにせよ」

けっして声量があるわけではない。だが、重厚感のある声は、北鵲宮の大広場に響き渡った。

一人の官吏が転がるようにして門に向かった。それを見ていた者たちが、我先にと門へ殺到する。月儀は、すでに妓女たちを連れて姿を消していた。賢い彼女のことだ。門番たちを従え、宮中から速やかに退避するだろう。

仲望は視線を露台に戻した。皇帝の脇に座る小さな影。駆け寄りたい気持ちをぐっと堪える。門は押し合いへし合いする官吏たちで混乱していた。罵声や悲鳴が飛び交い、兵士たちも手をこまねいている。一部の官吏たちはすぐに動くことを躊躇い、その場に留まっていた。

ふと興奏のことが気になった仲望は、露台の左端に視線を向けた。そこには興奏をはじめとする、各省の長たちが並んでいたのだが、ひとつだけ空の席がある。興奏の席だった。

いったいいつの間に姿を消したのか。胸を過る嫌な予感に、仲望は呻いた。

皇帝は混沌とする大広場を一瞥し、北鵲宮の中に姿を消した。春蘭もそのあとへと続く。

御簾の中にいた妃妾たちも、警護の宦官らに守られながら次々に建物の中へと入って行った。北鵲宮の裏手には後宮へと繋がる通路があるため、そこから逃げるのだろう。

「春蘭……」

仲望は奥歯を噛み締めた。まだ、自分は大広場から動くことはできない。

永遠とも感じ取れる時間を破ったのは、楊秀の副官である陸万里だった。

「遅れて申しわけありません」

額に玉の汗を浮かべた万里は、神経質そうな顔を苦しげに歪めた。肩で息をついている。よほど急いで駆けつけてきてくれたのだろう。

「楊秀様より預かり物です」

「すまない」

布にくるまれた剣を受け取る。ずっしりとした重みは、ここ数日で慣れ親しんだものだ。弓も欲しいところだが、わがままは言えない。鎧甲をつけた万里は、すぐにまた陣頭に戻るのだろう。「ご武運を」とだけ口早に告げ、走り去った。

「春蘭は後宮か……」

宮中が混乱している中、後宮の守りも薄くなる。忍び込むことはできるが、果たして春蘭を見つけられるかどうか。しかし、玄楽は間違いなく春蘭を求めて後宮に向かうだろう。

男子禁制の後宮に足を踏み入れることへの抵抗はあるが、それよりも春蘭を守らなければならないという気持ちが勝っていた。

腹を括った仲望は、露台に足を向けた。その時、行く手を遮るように小柄な影が飛び込んできた。

「君は――」

肩で息をしているのは、妓楼で働いていた少年、袁蒼羽だった。

妓女たちにも引けを取らない美貌の持ち主で、年齢が近いせいもあるのか、よく春蘭や祥琳と行動を共にしていた。口が利けず、いつも身振り手振りで気持ちを伝えていた。

「なぜ、逃げなかった！」

月儀たちはもういない。逃げ遅れたのか。せめてここから逃がそうと視線を巡らせたところを、今度は力強い手に肩を叩かれる。

「よう、鄭の旦那」

黄海楼の門番である芳蘇啓が立っていた。

年齢は仲望よりも上で、恐ろしく厳つい顔立ちをしている。門番の取りまとめ役だけあって、屈強な肉体の持ち主だ。剣の稽古をつけてほしいと頼まれ、何度か手合わせをしたこともある。

「春蘭を連れ戻すんだろ？　蒼羽が案内するってさ」

「だが、案内といっても――」

「こいつは元宦官だ。後宮にも詳しい。俺はさしずめ護衛ってとこだな」

驚いて蒼羽を見れば、決意を滲ませた双眸と目が合った。ありがたい申し出だが、それでも簡単には頷くことはできない。

「宦官ならばわかると思うが、後宮は男子禁制の場所だ。混乱時とはいえ、気付かれれば処罰されるぞ」

問答無用で斬り捨てられても文句は言えない。しかし、蒼羽の決意は変わらないようだった。

「覚悟の上だ。楼主の許可は取ってある。俺たちも、春蘭のことでは腹を立ててるんだよ。ここで皇帝に一泡吹かせてやろうぜ」

間違って迷い込んだことにでもすればいいだろ、と蘇啓は豪快に笑った。

彼らを危険にさらすわけにはいかないと思いながらも、蒼羽がいれば玄楽よりも先に春蘭を見つけることができるかもしれないという希望が、仲望の胸を過る。

「……わかった。ただし、俺の指示には従ってほしい」

巻き込むからには、彼らに血を流させるわけにはいかない。無事に妓楼へと返さなければ、危険を承知で送り出してくれた月儀に顔向けができない。二人が頷くのを待って、仲望は歩き出した。

「洪釆殿」

酷く顔色の悪い槍幽の姿があった。

場所が場所なだけに、小心者ですからと自分で言い切るような槍幽には拷問にも等しいのだろう。洪釆たちが潜んでいるのは、宴が行われている北鵲宮から離れた、とある宮の敷地内だ。門からは奥まった所に待機しているため、中まで入って来られなければ見つかる心配はない。洪釆と槍幽の他に、二十人の仲間たちも待機している。

外塀が姿を隠してくれるとはいえ、表の通りでは

禁軍兵がうろついているため、常に張り詰めた緊張感が漂っていた。

「煙が上がったな」

「出だしは、上手くいったようですね」

一旦は胸を撫で下ろした槍幽だったが、これからのことを考えると不安でしかたがないらしい。しきりに腹を押さえ、「胃が痛いです」と訴えている。槍幽は滅多なことでは自ら剣を取ることのない裏方のため、余計に気が張っているのだろう。

「本当に行くんですか？」

「ああ。俺がここにいても意味はないからな」

警戒が厳重な今回、真正面からぶつかっても勝ち目はない。宴を阻止するのが目的ならば、と槍幽が提案したのは、禁軍兵を分散させる作戦である。

北鵺宮の警備が手薄になれば、否でも応でも宴を中止せざるを得ない。宮中の建物に火を放ち、兵士らを火事場に集中させる。警備の人数を減らしたところを襲撃すれば、こちらの不利を補うことができるだろう。

洪釆は先の襲撃で大怪我を負い、本来ならば隠れ家で待機しているはずだった。だが、兎天の不可解な行動を明らかにするために同行を決意したのである。

むろん、兎天が猩猩緋の不利益となるようなことをしているとは思っていない。猩猩緋――紅主のためならば、己の命を犠牲にすることすら厭わないだろう。

だが、兎天には目的のためならば手段を選ばぬ非情さがあった。仲間でも平然と犠牲にする。洪釆が危惧しているのは、その点だった。

「それに、やっぱり兎天殿の動きはおかしい。冬雁の配下に見張りを頼んでおいたら、北鵺宮ではなく真っ先に後宮に向かったと報告があった。絶対になにか企んでいるはずだ」

「気をつけてくださいよ。あの方のことだから、見つかったら叱責だけじゃすみませんよ」

口封じに殺されないでくださいね、と槍幽は冗談めかして言った。
「完全に鎮火される前に撤退しますから、忘れないでくださいよ」
「わかってる。見取り図もあるんだ、迷子にはならないさ」
朱緋が手に入れて来た見取り図は、宮中の建物や通路などが事細かに描かれていた。いったいどこから調達してきたのかと怪しむくらい、精密な見取り図である。
万が一、槍幽たちと合流できなくても、これがあれば単独での脱出も可能だ。
「ご武運を祈ってます」
「むしろ、そっちの方が危険だろ。俺じゃなくて、自分のことを心配しとけって」
「私は大丈夫ですよ。逃げ足にだけは自信がありますからね。みなさんにも、いざとなったら真っ先に逃げると宣言しています」
「そりゃ、お前が残っても足手纏いにしかならないからな」
槍幽の立場は軍師に近い。洪釆の武器が槍ならば、槍幽の武器は頭脳なのだ。今回は陽動の人数確保のため、実戦経験のない者たちも交じっている。
「じゃあな。しっかり逃げろよ」
「言われなくても、そうしますよ」
洪釆は黒い布で顔の下半分を覆い隠すと、槍幽に見送られ今まで隠れていた建物を出た。宮中には使用されていない宮が多く、北鵜宮の近くでなければ内部までは見回りの手が及ばない。それを逆手にとって、猩猩緋の者たちは昨夜のうちに夜陰に乗じて侵入を果たしていた。
洪釆は慎重な足取りで、屋根伝いに後宮に向かった。眼下には、慌ただしく動き回る兵士たちが見える。侵入者を阻むための高い外塀が、今は洪釆の姿を隠す目隠しとなっていた。
できるだけ兵刃を交える事態は避けたい。負傷し

た左肩の傷口は塞がったが、見た目だけだ。激しく動くようであれば、すぐに開くぞと、医師に忠告されている。

「そういえば、師匠の姿も見なかったな……」

今回の襲撃に参加しているはずだが、姿を見かけなかった。

そういえば前に、朱緋は別口の任務で華安に来たと言っていた。それは片付いたのだろうか。少しだけ気に掛かった。



他の妃妾たちと共に後宮へ退いた春蘭は、いそいで自分の室へと向かった。そこには事態を聞きつけたのだろう。不安げな表情を浮かべた侍女たちの姿があった。

「春蘭様。その格好では、移動し難いでしょう。こちらにおいでください」

硬い表情を浮かべた明佳は、侍女たちに指示を出して春蘭の装いを解く。

髪は簡素に結い上げられ、服装も動きやすいものに替えられた。薄桃色の上衣は袖が短く、藤色の腰裙も余分な生地の厚みがない。いつもは引き摺るように長い裳裾も足首のところで終わっていた。

「これでいいでしょう」

明佳は満足げに春蘭を眺める。そして、すぐにそれを真面目な表情に切り替えた。

「では、黎貴妃様の宮へ参りましょう」

「なぜだ？」

「あそこならば、黄玉宮よりも警備が厳重です。ここでは火の手があがった場合、逃げ遅れる恐れがあります」

「……わかった」

春蘭にとってはなにより玄楽を警戒しなければならないが、まずは侍女たちを安全な場所に避難させるのが先決だった。西離宮が最適だというならば、それに従うまでである。

「参りますよ」

明佳が先導し室を出る。侍女たちは春蘭を囲むように歩き出した。

九嬪の間はもともと人気がないため、襲撃を受け

ている最中とは思えないほど静寂に満ちている。明佳は辺りを警戒しながら、一定の速度を保って廊下を進む。

春蘭を囲む侍女たちは主が怯えてはいけないとの使命感からか、「もう少しですわ」「きっと、禁軍の方々が守ってくださいます」「手をお繋ぎしましょうか？」「気分が優れない時は、すぐにおっしゃってくださいね」と、口々に労りと励ましの言葉をかけてくれる。

彼女たちにとって春蘭は、風に吹かれて飛んでしまいそうなほどか弱い存在であるらしかった。妓楼の者たちが聞いたら、大声で笑うこと請け合いだ。

長い廊下を抜けると、そこは四方を回廊に囲まれた、日当たりのよい中庭が広がっていた。

「この先が西離宮ですわ」

明佳の言葉に、侍女たちが安堵の息を漏らす。ここまでくればもう安全だろう、とみなが肩から力を抜いた刹那。前方を、屈強な宦官たちを引き連れた元法が塞いだ。

「お捜ししましたよ、春蘭様」

穏やかな笑みを浮かべてはいるが、春蘭に向けられた元法の眼は冷ややかだ。その間に割って入るように、明佳が立ち塞がった。

「なんのご用でしょうか？」

「陛下のご命令です。安全な場所にご案内するよう、仰せつかりました」

あの男がそのような気を回すはずがない。元法の言葉は嘘だ。春蘭は確信した。明佳も怪しんでいるようで、春蘭を背に庇ったまま動かない。

しかし、元法は〝陛下の命令〟を大義名分に、春蘭の身柄を要求する。

「さて、春蘭様を渡していただこう」

「……応じられません。それに、どうかご心配なく。これから全員で、〝安全な場所〟に避難するところです」

「黎貴妃様の離宮が安全だと？」

元法は心底おかしいとばかりに、口元を袍の袖で覆った。

「ああ、そういえばお前は、黎貴妃様の傍に侍る侍女と血縁関係にあったな。おおかた、西離宮にお連れする途中で、混乱に紛れ春蘭様を殺害するつもりだったのだろう？」

黎貴妃様の命令で、と元法は告げた。そして、春蘭に媚びるような眼差しを向ける。

「春蘭様。その侍女は敵です。幼いあなた様につけ込み、お命を脅かそうとしている。こちらにいらっしゃい」

さあ、と猫なで声で手を差し伸べる元法に、春蘭は呆れた。この宦官は、本気で春蘭が己の手を取ると信じているのだろうか。だとすれば、よほどめでたい頭である。

「私はそれほど邪魔なのか？」

「黎貴妃様は恐ろしいお方です。己の地位を脅かす存在を放っておかないでしょう」

「違う。ぬしのことだ。妃妾と宦官は立場が違う。それでも、新しい寵妃の台頭は許せぬか」

首を傾げれば、明佳が硬い口調で応じた。

「おそらく、これ以上、己よりも権力を持つ存在を増やしたくないのでしょう。宦官の中で頂点に立っていても、妃妾様方が加わればたいしたことありませんからね」

笑みを浮かべていた元法の表情が、一転して醜く歪められた。今まで美貌の宦官に頬を染めていた侍女たちが、突如、剝き出しになった本性に体を震わせる。それが愉快だったのか、元法は獲物をいたぶって遊ぶ捕食者のような愉悦に満ちた笑みを浮かべた。

「叫んだところで、誰も助けには来ませんよ。この辺りは、黎貴妃様を恐れて誰も近付きませんからね」

「お逃げください、春蘭様！」

明佳の悲痛な声が回廊に響く。元法の背後に控え

ていた宦官たちが、春蘭に目を据えたまま動き出した。この場で殺すつもりはないのか、手にあるのは手足を拘束するための縄である。

だが、その手が春蘭に伸びるより早く、一本の匕首が床に突き刺さった。

屋根の上を仰げば、全身を黒衣で覆った男が立っていた。覆面の隙間から覗く茶色みがかった赤い瞳に、春蘭の背筋が粟立つ。圧倒的な力の前に屈しかけた恐怖が蘇り、知らず唇を噛み締めていた。

「おい、こら。そいつは俺の獲物だ」

玄楽、と春蘭は呟いた。まさかこれほど早く見つかってしまうとは。

後宮の迷路のように複雑な造りが玄楽を阻んでくれることを期待していたのだが、相手の悪運の強さが勝ってしまった。

「しょ、猩猩緋だ！」

宦官の一人が、玄楽の腕に巻かれた深紅の布を指さして叫んだ。優位に立っていたはずの者たちから、どよめきが起こる。侍女たちも釣られたように悲鳴をあげた。

今だ、と春蘭は声を張り上げた。

「白桃！」

腰紐に下げた玉が淡い光を発する。それは大虎の形となり、春蘭を守るように玄楽との間に立ち塞がった。

猩猩緋に続き、唐突に現れた大虎に、さすがの宦官らは驚きのあまり声を失っているようだった。春蘭が命じるよりも先に主の意向を汲んだ白桃は、素早い身のこなしで宦官の間に割り入ると、後ろ脚を使って中庭目掛け蹴り飛ばした。

元法を含めた宦官たちは、悲鳴を上げる暇もなく中庭に造られた池に落下する。戻ってきた白桃に跨がった春蘭は、突然のことに茫然とする明佳たちを振り返った。

「明佳。みなを連れて、西離宮に向かってくれ！」

「しかし……」

「大丈夫。私のことは気にするな。今まで世話になった」

春蘭を背に乗せた白桃は、中庭の石灯籠を足場に屋根へと駆け上る。間近に迫った白桃に、ずぶ濡れになった宦官たちが無様な悲鳴をあげた。

「別れは済んだか？」

逃がさない自信があるのだろう。玄楽は春蘭が屋根に登るまで、攻撃を仕掛けようとはしなかった。横目で明佳たちが言いつけ通りに動くのを確認する。一刻も早くこの場を離れ、安全な場所に移ってほしかった。

「ぬしは、襲撃に参加せずともよいのか？」

「俺の本命はこっちなんでな」

不敵な笑みを浮かべた玄楽だったが、すぐに眼差しを真剣なものに替えた。

「悪いが、時がない。今度こそ隷属させてもらうぞ」

玄楽が跳躍すると同時に、白桃も動いた。屋根を白銀の巨体が駆け抜ける。激しく上下に揺すられながら、春蘭は振り落とされないようしがみつく手に力を込めた。

真名を奪われたのは、己の慢心からだった。

あの時、春蘭の守る邑が、野盗の一団に襲われた。白桃が追い払おうとしたが、白い虎が珍しかったのだろう。野盗の一部が狙いを白桃に変えた。その間も、邑には野盗の手勢が迫っている。久し振りに、人間相手に守り神の力を使おうかと思った時、玄楽が現れたのだ。

玄楽は邑人たちと協力して、あっという間に野盗を追い払ってしまった。それから数日ほど邑に滞在して、春蘭が祀られている社へとやってきた。

神獣を目撃して、守り神の存在を確信していたのだろう。玄楽は社の前で、あれこれと勝手に話をし始めた。邑を助けて貰った恩もある。春蘭は姿を隠し、風に声を載せて玄楽に語りかけた。

礼を告げれば、一つだけ願いがあるのだという。一度でいいから、神という存在を自分の目で見てみ

たい、と玄楽は言った。
それくらいならばよかろうと、春蘭は深く考えずに頷いた。守り神を害するような不届き者はいないと、決めてかかっていたのだ。
玄楽の前に姿を見せた、その瞬間。
春蘭は真名を奪われていた。
とっさに人の姿に戻れたのは行幸だった。
真名を得たことで、玄楽も油断していたのかもしれない。そのおかげで、春蘭は逃げ伸びることができた。
――あの時、油断さえしなければ。
何度、後悔したかわからない。
春蘭は、真名を奪われた時のことを思い出し、歯を食い縛った。背後からは、玄楽が猛然と追い立ててくる。
玄楽との距離はじょじょに縮まりつつある。計画通り、退路に向かうべく白桃に指示を出そうとした時だった。
白桃がいきなり進路を変える。
「なっ、そっちは――」
違う、と春蘭は言い掛けるが、白桃はかまわずに屋根の切れ目にあった内庭へと降りてしまう。黄玉宮内だとはわかるが、記憶にない庭園に春蘭は戸惑った。
四方を回廊が囲み、庭には白い玉砂利が敷かれている。その中央には苔が生えた巨石があった。
「白桃、なぜここに」
「逃げるのは、もう終わりか？」
春蘭の背後に、玄楽が降り立った。
白桃、と呼ぶが、春蘭に忠実な神獣は玄楽と向かい合うように体の向きを変えただけで、逃げる素振りを見せない。
「白桃！」
玄楽と白桃の力の差は歴然としている。神獣である白桃だが、牙を交えずとも相手の力量を悟っているのだろう。出会す度に、白桃が選ぶのは逃げの一

手のみ。それ以外に、春蘭を守る方法はないと言っているようだ。

焦りが滲む。このままでは、玄楽に捕らえられてしまう。

仲望、と名を呼びたくなる。

差し伸べられた手を拒んだのは自分だ。仲望が実の兄と争う姿を見たくなかった。それなのに、助けてほしいと望んでしまう。傍にいてほしいと願ってしまう。

「大人しく隷属するんだな」

感情を殺したような玄楽の声が響く。白桃の背にしがみつく手が震えた。

「バウウゥゥ！」

不意に、白桃が空に向かって咆吼する。まるで、己の居場所を伝えるように、力強く。

そして、春蘭は信じられないものを見た。

玄楽目掛け、剣が振り下ろされる。

なんなく弾かれてしまったが、すぐに次の一撃が玄楽を襲う。

これは夢だろうか。

春蘭の双眸から涙が零れた。

「仲望！」

万感の想いで名を叫べば、仲望が微かに笑んだ気がした。

仲望は春蘭を背後に庇うように立ち塞がると、玄楽に向かって剣を構える。

「下がっていてくれ」

春蘭はなにか言わなければ、と口を開きかけたが、急に後ろに下がった白桃によってきっかけを奪われてしまった。

「白桃、まさかぬしは仲望の気配があったから、こっちに来たのか？」

命令無視の理由を問えば、白桃は悪びれた様子もなく背に乗っている春蘭を振り返って、一声咆えた。あのまま逃げ続けるよりも、仲望を頼った方がいいと判断したのだろう。

思わず抗議しそうになった春蘭だったが、回廊へと続く廊下から飛び出してきた人物を見て、思わず己の目を疑った。

「おおっ、蒼羽。なんか広いとこに出たぞ」

なぜ、蘇啓と蒼羽が後宮にいるのか。蒼羽を片腕に座らせた蘇啓は、辺りを物珍しげに見回している。そして、春蘭のところで目を止めた。

「おう、春蘭じゃねぇか。って、なんだその虎は！鄭の旦那もなにやってんだ！」

蘇啓は忙しなく驚愕の声をあげる。逆に、蒼羽は驚く様子をまったく見せず、蘇啓の腕から飛び降りるなり、無表情のまま春蘭に走り寄った。そして、両手で確認するように全身を触り始める。怪我の有無を確認しているらしい。止めさせようにも、あまりの蒼羽の必死さにされるがままだった。

「なぜ、ぬしらがここに？」

「道案内だよ。蒼羽は元宦官だ」

告げられた事実に春蘭は瞠目する。蒼羽を見れば、いつもと変わりない表情で小さく頷いた。

「とりあえず、こっから出るぞ。鄭の旦那には、お前を見つけたら連れて逃げろって言われてるからな」

白桃を警戒しながら、蘇啓は春蘭を抱え上げようとする。

春蘭は逡巡した。仲望は玄楽を足止めするために剣を振るっている。ここで逃げては、以前となんら変わりない。

「ここにいても、足手纏いになるだけだ。それに、男の決意を無駄にするもんじゃねぇ」

「……！」

春蘭の想いは、白桃が走り出したことによって断ち切られた。白桃は春蘭の安全を第一に考えて行動する。その一点において、白桃は春蘭の命令を違え、己の意志で動く。先代の守り神が、そう命じたからだ。

「おい、待てって！」

蘇啓の慌てた声が背後から追ってくる。戻れ、と白桃に命じたかったが、心のどこかで安堵している自分がいるのも事実だった。

「止まれ、白桃！」

まだ安全ではない、と感じているのか、白桃は走り続ける。

だが、側面から飛び出してきた影に、白桃は脚を止めた。警戒するような唸り声をあげるが、なぜかそれはすぐ解かれることになる。

白桃の背から顔を上げた春蘭は、尻餅をついていた青乎と視線がかち合った。その光景が、既視感を生む。

「あ……」

突然のことに恐れをなして、顔を真っ青にした青乎だったが、なぜか白桃を穴が開くほど凝視したあと、震える声で叫んだ。

「あの時の、〝神様〟……！」

「神様？」

確かに自分は守り神だが、青乎のことは知らない。それでも、続けられた言葉に春蘭は目を丸くした。

「俺、じゃなくて、私にきれいな袍をくださいましたよね！」

春蘭の脳裏に、果物を抱えた農民の子が蘇る。確かに、動きやすい短服と、少年が抱えていた果物を貰う代わりに、自分が着ていた袍を交換した覚えがある。それが青乎だったというのか。

「春蘭様が、神様に乗っていた女の子だったんですね」

どうやら、青乎は白桃を〝神様〟と勘違いしているようだ。畏怖するような眼差しを向け、居住まいを正した。

「ずっとお礼を申し上げたかったんです」

「ぬしに礼を言われるようなことをしたつもりはないが……」

むしろ、代価として袍を置いて行ったが、青乎の了承を得たものではない。批難されてもしかたない

のに、青乎の瞳はきらきらと輝いていた。
「袍を売ったお金で、私は宦官になりました」
「それは……」
春蘭は顔を曇らせた。農民の子が、望んで宦官になるとは考え難い。大方、家族に強要されたのだろう。しかし、春蘭の表情に気付いた青乎は首を振った。
「いいんです。私一人でも、食い扶持が減った分だけ家族の暮らしは楽になります。それに、死ぬまで畑を耕して暮らすものだと思っていました。でも、宦官になることで違う道が拓けた」
だから、ずっとお礼が言いたかったのだ、と青乎は語った。しかし、春蘭の愁眉は晴れない。
「どんな理由があっても、ぬしの人生を変えてしまったことに違いはない」
後宮は恐ろしい場所だ。他者を蹴り落とすことを誰も躊躇わない。そうしなければ、己の地位すら危うくなるのだ。
そんな世界に、青乎はなんの知識もなく放り込まれた。
「あのままならば、貧しくはあったが、平穏な人生を送れただろう」
「そうかもしれません……ですが、宦官になったことを後悔はしていないんです」
その真っ直ぐな瞳が、仲望のそれに重なる。実の兄と争うことになっても、仲望は一度として春蘭を責めなかった。春蘭さえ現れなければ、彼もまた平穏な生活を送っていたことだろう。
後悔はしていない、と告げる青乎に春蘭は唇を噛み締めた。
「あ、ようやく追いついたぜ！」
蒼羽を背に負ぶった蘇啓は、春蘭を見つけるなり安堵の息を吐いた。青乎は宦官の袍を着ていない蘇啓たちに眉をひそめる。
「春蘭様、この方々は」
「すまぬ。見逃してくれ」

白桃の背から降りた春蘭は、腰紐に結わえていた玉を手に取る。
「白桃、玉に戻れ」
「バウッ」
抗議するように鳴くが、春蘭は強い口調で命じる。
「命令だ」
白桃は逡巡するように春蘭の周りをうろうろとするが、やがて観念したように玉の中へと姿を消した。
蘇啓が驚いたように目を瞠る。
「なんだ、しまっちまうのか？」
「悪いが、ここから先は二人で行ってくれ。私は仲望の許へ戻る」
以前は、玄楽に対する恐怖から、逃げろという仲望の言葉に従ってしまった。安全な場所に隠れて、初めて自分のとった行動を後悔した。もう二度と、あんな思いはしたくない。青乎の真っ直ぐな瞳に、その想いが募った。
「間もなく、猩猩緋が後宮に入り込んだという情報が広まるはずだ。そうなれば、見ず知らずのぬしらも仲間と勘違いされる恐れがある。先に逃げてくれ」
「いいのか？」
「ああ。仲望をここまで連れてきてくれて助かった。ありがとう」
春蘭が微笑めば、蘇啓は困ったような顔で頭を掻いた。
「しかたねぇな。って、蒼羽。頭を叩くんじゃねぇよ。春蘭が決めたことだ、止めるだけ野暮ってもんだろうが」
そして、蘇啓は春蘭の頭を乱暴に撫でた。
「悪いな、春蘭。まじめに逃げねぇとやばそうだからよ」
「行ってくれ」
「……あとで、妓楼に来いよ。絶対だからな」
それだけを告げると、蘇啓は暴れる蒼羽を宥めながら走って行ってしまった。あとは彼らが上手くこ

こから逃げてくれればいい。
「青乎もどこかへ行く途中ではないのか」
「あ、はい。春蘭様はどうなされるのですか？」
春蘭は答えずに微笑んだ。今まで自分は、対抗する手段がないからと、理由をつけて玄楽から逃げ続けていた。
――だが、それも今日までだ。
覚悟を決めよう。おそらく、このままでは永遠に真名を奪い返すことはできない。春蘭は深く息を吸い込んだ。
「青乎」
「はい！」
「ありがとう」
ぬしのお陰で腹が決まった。胸中で告げ、春蘭は走り出した。

激しい剣戟の響き。

仲望は官服の裾を翻し、玄楽に猛攻を仕掛ける。それを玄楽も受け流すが、瞳は驚愕に瞠られていた。
「――へぇ、ずいぶんと使えるようになったじゃねぇか」
「あなたの思い通りにはさせない！」
しかし、全力で挑んでいるにもかかわらず、余裕を見せる相手に仲望は内心で舌を巻いた。ぎりぎりで間に合ったことに安堵する。白桃の咆吼が聞こえなかったら、未だに春蘭を捜して彷徨っていたことだろう。
蒼羽に案内されて入った後宮は、静まり返っていた。蒼羽がわざと人気のない道を選んでいたのと、猩猩緋の襲撃に怯え、後宮で暮らす者たちが室に閉じ籠もっていたからだ。
ときおり、武具を身につけた宦官の姿を見かける以外、仲望たちは誰とも会わずにここまで来ることができた。
仲望は容赦なく相手の急所を狙う。躊躇っていた

ら、あっという間に形勢を逆転されてしまう。兄を相手に勝てるなどとは思っていない。

蘇啓には、春蘭を連れて逃げてくれるよう頼んである。春蘭が逃げ延びられるだけの時間を稼げればいいのだ。

「あなたは、春蘭の力を得てなにをしようとしているのですか？」

「答える必要はないな」

だが、仲望は問い掛けを止めない。鍛錬を繰り返す日々の中、仲望は兄のことを考えた。なぜ、四年前の戦で己の死を偽ったのか。

玄楽は、なんの理由もなく家を捨てるような人物ではない。ならば、そうせざるを得ない理由があったのだ。

猩猩緋に身を投じるためなのだろうか、と考えた。〝鄭玄楽〟を死者としたのは、唯一の血縁である仲望を巻き込まぬため。

それは、まだ理解できる。しかし、なぜ春蘭を狙うのかがわからない。守り神の力を得て、いったいなにを成そうというのか。

「なあ、仲望。民は疲弊してるんだよ」

剣を持つ手が痺れるほどの一撃を、仲望は辛うじて受け止めた。

至近距離にある瞳に、歯を食い縛りながら必死に耐える自分の顔が映る。

「五大夫の専横に始まり、先帝による莫大な浪費、そして、今の皇帝は戦好きの残虐非道な性格ときてる。これ以上、民は耐えられない」

「だから、猩猩緋に身を投じたと？　でも、それは春蘭を狙う理由にはならない！」

叫ぶと同時に、仲望は玄楽の体を押し返した。距離を取り、肩で荒い息をつく。悔しいことに玄楽は、息一つ乱してはいなかった。

「民には、賢君が必要だ」

「なら、なぜあなたは太子の元に残らなかった。あなたがいれば、太子派だってもっと――」

剣が顔面すれすれを掠めた。仲望は鋭い一撃を、紙一重で避ける。

「だから、俺は博焚を――」

玄楽が肉薄する。出遅れた仲望は、右肩を狙ってくる突きを、とっさに剣の表面で受け止めた。鈍い音が響き、仲望の手から剣が弾き飛ばされる。

「終わりだ」

「でも、春蘭を逃がすだけの時は稼げた」

仲望は感覚の乏しい右腕を庇いながら、玄楽を睨みつけた。後宮に詳しい蒼羽が、きっと春蘭を外に逃がしてくれるだろう。

「……残念だったな、仲望」

玄楽の台詞に、仲望は訝しんだ。その視線は、仲望を通り越して背後に向けられている。まさか、と思い振り返れば、そこには肩で息をしている春蘭が立っていた。

「なぜ……！」

戻ってきたのか。想いが伝わったのか、春蘭は泣きそうな顔で微笑んだ。

「逃げられるわけがなかろう」

春蘭はそう告げると、足下に転がる剣を拾う。真ん中から上の部分がなくなった剣は、それでも春蘭には不釣り合いなくらい大きい。玄楽が嘲るように笑った。

「それで、俺と戦うつもりか？」

「そうだ」

頷いて、春蘭は己の首に剣を宛がった。双眸には強い力が宿っている。

「ここで私の命を断てば、真名も効力を失う。ぬしの負けだ――」

空を見上げれば、数本の黒い煙が細長い尾のように立ち上っていた。

壁に寄り掛かった冬雁は重い息をはく。拘束されていた時から感じていた手足の痺れは、解放されて

数日経った今も冬雁を苦しめていた。

「くそっ……」

仲間たちは命懸けで戦っているというのに、自分は任務を失敗したうえにこのざまだ。期待している、という兎天の言葉ばかりが脳裏を過る。自分もなにかしなくては。焦りに突き動かされ、冬雁は匿われていた室から出た。

〝仲間〟が言うには、ここは後宮とのことだった。冬雁の体調では、外に運び出すことは難しいらしい。体が元に戻るまで隠れていろと、〝仲間〟が用意してくれた室で過ごしていたのだ。

衣裳は万が一に見咎められたときのことを考え、後宮で働く侍女たちと同じ格好をしている。質素な藤色の上衣に濃い紫の腰裙を巻き、髪は長さが足りないので付け毛を用いた。

「しかし、歩き辛い服だ……」

冬雁は独りごちた。ひらひらの裳裾が足下に絡みつき、油断するとつんのめってしまいそうになる。

室を出た冬雁は、とりあえず人気のない場所へと向かった。可能ならば後宮から出て、配下の者たちと合流したい。先の襲撃がどうなったかすら、冬雁は聞かされていないのだ。

助け出してくれた〝仲間〟は、今は療養に専念しなさいというだけで、なにも教えてはくれなかった。

薄暗い廊下を抜ければ、そこは日当たりの良さそうな中庭だった。大きな池が設けられ、周囲には菖蒲や杜若が咲いていた。

「どこまで歩けば外に出られるんだっ」

ずっと同じ方角に歩き続ければ、いずれ建物の端に着く。たとえそこが行き止まりだったとしても、右か左、一定の方向に向かっていればいずれ外への出入り口を見つけられるはずだった。だが、現実は歩けども歩けども終わりが見えてこない。

体の自由が利くのならば、さっさと屋根に登りなんの障害もない空間をあっという間に駆け抜けることができるのに。冬雁は恨みの籠もった眼差しを空

に向けた。
誰か人を捕まえて道を訊ねた方が手っ取り早いのではないだろうか。侍女の格好をしているのだから、不審に思われる可能性も低い。新入りなのだと言い訳すれば、道がわからなくても納得するはずだ。
「人……人……」
先ほどとは逆に、冬雁は人の気配を求めて壁伝いに歩き出した。
すると、さほど行かないうちに、突き当たりの通路から顔だけを覗かせ、周囲を警戒している少年を見つけた。向こう側を向いているためこちらに気付いた様子はない。
これ幸いとばかりに、冬雁は少年の肩に手を置いた。道を訊ねるべく口を開こうとすると、「ひいっ！」と引き攣った悲鳴があがる。
「静かにしろ」
恐る恐るといった様子で振り返った少年は、冬雁が侍女だとわかると、大げさな身振りで溜息をついた。
「……さすがに今度は、賊徒かと」
間違いではないのだが、まさか肯定するわけにもいかない。
少年はまだ十歳前後と、道を訊ねるには少々心許ない相手だった。だがこの際、相手を選んではいられない。
「外へ出る道を教えてほしいんだが」
「え、外ですか？」
少年は驚いたように声をあげた。その反応に冬雁も驚いていた。妃妾が後宮から出られないことは知っていた。だが、侍女もそうなのか、と冬雁は内心で焦る。理由をつけて外に出ることもできなくなってしまう。
「外ということは、あなたも様子を見てくるよう命じられたのですか？」
「……どういう意味だ？」
「指示があるまで室にいろと言われたのですが、一

緒に大部屋を使っている子たちに賊徒がどこまで入り込んでいるか訊いてこいと、室を出されてしまいまして……ですから、あなたもそうなのかと」

ここで否定するのは簡単だが、他に理由を見つけなければならない。勝手に解釈してくれるならありがたいと、冬雁は頷くことにした。

「では、迷ってしまわれたんですね」

「まだここに慣れていないんだ」

「わかります。私も覚えるのが大変で」

こちらです、と少年は先導するように歩き出した。手足の痺れはあるが、壁伝いでさえあれば歩けないことはない。速度は落ちるが、少年は不審には感じていないようだ。壁に手をついているのも、疲れたからだと勘違いしてくれる。

「こっちに進むと、黎貴妃様がいらっしゃる西離宮に行くことができます。この辺りは迷路のようなものなんですよ」

親切心か、少年は歩きながら、冬雁にわかりやすい道の覚え方を教えてくれる。

黙って案内してくれるだけでいいのだが、無下にすることもできず冬雁は適当に相槌を打ってみせた。

「あの、大丈夫ですか？　顔色が……」

「問題ない。少し歩き疲れただけだ。ここは広すぎる」

「えっと、じゃあ私が先に行って聞いてきましょうか？　必要な情報は同じですから」

「いや、私も直接聞いておきたいんだ」

できるだけ平静を装って、冬雁は少年を急かした。まだ心配そうな目を向けてくるが、冬雁がかまわずに歩き続けると、また道順の説明を始める。さっき会った時は、へっぴり腰で恐る恐る辺りを窺っていたのに、仲間を得たことで心強くなったのか、無防備に廊下を歩いている。

「確か、この先の回廊を抜ければ、外はすぐそこですよ。誰かしら宦官がいると思うんですが……」

ならばこの少年との別れも近いだろう。問題は、

どうやって外に出るか、だ。

突き当たりの回廊に出た冬雁は、差し込む日差しの眩しさに目を瞑った。何日も暗闇に閉じ込められていたせいで、救出された当初はわずかな光でも眩しく目が痛んだ。

今はだいぶ回復したが、それでも暗がりから明るい場所に出ると、つい目を覆うか閉じるかしてしまう。

「あ、人がこっちに……」

隣から安堵したような少年の声が聞こえた。これでようやく役目を果たせると思ったのだろう。瞼を開けた冬雁の目に映ったのは、顔を引き攣らせた〝仲間〟――安世の姿だった。

「安世様でしたか」

「青乎と、それから……あなたはどうしてここに？」

口調は優しいが、目が笑っていない。絶対に室から出るなと言い含められていたのだ、相手が怒りを感じるのも当然だろう。

青乎と呼ばれた少年がいなければ、開口一番に叱られていたかもしれない。

「状況を確認してくるようにと、室を出されてしまったんです」

「かなりの数の賊徒が宮中に入り込んでいるんですよ。いくら後宮内とはいえ、ふらふら出歩くのは危険です。あなたもね」

でも、と言い掛けて冬雁は唇を噛んだ。青乎がここにいる限り、迂闊なことは口にできない。

「現状は情報が錯綜して、どこまでが正しいのか判断は難しい状況です。もう少し時が経てば、はっきりとわかるようになりますよ。今わかっていることはこれだけです」

室に戻りなさい、と安世は厳しい声で告げる。青乎に対する忠告の意味もあるが、その大半は冬雁に向けられたものだろう。

それでも、と冬雁は唇を噛んだ。先の任務に失敗

して、今回の襲撃にも参加できなかったとすれば、自分は確実に失望されてしまう。

「青乎は一人で戻れますね。私はこの方を送り届けます」

「わかりました」

素直に頷く青乎に、冬雁は焦った。このままでは、室に連れ戻されてしまう。外は、目と鼻の先なのに。

「わ、私は――」

もう大丈夫だから任務に戻れる、と訴えようとした時だった。

安世が凄まじい形相で冬雁と青乎を抱え、背後に跳躍した。小柄な体のどこにそんな力があるのかと、冬雁は驚愕する。

「安世殿、いったいなにを」

「――冬雁」

懐かしい声に、頭で考えるよりも先に体が反応した。顔を上げれば、そこには全身を黒衣の装束で固めた人物がいた。両手には血塗れの双剣が握られている。顔を隠すための鬼を象った舞楽面をつけ、悠然とその場に佇んでいた。

「兎天様！」

とっさに駆け寄ろうとしたが、腰に回された安世の腕に阻まれる。見上げれば、安世の顔は青ざめていた。

「安世。これはどういうことです？」

男とも女ともつかない、中性的な声が響く。

「私は冬雁を救出するのではなく、殺せと命じたはずですよ」

冬雁は唖然とした。聞き間違いか、もしくはたちの悪い冗談か。だが、兎天の言葉は一字一句、違えることなく己の胸に響いた。

「後宮に内通者がいると知られるわけにはいきません。あなたは自分で自分の首を絞めるつもりですか？」

「……だから、室から出るなと言ったんですよ」

冬雁に聞こえるように、安世は苦々しげに呟いた。

声も出せずに茫然としていると、安世は冬雁と、事情を呑み込めずに混乱している青乎を、背後に庇う。

「残念ながら、私はあなたほど冷酷にはなれないんですよ」

「愚かな」

「愚かでけっこう」

二人の会話が、どこか遠い場所で交わされているような気がした。

兎天は自分を斬り捨てようとした。また、見捨てられてしまった。でもそれは、自分が任務をしくじって捕まってしまったせいだ。

安世は、後宮から内部の情報を得るために必要不可欠である。冬雁を助けることで、内通者の存在が明らかとなり、安世の行動が制限されるようなことになっては猩猩緋にとって大きな損失となる。

だから、兎天は冬雁を斬り捨てることに決めたのだ。

「助けてしまったことは、もうどうしようもありません。冬雁は私が連れて帰りましょう」

再び差し伸べられた手に、冬雁は体の強張りを解いた。よかった。感謝の言葉を述べようとした冬雁は、次の言葉に表情を凍らせた。

「ただその前に――その子供を殺しなさい」

不安げに冬雁の腕にしがみついていた青乎が、怯えたように悲鳴を漏らした。それでも冬雁の腕を放さないのは、鬼面を被った兎天が、よほど恐ろしいからだろう。

「安世のことを知られた以上、生かしておくわけにはいきません。そして、その原因を作った本人が対処するのは当然です」

「そ、それは……」

正論に冬雁は口籠もった。確かに、このまま青乎を逃すわけにはいかない。敵ならば躊躇いはないが、年端も行かぬ子供を手にかけることに冬雁は戸惑った。

しかし、それを遮ったのは安世である。

「申しわけありませんが、この子は私の弟子でもあるのです。あなたのように、私はこの子を簡単に捨てることはできない」
「……不要な感傷を」
「あなたにとっては、そうなのでしょうね」
青乎を殺さなければならないことはわかっていた。だが、指がぴくりとも動かない。命令を遂行しなければ、また捨てられてしまう。
殺せ、殺せ、ともう一人の自分が囁く。その細い首に手を回せば。護身用に渡された短剣で胸をひと突きにすれば——。
冬雁は気付けば、青乎を突き飛ばしていた。
「早く逃げろ！」
怒鳴りつけるように叫べば、胸中に後悔の念が湧いた。これでいい。安世は危険を承知で冬雁を助けてくれた。恩は返さなければならない。
「教育が足りなかったようですね」
「あなたが育てたにしては、いい子に育ったじゃないですか」
安世は皮肉ると、袖から短剣を取り出した。
「冬雁。あなたも逃げなさい」
そう告げるなり、安世は床を蹴って兎天に躍りかかった。身を屈め、足下を狙った一撃はあっさりと避けられてしまう。
そして、逆に安世の肩から鮮血がほとばしった。冬雁は思わず駆け寄りそうになる。だが、安世は表情一つ変えず短剣を無事な方の手に持ち替えると、鋭い突きを繰り返す。
「あなたを失うのは惜しいですよ、安世」
「心にもない言葉を、ありがとうございます」
無傷の兎天に対し、安世はじょじょに傷を増やしていく。安世もけっして弱くはない。むしろ、実力は冬雁よりも上だ。ただ、相手が悪かった。
「くっ……！」
「もう終いですか？」
兎天の剣が安世ののど元に突きつけられる。加勢

したくても、手足の痺れがそれを邪魔する。冬雁はその光景を茫然と見ているしかできなかった。

「安世様を離せ！」

逃げたとばかり思っていた青乎が、兎天目掛けて石を投げつける。手が震えているせいで、石は目標を大きく逸れ、なかなか兎天にまで届かない。

「馬鹿っ、さっさと逃げろ！」

鬼面が青乎へと向けられる。石を握った体勢のまま、恐怖に固まっていた。冬雁は舌打ちし、青乎へと駆け寄る。

背後に感じた強烈な殺気に、青乎を抱えたまま中庭に身を投げた。己の体を下に入れ替えたため、落下の衝撃で息が詰まる。

青乎が立っていた場所には、兎天の姿があった。あと一歩でも遅かったら、冬雁は青乎と共に斬り捨てられていただろう。

「早く、走れっ」

せめて青乎だけでも、と少年の背中を押す。しかし、足が竦んでしまっているのか震えるだけで動こうとしない。生死の遣り取りとは無縁の世界に暮らしていたのだろう。

視界の端で、焦ったようにこちらへ手を伸ばす安世の姿が見えた。

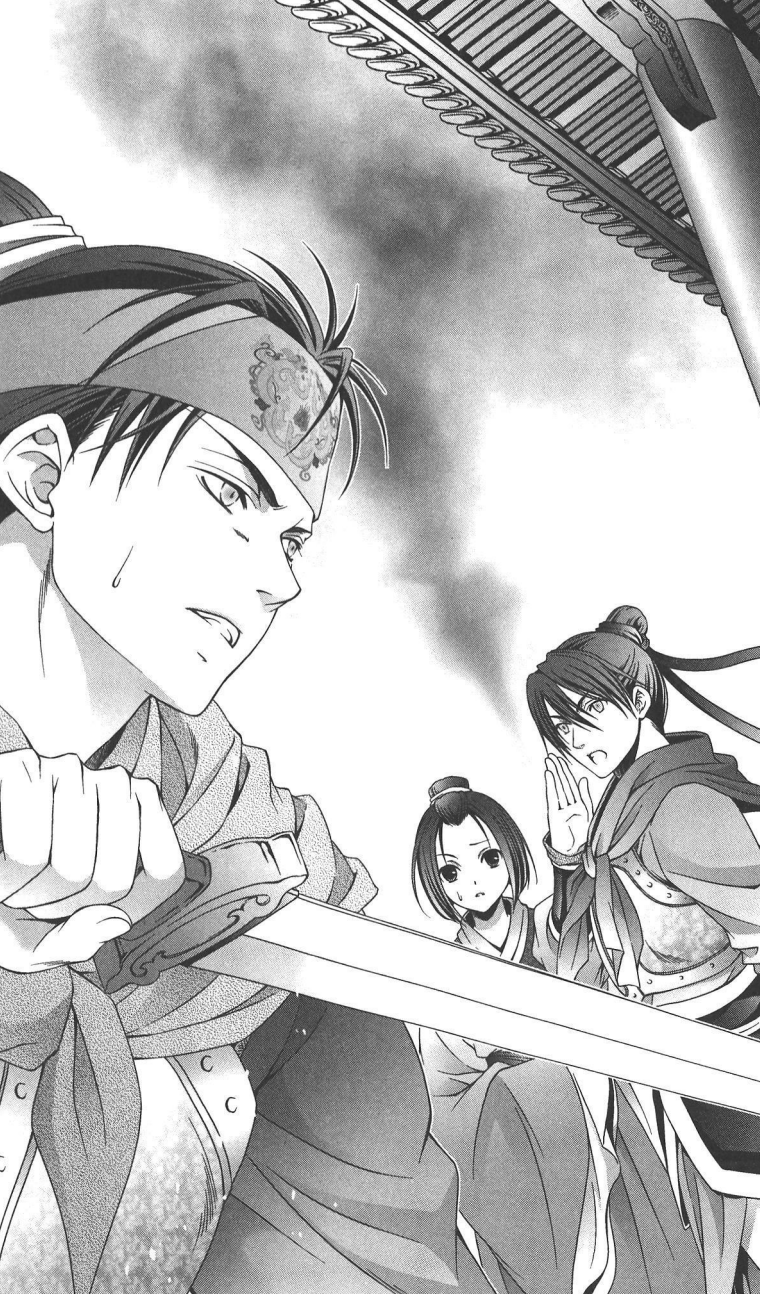
せめて、巻き込んでしまったこの子だけは守ろうと、冬雁は青乎に覆い被さった。しかし、いつまで経っても覚悟していた衝撃は襲ってこない。

恐る恐る体を起こせば、逞しい背中が兎天との間に立ち塞がっていた。

「俺の女に手を出したんだ、覚悟はできてんだろうな！」

お前の女になった覚えはない、と叫びたかったが、兎天から放たれる凄まじい殺気に口を開けることはできなかった。

そもそも子慮とは、龍乎と猩猩緋、敵同士の間柄だ。なにを勘違いしたのか、子慮は自分を殺そうとした相手に惚れてしまったらしい。それ以来、顔



を合わせるのは初めてだが、未だ迷惑な勘違いは続いているようだ。

叫えると同時に、子慮は地面を蹴った。火花が散るほどの一撃に、兎天が後退る。子慮の攻撃は、見ているだけでわかるほど一打一打が重い。

それでも、対する兎天は素早さを軸とした攻守を得意とするため、攻撃を受け流したあとの反撃が子慮の速さを上回っていた。

子慮は悔しげに顔を歪める。

「文重！　こいつは勝てる気がしねぇ！　そいつらを連れて、強そうな奴のとこに逃げろ！」

あっさりと敗北を宣言した子慮にあっけに取られていると、背後から現れた男が冬雁と青乎を肩に抱え上げた。そして、有無を言わさずに兎天たちから距離を取らされてしまう。

「やれやれ。強そうな奴って、どこに行けば見つかるんですかね」

溜息をついた男は、冬雁と青乎を二人から離れた場所に降ろすと、懐から取り出した丸い玉に火打ち石で火を点ける。すると、あっという間に赤茶色の煙が空にあがった。

「隊長！　もうちょっと頑張ってくださいね！　うちの奴らを呼びましたから！」

男が声をあげると、反応したのは子慮ではなく兎天の方だった。子慮から距離を取るなり跳び上がり、屋根の淵に手をかけ体を反転させた。

「うわぁ、身軽な奴ですねぇ」

男は感嘆するように声をあげながらも、二本の匕首を兎天目掛けて放った。一本目は剣で叩き落とされたが、二本目が鬼面の脇を掠める。

あ、と冬雁は思わず声をあげた。鬼面が音を立てて回廊に落下する。二本目の匕首が、紐を切断していたのだ。

露になった顔に、冬雁の目が釘付けになった。すっきりとした鼻梁に切れ長の大きな瞳。肌は驚くほど白く、唇の赤が艶めかしい。誰もが息を呑むほ

ど、美しい男だった。
　だが、顔の右半分が醜く焼け爛れ、完璧な造形を醜悪なものに変えていた。赤く固まった肌には虫が這いずったような痕が残り、窪んだ眼窩は空洞だった。
　兎天は己の顔を片手で隠すと、体を翻した。その姿は、あっという間に屋根の奥へと消えて行く。
「おい、文重！　邪魔すんじゃねぇよ！」
「だって、勝てないって言ったじゃないですか。こうでもしないと、殺されてたでしょ？」
　そう言って、文重と呼ばれた男は狼煙玉を足で砕いた。煙はじょじょに細くなり、空に溶けるように消えた。
「増援は……」
「ああ、嘘ですよ。うちの隊は宮中の地理に疎いですからね。狼煙を上げたところで、夜になっても辿り着けるかどうか。とりあえず、あのおっかない面の奴が、退散してくれればいいんです」
　嘘も立派な策略ですよ、と笑った。冬雁が茫然としていると、同じように呆気に取られていた青孚が、安世の元へと駆け寄って行く。全身、傷だらけではあるが、大きな怪我はなさそうだ。
「あ、そうだ。ところでお嬢さん、ここはどこですか？」
　わからずにここに来たのか、と冬雁は訝る。視界の端に、猛然とこちらに駆け寄ってくる子慮を捕らえながら冬雁は答えた。
「後宮だ」
「へぇ、後宮ですか……って、後宮！」
　さすがに、そこまでは予想外だったのだろう。目玉がこぼれ落ちそうなほど驚愕した文重は、満面の笑みを浮かべて冬雁に向かってきた子慮に足蹴りをかました。
「あんたって人は、あんたって人はっ！」
「てめぇ、久し振りの逢瀬を邪魔すんじゃねぇ！」
「んなことはどうでもいいんですよ！　なんで選り

に選って後宮なんかに迷い込むんですかっ！　むしろよく誰にも見咎められずに入れましたね！」

「後宮？」

不思議そうに聞き返す子慮に、文重は襟を摑んで激しく揺さぶった。

「んん？　じゃあ、お前は後宮の侍女だったのか？」

否定するのも面倒臭い。打ち首ですよ、と騒ぎ立てる文重の声を聞きながら、冬雁は脱力する。先ほどまでの、深刻な状況が嘘のようだ。

「でも……」

安堵の次に襲ってきたのは、後悔だった。

兎天に逆らってしまったのだと、冬雁は改めて体を震わせる。猩猩緋に戻れないのでは、という絶望が胸を過った。兎天に逆らってしまったのだから当然だ。

途方に暮れていると、青乎に支えられた安世がこちらにやってきた。袍はぼろぼろで、至る所に血が滲んでいる。

「……安世殿」

「無事でなによりです」

慰めるように肩を叩かれ、冬雁の目に涙が滲んだ。

「兎天様の、あの顔は……」

「焼かれたんですよ。陛下にね」

「皇帝に？」

冬雁は思わず驚きに声をあげた。まさかここで、猩猩緋の最大の敵である男が出てくるとは思ってもみなかった。

「地位も名誉も、美貌すらも奪われて、兎天はここを去りました」

「じゃあ……」

「彼は元宦官。私の同僚でした」

初めて知らされた事実に、冬雁は絶句した。それと同時に疑問が湧き起こる。

兎天が猩猩緋に入った理由はわかった。おそらく、復讐が目的なのだろう。だが、それならばなぜ後宮

に来たのか。
　言い知れぬ不安に、冬雁は唇を噛み締めた。

　侍女たちに指示を出し、西離宮の周りを腕に覚えのある宦官で固めた黎貴妃は、庭に面した露台から空を見上げていた。
　雲一つない晴天が広がっている。それがかえって不気味に感じられた。
「凜凜、まだ明佳たちは来ないの？」
「はい。こちらに向かっているとは思うのですが……」
　そう告げる凜凜の顔色も悪い。妹のことが心配なのだろう。明佳には、春蘭を着替えさせたあと、西離宮に避難するように命じてある。黄玉宮に留まるよりも、こちらにくる方が安全だ。
「祥安も無事かしら……」
　ようやく立って歩くようになった息子を思い、黎貴妃は唇を噛んだ。普段、公子は西離宮にはいない。産まれた男児は母の元から離され、別の場所で養育されるのだ。
　むろん、その人選にも可能な限り配慮している。警備にも西離宮以上に気を遣い、常につきまとう暗殺の影への備えも充分だ。
「やはり、公子様もこちらへお連れした方が」
「いいえ。この混乱の中で移動させるのは逆に危険よ」
　黎貴妃にとって、猩猩緋よりも他の妃妾たちや太子派の方がよほど恐ろしい。むりに呼び寄せるよりも、祥安の周囲を固める方が安全だ。混乱を好機と、動き出す者がいないとも限らないのだから。
「とりあえず、情報を集められるだけ集めてちょうだい」
　状況がわからなければ、迂闊に動くこともできない。猩猩緋は、どれだけの人数が宮中に入り込んでいるのか。また、どれほどの被害が出ているのか。

後宮まで押し入ってくるとは思えないが、安易な決めつけは危険だ。

「かしこまりました。黎貴妃様も、外にお出にならないようにしてください」

「わかっているわ。気分を落ち着かせたら、すぐに戻るから」

庭は四方を外塀や建物に囲まれているが、屋根伝いに侵入される恐れもある。凛凛は万が一のことを考慮しているのだろう。

「春蘭様がいらしたらお知らせにあがります」

「ええ」

凛凛には、春蘭だけでなく、他の妃妾たちが避難してきても、拒まずに受け入れるよう指示を出してある。

もっとも、噂のせいでそんな奇特な人物は少ないだろうが、皆無ではないはずだ。特に下位の妃妾たちは、誰もいない室で震えるよりはましだ、と考えるかもしれない。

刺客を考慮して、一箇所にまとめて見張りをつかせることになるだろう。そのための房室も準備させている。

――本当に今更だ。

手を差し伸べたところで、握ろうとする者は誰もいない。この手は噂同様、血で赤く染まっているのだから。

「私に幸せになる資格などない……」

まさか、己のしたことを後悔する日がくるとは思ってもみなかった。

攫猿（かくえん）に攫われ、妖の子を身籠もり、助けられたと思えば、妃妾として後宮に献上された。生まれた子を皇帝の種だと偽らなければ、母子とも首を刎（は）ねられていただろう。

だから、秘密を知る女たちを、人を雇って殺した。ともに攫猿に囚われ、励まし合って生きて来た間柄だったにもかかわらずだ。

そして、都に出没した攫猿から逃れるために、身

につけていた飾りを、なにも知らない少女たちの手に渡るよう画策した。攫猿が自分の匂いに釣られ、後宮ではなくそちらに向かうように仕向けたのだ。結果、なんの罪もない少女たちの命が奪われた。

生き延びるために必死だった。罪悪を感じる余裕はなかった。わずかな油断が命取りになるのだと自分に言い聞かせ、心があげる悲鳴に気付かぬ振りをし続けてきた。

けれど、ある人物に出会い、虚構で塗り固めていた心の壁が崩れ落ちそうになった。

〝――韓楊秀(かんようしゅう)〟

禁軍の将だ。おそらく、寵妃としての地位を笠にきて、自らの子を帝位にと望む自分を、よくは思っていないだろう。それは別に構わない。どうあっても、触れることのできない相手だ。想い合ってしまう方がよほど辛い。

忘れようと何度も思った。だが、瞼を閉じるだけでありありとその姿が浮かぶ。一度目は、御簾越しの対面だった。二度目は、宮中で行われた宴が猩猩緋によって襲撃された時だった。

昔の仲間に気付かれるのでは、と怯えながら逃げれば、黎貴妃は華宴宮の奥で侍女たちと共に迷っていた。煙が充満し、もうだめかと覚悟を決めた時。助けに現れたのが、楊秀だった。

動くことのできない黎貴妃を抱え上げ、華宴宮を出たあとも、後宮までの道のりを護衛してくれた。わずかな間だったかもしれないが、黎貴妃にとってみれば、まさに夢のような一時(ひととき)だった。

忘れようと思えば思うだけ、愛(いと)しさが募る。それがどれほど虚しく、無意味なものだと自分に言い聞かせても、名を聞くだけで体が戦慄(おのの)いた。

吐息を漏らした時だった。

背後に、ぞっとするほど冷たい気配を感じた。振り返る前に、首筋を摑まれる。

「そのままで聞きなさい」

黎貴妃は体を震わせながら、小さく頷いた。

「公子の身柄を預かりました。無事に返してほしければ、皇帝の胸に埋められた玉を壊しなさい。できなければ、公子を殺します」
「っ、そんな……！」
「寵妃が相手ならば、あの男も油断するでしょう。別に殺せと言っているわけではありません。玉を壊しさえすればいいのです」
脅迫しているにもかかわらず、口調は驚くほど優しい。だが、黎貴妃は声の主を知っていた。無慈悲で、人を人とも思わない。
「私が誰かわかりますね？」
「……兎天、様」
「察しのいい子は好きですよ。物わかりがよければ、もっと好きになるでしょうね」
黎貴妃は叫びだしたい気持ちを、自分の手のひらに爪を立てることで堪えた。
「一度目は反故にされましたが、許してあげましょう。でも、二度目はありませんよ」
房室に置かれていた〝皇帝の玉を壊せ〟と書かれた文の主は、兎天だったのか。なぜ、自分がここにいると知られたのだ。混乱しそうになる気持ちを静めるために、さらに爪を食い込ませる。腕から伝わる痛みが、頭に登った血を少しだけ鎮めてくれた。
「今が絶好の機会です。皇帝の元へと先導してあげましょう」
「私に、なにをさせる気ですか？」
「文を見たでしょう？」
兎天は自分を逃がす気はないのだ。絶望が胸裏を過った。
殺す、と口にするからには、黎貴妃が命令を拒めば、兎天は間違いなく祥安を葬り去るだろう。そして、価値を失った自分も、息子のあとをすぐに追わされる。
「まさか、捨て駒が、こんな形で役に立ってくれるとは思ってもみませんでしたよ、梁華」
久し振りに呼ばれた名は、他人のもののように聞

こえた。

——これは、罰なのだろうか。

手を見れば、破れた皮膚から真っ赤な血が滲み出ていた。

自分の手から流れたにもかかわらず、他人の血であるように思えてならない。己の指示によって、命を奪われた者たちの——。

そして、黎貴妃は静かに西離宮から姿を消した。



のどにあてがった剣は、鉄の冷たさを伝える。柄を握る手が震えていたせいで、皮膚を少し傷つけてしまったらしい。染みるような痛みを感じた。

「春蘭！」

仲望が叫んだ。玄楽は苦々しげな表情でこちらを睨んでいる。手を出さないのは、春蘭が本気だとわかっているからだろう。ここで春蘭に死なれて困るのは玄楽だ。

「私にも守り神としての矜持がある。邑を守ることは大事だが、力を悪用されるわけにはいかぬ」

守り神の力は強大だ。だからこそ、〝神〟と呼ばれ、畏怖される。

もしも玄楽がその力を使い、民を害するようであれば、春蘭は己の命を犠牲にしてでも阻止しなければならなかった。

「私利私欲のために使うわけじゃねえ」

「ならば、なんのためだ」

はじめは、真名さえ取り返せれば理由などどうでもよかった。

だが、今は知りたいと思う。

玄楽が命を賭すほどの理由とは、いったいなんなのか。なにが玄楽をそこまでさせるのか。

「さっさと話せ」

死ぬぞ、と自らの命を盾にして迫れば、玄楽は頭巾を取って頭を掻きむしった。

仲望は玄楽を警戒しながらも、春蘭から目を離さない。油断すれば、剣を奪うために飛び掛かって来そうだ。

「……わかった。ここでは話せない。場所を移動さ

せてもらう」
「どこに行けばいいのだ？」
玄楽を信用したわけではないが、相手には正直に事情を話す以外の手は残されていない。なにしろ、春蘭自らが己の命を盾としているのだから。
「こっからは、少し遠い。連れてってやるよ」
あまりにも素早い動きに、春蘭は玄楽の接近に反応できなかった。身動ぎする前に剣を奪われ、担ぎ上げられてしまう。
「春蘭！」
「おい、仲望。禁軍の左虎伏軍の詰め所まで来い。わけを話すまでは、こいつに手は出さねぇから安心しろ」
そう告げると、玄楽は中庭の巨石を足場にして屋根に飛び移った。眼下では、仲望がものすごい勢いで飛び出して行く姿が見える。
これが罠である可能性もあったが、なぜか春蘭には大丈夫だという確信があった。
「舌噛んで、勝手に死ぬなよ」
「なっ……！」
反論しようと口を開きかけたが、玄楽が走り出したことで春蘭は慌てて肩にしがみつく。白桃の背に乗り慣れているため、少し視点が違うだけで不思議な気持ちになる。
無駄な障害物がないせいか、屋根からは宮中がよく見渡せた。風に靡くように数本の煙が上っているが、半分は消えかかっている。
一つ一つの建物が独立した造りで、なおかつ外塀に囲まれているため、強風が吹かない限り貰い火をすることはないのだろう。今日は抜けるような晴天で、髪が緩やかに靡く程度の風しかない。
春蘭は安堵の溜息をついた。
火が広がれば後宮も貰い火をする可能性が高く、また、黄海楼の面々が宮中から出る間に煙に巻かれてしまう恐れもあった。
玄楽は屋根から屋根へと、器用に飛び移ってい

く。そこから見える光景は、〝悲惨〟の一言に尽きた。折り重なるようにして倒れている者や、怪我を負いながらも必死で建物に逃げ込む者の姿も見える。剣や槍が散乱し、その上を、武装した兵士たちが猩緋を捜し回っていた。

声なき悲鳴が聞こえるようだった。

目を背けたくて、でも、背けてはならない気がして、春蘭は耐えるようにじっと見つめた。

やがて、宮中の端に当たる場所に着いた。屋根伝いに建物の内部に侵入した玄楽は、開いている窓から勝手に室内へと足を踏み入れる。堂々と躊躇いのない足取りで室を出た玄楽は、人気のない廊下を春蘭を抱えたまま進んで行く。

春蘭は玄楽の言葉を思い出した。

おそらく、この建物が左虎伏軍の詰め所なのだろう。人気がないのは、全員が宮中の守りに出払っているからだ。

龍乎の詰め所を広くしたような感じだな、と春蘭は周囲を見回した。あちらは人が出払っていても、街中に位置しているせいか常に賑やかな声が響いていた。玄楽が歩く度に、ぎしり、ぎしりと床の鳴る音が響いた。

足を止めたのは、最奥にある扉の前だった。しばらくそこで待つと、慌ただしい足音と共に息を切らせた仲望が姿を現す。よほど急いだのだろう、官服は乱れ、冠も取れかけている。

それを一瞥した玄楽は、仲望の息が整うのを待たずに扉を開けた。

円卓と数脚の椅子が置かれている他には、壁際に衝立があるだけの、殺風景な室内である。衝立の奥にはもう一つの扉が隠れていた。その表面を、五回叩く。

すると、扉が内側に開いた。

「様子はどうだ？」

玄楽が声をかければ、中で控えていた初老の男が難しい表情で首を振る。

「今にも灯火が消えてしまいそうだ」と、男自身が今にも消え入りそうな声で答えた。男は春蘭を訝しむように見つめるが、玄楽の視線を受けて隅へと戻って行った。

室内は薄暗く、空気はじっとりと湿り気を帯びていた。奥に天蓋つきの寝台が置かれ、そこに誰かが横たわっているのがわかる。

「……兄上。そろそろ、春蘭を返してください」

手が伸ばされたかと思うと、春蘭の体は仲望の腕の中に移動していた。

腰に回された腕があまりにも力強く引き寄せるものだから、潰れた蛙のような声が出た。仲望が慌てて力を緩める。抗議するように睨めば、「……すまない」と、謝罪が返ってきた。

呆れたようにそれを見ていた玄楽が、寝台の覆いを片腕で上げる。

「翰栄？」

春蘭は仲望の腕から身を乗り出した。寝台に横たわっていたのは、紛れもなく翰栄――太子博焚だった。

この前に見た時よりも、容態は格段に悪化している。眼窩は落ち窪み、顔は死人のように青白い。体は一回り以上も痩せてしまい、骨が浮き出ている状態だった。

胸が微かに上下していなければ、死んでいると勘違いしてもおかしくない。

「これは……」

仲望が思わずといった風に呻いた。片手で髪をかきあげ右目を露にし、顔を曇らせる。

「太子の体を、黒い靄のようなものが覆っている。〝気〟か？」

「そうか、お前は視えるんだな。俺には、気の流れが、博焚の体内でわだかまってるようにしか感じられない」

仲望は禁軍兵として参加した四年前の戦で、胸に埋め込まれた玉が暴走し、気術兵としての力を遣お

うとすると、右目に〝気〟が集まるようになってしまった。平生でも気の流れを視ることができるため、翰栄の身に起こっている変化もわかるのだろう。春蘭も、真名を取り戻し、守り神に戻れば仲望と同じ光景を見ることができるはずだ。

翰栄の様子から見ても、呪術はかなり進行している。数日後——いや、今夜にでも術は完成してしまうかもしれない。

「待ってください。なぜ太子と猩猩緋である兄上が禁軍の詰め所にいるんです」

「簡単な話だ。将軍の半分は、太子側の人間なんだよ」

玄楽は隠すこともなく、実にあっさりと告げた。質の悪い冗談だとばかりに、仲望は口元を引き攣らせる。

「楊秀は」

「あいつは違う。腹芸ができないからな。端っから引き込むつもりはなかった」

仲望は安堵の表情を浮かべた。さすがに、楊秀が心配をするふりをして、腹底で裏切っていたと思いたくなかったのだろう。

「禁軍が表向き中立を守っているのは、太子派と公子派の争いを広げないためだ。武力のぶつかり合いは、多大な犠牲を生む。それに、博焚が帝位に就いた時、禁軍が疲弊していたら辺境が騒ぎ始める。四年前に叩いたとはいえ、根絶やしにしたわけじゃないからな」

「……ならば、花中書令は、それを知っているのですか？」

「知らねぇよ。まさか自分がせっせと勧誘している将軍たちが、すでに太子に忠誠を誓っているとは思わないだろうな」

さすがに、それは不憫だ。仲望を見れば、咎めるような視線を玄楽へと向けていた。

「なぜ、なにも言わないのです」

「教えたら、あの人は躊躇いなく禁軍を動かすだろ。

今の段階では、あくまでも禁軍は皇帝の直属だ。意に反した行動を取れば、将軍たちを処罰する正当な理由を与えることになる。頭をすげ替えられちゃ困るんだよ」

反論する隙間もない説明に、仲望は押し黙る。それを眺めていた春蘭は、疑問を口にした。

「だが、それをなぜ猩猩緋であるぬしが知っているのだ？」

「あー……まあ、今更か」

迷った末に、玄楽は諦めたように呟いた。

「猩猩緋の指導者である紅主は、こいつなんだよ」

こいつ、と玄楽が指をさしたのは、眠っている翰栄だった。

仲望の顔色が悪い。

立て続けに衝撃の事実を聞かされたのだ、気力も乏しくなるだろう。驚きに声も出ない仲望の代わりに、春蘭は口を開いた。

「翰栄が義賊の親玉だったのか」

「世の中が荒廃すると、地方から反乱が起こる。だが、たいていは指導者がいなくてすぐに鎮圧されちまう。この国は、軍だけは精強だからな。一方的な虐殺で終わらせないためにも、反乱を操作する指導者が必要だった。それに、〝義賊〟は不正を行う官吏への牽制にもなる。だから、作ることにしたんだよ」

作る、と玄楽は言ったが、それは生半可なことではなかっただろう。

玄楽は、浅い呼吸を繰り返す翰栄を眺めながら、懐かしげな口調で語った。

「人員は俺と翰栄とで集めた。翰栄は紅主、俺は朱緋と名乗った。土台ができたところで、活動を始めた。地方には不満が燻ってたからな。二年も経たないうちに、猩猩緋の人数は倍以上に膨れあがった。人数が増えると末端まで目が届かなくなって、どう

しても先走った行動に走る奴が出てくる。俺はそいつらを抑え、猩猩緋の活動に専念することにした」

すべて順調だった、と玄楽は語る。

猩猩緋は力をつけ、皇帝を幽閉するための戦力は整いつつあった。

「あと少しだった。そんな時に、こいつが倒れたんだよ」

「〝呪術〟か」

「そうだ。博焚は早くから己が呪われていることに気付いていた。異常なまでに先見の明のある奴だからな。だが、どうすればこれを打ち消すことができるか、誰もわからなかった」

「――だから私を狙ったのか」

ようやくもたらされた答えに、春蘭は納得した。玄楽は、翰栄にかけられた呪術を解くために、守り神の力を欲したのだ。

「確かに、守り神の力ならば呪術を打ち破れるだろうな」

「だが、華安の守り神はすでに封じられたあとだった。もっとも、あんな巨大なのは、さすがに隷属できなかったと思うがな。そして、守り神を捜して各地を転々とし、あんたを見つけたんだ」

守り神はその地に根付くもの。力を貸してくれと頼まれても、他所は他所の神に頼めと、無情に追い返しただろう。

だから、玄楽は春蘭をむりやり隷属させることで、その力を振るおうと考えたのだ。

「だが、よく守り神の力ならば呪術を跳ね返せると知っていたな」

「ありとあらゆる書物をひっくり返したんだよ。そしたら、三百年前の今にもばらばらになりそうな竹簡に、呪術にかんする話が載っていた。阻止する方法もあったが、どれも初期の段階でなければ意味がないものだった。唯一、残ったのが〝守り神〟の力を利用する、というものだった。それから、守り神について調べて……半信半疑だったが、藁にも縋ら

んばかりの気持ちだった」
「そうか。ぬしは、本気で命を賭していたのだな」
「当たり前だ」
仲望が訝しげな視線を春蘭に向ける。玄楽が理由をずっと口にしなかったのは、呪術を破る際に伴う損害があったからだ。
「最終段階に入った呪術は、よほど強い力でなければ破ることができぬ。人にはまず不可能だ。守り神ならばできるが、術者らによって狂わされた気は守り神に牙を剝く。反動で魂魄は壊れ、そう経たずに消滅するだろう。そして、私を隷属させたぬしも煽りをくって死ぬ」
仲望が息を呑んだ。
玄楽はそれをわかっていたからこそ、仲望になにも告げなかったのだ。
翰栄を助ける方法は、一つだけ。
春蘭の腰に回された腕が強張った。
「博焚が死ねば、皇帝を倒す者はいない。大勢の血が流れる」
春蘭の脳裏を、先ほどの凄惨な光景が過った。沸儀は翰栄を葬ったあと、次なる獲物に取り掛かるはずだ。
貪欲に争いだけを求め、敵を喰らい尽くせば、自らの力でまた敵を生み出す。
民は疲弊する。大地には怨嗟の声が響き、それでも沸儀は己を顧みることはしない。あれは、そういう男だ。己が破滅の道を進んでいると気付いても、躊躇わずに歩き続けるだろう。
「なによりも、俺はこいつを救いたい。こんなつまらないことで、死なせたくはないんだ」
翰栄を見つめる玄楽の眼差しは、悲痛な色を帯びていた。
「忠誠を誓った相手だからか？」
「それもあるが、俺は一度、博焚に心を救われている。この異質な見た目のせいで、俺は幼い頃から迫害されてきた。特に宮中にあがるようになってから

は余計に酷くてな。気術を使いこなせるようになっても、今度は化け物扱いだ。だが、博焚だけは違った」

当時のことを思い出したのか、玄楽の口調が柔らかなものになる。

「〝人間なんて、どれも一皮剝けば同じようなものだ〟って主張して、この馬鹿は、よりによって罪人の死体置き場に連れて行きやがったんだよ。短剣を渡されて、皮を剝いで自分の目で確かめて見ろって言われた時は、さすがに開いた口が塞がらなかったな。でも、そう言われて気付いたんだ――この外見を誰よりも忌避していたのは、他ならない俺自身だったんだ、と。それを、博焚は気付かせてくれたんだ」

「恩を返したかったのか？」

「与えられたから、返そうと思ったわけじゃない。俺は、博焚だから助けになりたかったんだ」

それは、命を賭しても構わないというほどに強い感情だったのだろう。

結局、翰栄の代わりに玄楽の命が失われてしまうが、玄楽にとって自分の命よりも翰栄の命の方が重かったのだ。

「助けたいんだよ。なにを犠牲にしても」

「翰栄が望んでいなくても、か？」

「こいつの意見なんて無視だ。憎まれたって、諦めてなんてやんねぇよ」

いっそ清々しいまでの笑みに、春蘭は玄楽の覚悟のほどを悟った。

「あんたを捕まえるのは難しそうだからな。情に訴えてみることにした。頼む。俺はどうなってもかまわない。だから、博焚を救ってくれ」

玄楽の目は、春蘭に死を強要しているにもかかわらず、どこまでも真っ直ぐで澄み切っていた。

「……また、この選択を迫られるとはな」

三百年前、春蘭は洪水から邑を守るために生け贄として選ばれた。

自分が犠牲になれば、邑人たちは助かる——なんと卑怯な言葉だろうか。邑人の中には、己の家族も入っているのだ。最初から、逃げるという選択肢を奪われているようなものだった。

もしも、真名を奪われた直後にこの話を聞いていたとしたら、春蘭は怒りに任せ拒絶しただろう。この国がどうなろうと、邑さえ守れれば問題はなかった。

国には生き物と同じように寿命があって、いずれ衰え消えていく。その寿命がきただけに過ぎない。国が滅ぶ時に犠牲はつきものなのだと、容赦なく切り捨てたはずだ。

だが、春蘭は知ってしまった。

人と人が繋がり合いながら生きる世界を。

——復讐を誓う者がいた。

——己の不幸を嘆く者がいた。

——自分の小さな世界を守ろうと、刃を向けてきた者がいた。

——義賊に身を投じ、世を変えようとした者がいた。

——貧しい生活に身を浸しながらも、他者の幸せを祈る者がいた。

——病に冒されながらも、仲間を守って命を落とした者がいた。

——意志を継いで、己を変えた者がいた。

——運命に翻弄されながらも、後悔はしていないのだと真っ直ぐな瞳を向けてきた者がいた。

——争いを求め、すべてを喰らい尽くそうとする者がいた。

——命を賭しても、主を守ろうとした者がいた。

——少女のために、一度は捨てた力を取り戻すことを決意した者がいた。

どれほど、憎悪や、嫉妬や、欲望に溢れた世界でも、信頼や、愛情や、善意はけっしてなくならない

のだと。
春蘭の胸に温かな決意が宿った。
だが、それに気付いたように、焦りを含んだ仲望の声が響く。
「なぜ、春蘭だけが犠牲になる」
痛いくらいの力で、掻き抱かれる。仲望は怒りに染まった眼差しで、玄楽を睨みつけていた。玄楽も負けじと、双眸に力を込める。
「お前は、なんの罪もない民に、これ以上の血を流せという気か」
「それは、今を生きる者たちが受けなければならない痛みだ」
「きれいごとだな。お前はなにも見ていないから、そんな甘いことを言えるんだ。地方では、口減らしのために親が幼子を殺し、子が老親を殺す。笑い合っていた者たちが、次の瞬間にはわずかな米を巡って争い合う。博焚が死ねば、皇帝の手によってより多くの悲劇が生まれる」
玄楽の拳が、憤りを表すように壁を叩いた。
「それをわかっていて、なぜ止める！」
「……だったら、春蘭の気持ちはどうなる。むりやり真名を奪われ、己が犠牲とならねば親しい者たちが苦しむと脅され、逃げ道まで断たれた。これほど残酷なことがあるか！」
春蘭の双眸から涙が溢れた。
仲望の姿が、いつかの兄と重なる。
なぜ、誰かを助けるために、春蘭が犠牲にならねばならないのだと、嘆いてくれた。生きるべきだと、迷いもなく手を差し伸べてくれた。
「もういい……。もういいんだ、仲望」
その言葉だけで嬉しかったから。
どんな理不尽なことも、笑って受け入れられるから。春蘭はゆっくりと微笑んだ。
「私にみんなを守らせてくれ」
「しゅんら……！」
仲望が言葉を発するより早く、春蘭は守り神の姿

へと戻った。感情が遠ざかるが、意志は変わらなかった。

この国を守ることが、邑を守ることに繋がる。ならば、守り神としての任を全うするのみ。

『悪いが、真名は返して貰うぞ』

玄楽の胸に手を差し込み、魂に結ばれていた真名を己の体に取り戻す。体の隅々にまで、力が染み渡る気がした。

驚きに目を瞠った玄楽に、春蘭は聞こえないと知りながらも囁いた。

『ぬしの決意はよくわかった。だが、ぬしには翰栄を支えるという大事が残っている。世を変えるには、私の命一つで充分だ』

ふわりと、宙に浮いた春蘭は、仲望を見た。そういえば、彼の右目は〝視る〟ことができるのだと思い出す。

『――ぬしと出会えてよかった』

仲望の手が春蘭へと伸ばされる。

視ることはできても、触れることはできない。手は、むなしく宙を掻く。

『白桃』

名を口にすれば、玉から白桃が姿を現した。その瞳はすべてを理解したのか、悲しみを湛え、小さく縋るような声で鳴いた。

『ぬしは先代の神獣だ。私と共に消える必要はない。今まで世話になったな。白雪(はくせつ)を頼んだぞ』

これで心残りはない。視線を戻せば、顔を歪めた仲望の姿があった。

「春蘭！」

『さらばだ』

翰栄の体を覆う狂った気を道標に、春蘭は地脈へと潜った。

ふと、箏言(そうげん)は違和感を覚えた。

呪歌は止めずに、目だけで周囲を窺う。土間に座

して歌い続けているのは、自分を入れて四人だけだ。他の者たちは、意識を失ってしまった。

だが、呪術はあと少しで終わりを迎える。

太子は意識の戻らぬまま、眠るように息を引き取るだろう。

めまいや吐き気、頭痛は感じなくなって久しい。限界を越した辺りから、感覚が麻痺してしまったのだ。

――気のせいか。

途切れてしまった集中力を取り戻すために、箏言はうっすらと光る文様に目を細めた。呪歌を紡ぐ声に、より力を込める。

すると、一瞬だけ文様が歪んだ。見間違いかと、目を擦る。

やがて光は強さを増し、波打つように強弱をつけ始めた。おかしい。ここでようやく、箏言は違和感の正体に気付いた。

「別の気が、混ざってる……？」

地脈を流れる〝気〟に、まったく別のなにかが干渉している。

正体を見極めようと目を凝らした時、地面に描かれた文様から滲み出していた気が、渦を巻くように吸い上げられた。

そして、あどけなさの残る少女の姿が現れた。

箏言は呪歌も忘れ、神々しい光を放つ少女に見入った。

『〝気〟は吸収させてもらう』

「え？」

告げられた通り、文様の光は失われた。なんの力も感じられない。唖然として少女を見上げれば、苦しげに身をよじり、必死に取り込んだ気を抑えつけようとしている。

紅家が誇る複数の術者たちが、何十日にもわたって練り上げた呪歌の結晶だ。そう簡単に抑え込んでもらっては困る。

挑むように睨みつけていると、最後の一欠片を身

のうちに収めた少女は、苦しげに顔を歪めながらも、笑みを浮かべた。相手が何者かはわからない。人ではありえないだろう。

――でも、まるで人間のような表情だ。

少女は、己の体を両手で抱き締めるように身を縮める。

と、その瞬間。目が眩むほどの、強い光が室内を覆った。

気付くと、箏言は土間に倒れていた。術者たちも同じように意識を失っている。今のは質の悪い白昼夢で、呪術は成功したのではないか――と、文様の中心に目を向ける。

呪殺が成功していれば、中央にある太子の髪は燃え尽きているはずだった。だが、そこには、記憶にあるままの形で髪が残されている。

文様に力は残っていない。

必死に呪歌を紡ぐが、わずかな反応すら見られなかった。

やられた、と箏言は呟いて、痩せ細ってしまった両手で顔を覆う。

立ち上がる気力すらない。

まさか、最後の最後に来て呪術を阻止されてしまうとは。こんな終わりを、いったい誰が予想しただろうか。

「……ははっ、あはははっ」

のどから引き攣った笑い声が漏れる。

不思議と絶望は感じなかった。

箏言の人生は、すべて家名の復興に注がれた。不満はなかった。そうあるように育てられたというのも大きいだろう。

自分はただ、賭に負けたのだ。術者として力を試せただけ、父よりは幸運だった。

じょじょに目が霞んでいく。

なぜか室内に煙が入り込んでいた。天井付近にわだかまっていた煙が、じょじょに下へと降りてくる。知らぬ間に、嗅覚（きゅうかく）が麻痺していたらしい。そうで

なければ、もう少し早く気付いていたはずだ。もっとも、気付いていたところでどうすることもできなかっただろうが。

全身を蝕む疲労感に逆らうことができず、箏言はゆっくりと目を閉じる。逃げなければ、という考えは頭になかった。

――紅家の再興はむりだなぁ。

でも、もう疲れたからいいや。

箏言の意識は、深い闇にゆっくりと落ちていった。



北鵺宮からでは、事態がどうなっているかわからない。

劣勢を覆すために、なんらかの方法を取るとは予想していたが、これほどまでに大規模な攻撃を仕掛けてくるとは思ってもみなかった。

矢継ぎ早に入ってくる報告に指示を出しながらも、楊秀は頭を悩ませていた。猩猩緋は宮中の至る所に出没していた。

先の襲撃のように、一箇所から雪崩れ込んできたのではない。まるで、宮中に潜んでいたかのように、突如として多方向から現れたのだ。

数日前から巡回の兵士を増やし、警戒に当たってきた。特に宴の当日は龍乎からの応援も合わせ、かなりの人数を使って宮中に目を光らせていた楊秀は、どうにも納得できずにいた。

たとえどれほど巧妙に忍び込もうとも、これほどの人数を見逃すはずがない。

「とすれば、考えられるのは内通者か……」

内部に、猩猩緋を手引きする者が潜んでいる。そうでもなければ、これほどの人数が隠れていられるわけがない。

「楊秀様。敵は宮中の見取り図を手に入れているようです。これを」

副官である万里の報告に、楊秀は己の推測が当たったことを確信した。渡されたのは、手描きで作成されたぼろぼろの見取り図である。

けっして細かくはないが、建物の配置や行き止まりとなっている通路など、外部の者では知り得ない情報が惜しげもなく書き込まれている。禁軍兵や官

吏たちでも、ここまで把握している者はいないだろう。

「捕らえた賊徒が所持していたものです。火をつけたあとは、これを元に攪乱を行っていたようですね。それに、ここを見てください。隠し通路まで書いてありますよ」

「……どうりで、見失ったという報告ばかりが集まるわけだ」

楊秀は忌々しげに呟いた。

隠し通路を含む見取り図の流出は痛い。袋小路に追い込んで捕縛するという手段がとり難くなる。宮中を好きなだけ荒らし回ったあとは、見取り図を元に脱出する寸法だろう。

かといって、今からすべての門に人員を回すわけにもいかない。将軍の大半は手勢を割いて、放火された建物の鎮火に当たっている。大半は消し止められたが、初めに火をつけられた紫宝宮だけが未だに燃え続けていた。

これ以上、動かせる兵士はいない。楊秀は見取り図を睨みつけながら、重い口を開いた。

「陛下はどうされている？」

「お一人で後宮へ向かわれたそうです」

「……後宮に？」

「はい」

楊秀の胸を、嫌な予感が過った。仲望も春蘭を追って後宮に向かったはずだ。それに、あの方も……。

言葉を交わしたのは、御簾越しだった。次に顔を合わせたのは、宴が猩猩緋に襲撃された時のこと。逃げ遅れがいないかどうか確認するために、単身で華宴宮へ入った。

その奥で、道に迷い、侍女たちと共に蹲る女性、黎貴妃の姿を見つけた。胸に込み上げたのは、歓喜と絶望。想う相手との邂逅と、どれほど想ったところでこの感情が報われることはないのだという苦しみに、胸を焦がした。

楊秀は想いを断ち切るように首を振った。すぐに頭を切り換える。

「おかしいな」

沸儀の性格ならば剣を携えて、真っ先に猩猩緋を狩りに行きそうなものだが、なぜ後宮に向かったのか。楊秀が奇妙な矛盾に悩んでいると、顔を真っ青に染めた部下が走り寄ってきた。

「韓将軍に報告いたします。後宮に猩猩緋が現れました！」

「後宮に？　警備はどこよりも厳重だ。侵入されても、一人や二人ていどならば宦官たちがなんとかするだろう」

「そ、それが、一部の宦官を残し、真っ先に後宮から逃げ出したと……」

楊秀は報告をした部下に八つ当たりするところだった。常の威勢はどこへ消えたというのだ。よりによって、力のない者たちを見捨てて自分たちだけ逃げるとは。

「侵入した賊徒の数は」

「不明です」

わからないということが、楊秀の不安を煽った。唇を噛んだあと、万里を呼ぶ。

「しばらくの間、ここを頼む。私は手勢を集め後宮へ向かう」

「わかりました。お任せください」

楊秀は最悪の事態に備えて、あらかじめ待機させていた者たちを連れ、足早に後宮へと向かった。

洪釆は黄玉宮の屋根上の死角に身を伏せながら迷っていた。

ここに来たまではよかったのだが、肝心の兎天を見つけることができない。兎天が向かった先に行けば、なんとかなるという考えは甘かったらしい。

屋根から回廊を窺ってみても、驚くほどに人気がなく、たまに武器を持った宦官の姿が見えるだけで

ある。猩猩緋の侵入に備え、室に避難しているのだろう。

だからこそ、異質な気配があればすぐにわかるのだが、辺りは静けさに包まれている。

「手当たり次第、動き回るのもなぁ……」

こちらが兎天を見つけるよりも先に、相手に気づかれてしまえばお終いだ。兎天は洪采を排除しようとするに違いない。仲間ではあるが、洪采は兎天に信を置いていない。朱緋や槍幽、冬雁は仲間だと断言できるが、兎天だけはどうしても同志とは思えなかった。

「……いつまでも、ここに留まってはいられないか」

槍幽は、混乱が収まる前に撤退すると言っていた。それが限界だ。せめて兎天がなにを企んでいるのか、その片鱗でも摑めれば。

四夫人の離宮まで足を伸ばしてみるか、と懐にしまった見取り図を取り出した。

「いや、いっそ皇帝を捜すのも手か……」

兎天の企みは不明だが、皇帝がかかわっている可能性もある。

猩猩緋の目的は皇帝を倒し平穏な世を取り戻すことであり、今までの活動はすべてそこに繋がっている。

むろん、見当違いという恐れもあるが、ここで迷っていてもしかたない。わずかでも可能性があるならば、それに賭けるべきだ。

宮中で皇帝の姿を見つけた場合、すぐに赤茶色の狼煙をあげる決まりとなっている。空に上るのはどれも黒い煙ばかりだ。ならば、皇帝は建物内部に退避した可能性が高い。

後宮にいるかどうかは賭けだ。あの男が、宮中を荒らし回る獲物に見向きもしないというのも腑に落ちないが、いつまでもここに留まってはいられない。

逡巡は一瞬だった。見取り図を確認し、皇帝がいそうな場所に見当をつける。

後宮内にある己の居室か、それとも寵妃と名高い黎貴妃の離宮か――洪釆はまず、ここから近い場所に向かうことに決めた。

「さて、鬼が出るか蛇が出るか」

小さく口笛を吹いて、洪釆は慎重に屋根を移動し始めた。

黎貴妃は歩みを進める度に、己が死に近付いて行くような感覚を覚えた。

後宮内を見通しているのではと疑いたくなるほど、兎天が選んだ通路すべてに人の姿が見当たらなかった。猩猩緋を恐れ室に閉じ籠もっているとしても、誰一人とも会わないというのは異常である。いったいどうしたというのか。

「この廊下を抜けたところに、陛下があなたを待ってますよ」

そう言って、兎天は姿を消した。

来た道を取って返したかったが、祥安の顔が胸裏を過る。黎貴妃は震える足を叱咤し、薄暗い廊下を進んだ。

回廊に出るまで進めば、そこには死を覚悟した黎貴妃の心とは裏腹に、眩いばかりに美しい庭園が広がっていた。

瓢箪の形を模して造られた池には、括れの部分に朱色の桁橋が掛けられていた。池の淵には遅咲きの牡丹が咲き誇る。

その奥には、岩と土を盛って起伏をつけられた小道がある。途中に東屋が置かれ、周囲には数種類の高木が聳えていた。

一度だけ来たことのある場所だ。

横に伸びた回廊の突き当たりには、皇帝の居室へと繋がる扉がある。窓から望む景色は後宮の中でも随一なのだと、凛凛から聞いた。

沸儀は景観の一つであると錯覚してしまうほど、庭園の雰囲気に溶け込んでいた。衣裳は宴の時のま

まだ。池の側に、宮中の混乱とは無縁の風情で佇んでいる。

黎貴妃はなるべく平生を保ちながら、「陛下」と、声をかけた。ゆっくりと振り返る沸儀を見つめながら、黎貴妃は儚げに見える笑みを形作る。

「騒動が収まるまで、陛下のおそばに置いてくださいませ」

怖かった、と震える声音で告げる。庭に降りて沸儀の元へと向かえば、大きな手に肩を抱き寄せられた。

そのまま甘えるように、沸儀の胸元に頭を預ける。微かにわかる硬い感触。これを壊せば、祥安の命は保証される。

今だ。やれ。

脳裏に響く声に操られるように、袖に忍ばせた匕首を手にしようとした時だった。沸儀が、黎貴妃のほっそりとした手首を摑む。

「――そうか。真っ先に余を殺しに来たのは、お前か」

悲鳴をあげなかっただけ上等だろう。言い繕わなければ、と思うが、上手い言葉が出てこない。どうしようもなくて、黎貴妃は戸惑った表情を浮かべて見せた。

「そ、そんな！　陛下を害するなど！」

縋るようにもう片方の――匕首を隠し持った手を、沸儀の胸へと伸ばす。そして、玉が埋められている場所目掛け、振り下ろした。

あとわずか、というところで沸儀の手刀に叩き落とされる。

「あうっ！」

手首に走った激痛に、黎貴妃は悲鳴をあげた。兎天から渡された匕首が、音を立てて地面に落下する。黎貴妃は己の終わりを悟った。

しかし、予想に反して、頭上から響いたのは不服げな声である。

「貴妃よ。お前はもっと賢いはずだ」

「ううう」

黎貴妃は混乱する。

賢い、とはどういう意味だ。訝しみながら顔を上げれば、すぐ傍に、自分を冷酷な瞳で見下ろす沸儀の顔があった。

「余を排除するにしても、それは〝今〟ではないはずだ」

確かに、自分はいずれ沸儀を殺すつもりだった。だが、それは太子博焚を亡き者としたあと、祥安の太子としての地位を確立し、自らも皇后の座に就いてからと決めていた。それまでは、沸儀の皇帝としての権力が必要だった。

けっして、こんな無謀な賭けをするつもりなどなかったのだ。

「復讐の炎を燃やすお前は美しかった。いつかその矛先が、余にも向けられることを楽しみにしていたのだがな……なぜ、消した？」

「それ、は……」

鼻が触れ合うほど近くに、沸儀の顔が近付く。どんな時も感情の揺れを見せなかった漆黒の瞳が、探るような色を帯びる。

世界のすべてを憎み、恨んでいた。

みんな苦しめばいい、と。

自分がそうであるように、もっと、もっと。

だが、一人の少女に教えられた。兄はなにも知らされていなかったのだと。裏切られたわけではなかった——心が癒やされた気がした。

そして、もう一人。

悪婦としての噂を知りながらも、疫に苦しむ民のため自分に膝を折った将軍がいた。なぜ、名も顔も知らない者たちのためにそこまでできるのかと、胸が苦しくなった。

太陽の光が当たる場所を生きて来たのだろう。薄汚れた世界で、兄妹の絆だけを支えに生きてきた自分とは違う。どこまでも真っ直ぐで、曇りのない眼差しをしていた。

気付けば、感情を支配していた復讐の炎は消え、罪悪の念だけが残った。

敵対した相手への罪の意識はない。手を打たなければ、逆に蹴落とされていた。

だが、擾猿が華安に現れた時、己の身の安全を図るために、なんの罪もない女たちを死に追いやってしまった。

――だから、これは罰なのだろう。

無言を貫く黎貴妃からなにを読み取ったのか、沸儀の双眸から、じょじょに興味の色が失われていく。顔が離れ、黎貴妃はその場に崩れ落ちるように座り込んだ。

「つまらん。せめてもの情けだ。この手で葬ってやろう」

鞘から剣が抜かれる。磨き上げられた刀身に、放心する己が映った。

ゆっくりと頭上に翳される。目を瞑ることもできずに、黎貴妃は断罪の刃が振り下ろされるところを見つめていた。

だが、それは横合いから伸びた腕によって阻まれる。体を掬うように持ち上げられ、黎貴妃は気付けば沸儀より離れた場所にいた。背中は力強い腕に支えられ、息が触れ合うほどの近さに、兄、洪釆の顔があった。

最後に顔を合わせたのは、もう三年以上も前になる。任務に向かう兄の背を見送ってすぐ、黎貴妃は妖に攫われた。

久し振りに見る兄は、背も伸び、体も逞しさが増していた。少しだけ残っていた幼さは、微塵も見受けられない。懐かしさが胸に込み上げ、黎貴妃は唇を噛み締めた。そうでもしなければ、嗚咽を零してしまいそうだった。

「……梁華、か？」

困惑に満ちた呟きが兄の口から漏れた。腰に回された腕に力が籠もる。

死んだと伝えられていた妹が生きていた――それ

も、妃妾となって――と知ったのだ、混乱して当然だろう。

黎貴妃はのど元まで出かかった言葉を呑み込んだ。自分には、洪釆を兄と呼ぶ資格がない。憎しみに心を蝕まれ、復讐に手を染めた。

〝梁華〟は、もういない。

ここにいるのは、皇帝の寵愛を笠に着て我欲を満たそうとする醜い女なのだ。唇を噛み締め、心とは反対の言葉を告げる。

「人違い、よ」

「生憎と、実の妹を見間違えるほど眼は悪くないつもりだ」

「違うと、言って……」

「梁華。今は押し問答してる場合じゃない」

はっとして顔を上げれば、沸儀が興味深そうな眼差しをこちらに向けていた。その瞳には好戦的な色が宿っている。

「俺が足止めしている間に逃げろ」

「だ、だめっ。息子が人質として、兎天に囚われて……皇帝の玉を壊さなければ、殺すって、そう、脅されて」

「それが目的か」と、洪釆は吐き捨てるように言った。

黎貴妃はなにがあっても、ここから逃げ出すことはできない。条件を違えれば、兎天は容赦なく祥安を殺すだろう。

「だから、逃げてっ」

洪釆まで巻き込まれる必要はない。もとより玉砕覚悟でここへ来たのだ。死はすでに覚悟している。拒絶するように腰に回された腕を振り解こうとすれば、憤然とした声が頭上から降ってきた。

「お前を置いて逃げられるか」

驚いて顔を上げれば、洪釆はすでに沸儀目掛け穂先を繰り出していた。

鋭い突きだったが、沸儀の玉へと届く前に簡単にいなされてしまう。

「動きが鈍いな」
「くそっ！」
わずかに眼を細めた沸儀は、思い出したように笑みを浮かべた。
「傷が治りきっていないようだな」
確かに洪采の動きは精彩を欠いていた。黎貴妃の知る兄は、速さを生かした攻撃を得意としていたが、初太刀以降、防戦を強いられている。
黎貴妃は玉砂利の上に手を這わせた。石とは違う匕首の感触に触れると、肌が傷つくのも構わずに握り締める。
洪采はどれほど不利な状況でも、自分を見捨てない。目の前で兄が殺される瞬間など、見たくはなかった。
決意に唇を噛み締めれば、血の味が滲んだ。
「逃げろ！」
余裕のない声が響く。
見れば、洪采は武具をつけているにもかかわらず、満身創痍といった体だ。宴のままの、豪奢な袍をまとっている沸儀は、わずかに着崩れている程度で、かすり傷ひとつ負った様子はない。それだけ実力に差があるのだ。
「早くっ！」
だが、黎貴妃が立ち上がるより先に、洪采の槍が撥ね上げられた。がら空きとなった胴に沸儀の蹴りが入り、勢いよく外塀に叩きつけられる。
「兄さん！」
「ぐ、ぅ……」
頭を打ちつけたのか、必死で起き上がる洪采の焦点が定まっていない。それでも洪采は、足下に落ちた槍を拾い上げ、沸儀に切っ先を向けようとする。
黎貴妃はそんな兄を守るように、沸儀の前に立ち塞がった。
「やめ……りょう、か」
「そう急かずとも、すぐあとを追わせてやるものを」

隠し持った匕首を握り締める。機会は一瞬だけ。沸儀が剣を振り上げた瞬間、黎貴妃は渾身の力で地面を蹴った。

沸儀の懐に入り、匕首を胸の――玉目掛けて突き刺す。

確かな手応えがあった。

やったか、と歓喜する暇もなく、黎貴妃は地面に叩きつけられた。全身に走る激痛に呻きながら顔を上げれば、沸儀は胸に刺さった匕首を抜き、上衣を緩めた。

「残念だったな、貴妃よ」

匕首は確かに沸儀の体を傷つけていた。しかし、傷口は玉をわずかに逸れている。せめて玉を破壊することができれば、洪釆に勝機を与えることもできたのに。

「さらばだ」

ああ、今度こそ終わりなのだ、と黎貴妃は身を強張らせた。

だが、横合いから現れた黒い影が、沸儀と黎貴妃の間に立つ。顔は見えない。その広い背中に黎貴妃の心が震えた。

「何事ですか、陛下！」

頭上から響く声に、黎貴妃は思わず「韓将軍……」と呟いていた。なぜ、男子禁制の後宮に楊秀がいるのか。

沸儀の低い声が響く。

「何用だ？」

「……後宮に猩猩緋が現れました。ことは急を要するため、独断で兵を後宮に入れました」

「宦官はどうしている」

「一部の者を除き、各自の判断で後宮より避難した模様です。そのため、より警備が手薄となったか、と」

沸儀の目が細められた。愚かな者たちだ。騒ぎが収まれば、逃げた者たちは全員、首を刎ねられるだろう。

「陛下。黎貴妃様が罰せられる理由をお聞かせください」

「貴妃は、余に匕首を向けた。さらに、猩猩緋と関係があるらしい。だが、仮にも情を交わした女だ。せめて余の手で葬ってやろうとしたまで。そこを退け」

無情な声が響く。

「それは、真実なのですか」

楊秀の問いに、黎貴妃は体を震わせた。肯定すれば、自分は罪人として沸儀に差し出されてしまうだろう。

しかし、否定はできなかった。

真面目な楊秀のことだ、黎貴妃の処断に異を唱えるかもしれない。巻き込むわけにはいかないと、黎貴妃は決意を固めた。

「本当ですわ」

顔を見てしまったら、きっと挫けてしまう。泣いて縋ってしまう。だから、黎貴妃は俯いたまま告げた。

「しかし……！」

自分はいいのだ。この手は、私心のために殺した者たちの血で赤く汚れている。

でも、楊秀は違う。武人として人の命を奪ったことはあっても、我欲のために剣を取ったことはないだろう。

憎らしいほどに、実直な人だ。だからこそ、惹かれてしまったのかもしれない。

「陛下を殺し、行方の知れぬ太子に罪を擦りつけるつもりでした。陛下に刃を向けた時より覚悟はできております」

すぐ傍から、息を呑む音が聞こえた。最後にこうして触れあえたことが、唯一の慰めである。心残りは幼い我が子であるが、利用価値が薄れた相手をわざわざ手に掛けるほど兎天も暇ではないだろう。沸儀も博焚を敵とする以上、たとえ母親が反逆者となっても、唯一の男児である祥安に手は出し難いはず

だ。

そして、洪釆も自分が死んだとなれば、逃げてくれるかもしれない。怪我を負ってはいても、混乱に乗じて退避するくらいはできるはずだ。

「退いてください」

声に力を込め、もう一度はっきりと告げる。これ以上は、楊秀のためにならない。黎貴妃は痛みを堪えながら立ち上がった。

「願わくば、公子には慈悲を」

「よかろう」

これで懸念は消えた。

玉砂利を踏み締め、黎貴妃は楊秀の体を押し退けるように沸儀の前に進んだ。刃の届く距離で足を止める。

黎貴妃は瞼を閉じた。きっと、そう苦しまずに逝けるだろう。しかし、沸儀の喜悦を含んだ声に目を見開くことになる。

「――おもしろい。次に刃を向けるのは、お前か」

振り返れば、沸儀に剣を向ける楊秀の姿があった。その双眸には、強い光が宿っている。黎貴妃は震える唇で、「なぜ……」と呟く。

「あなたを死なせたくない」

歓喜と絶望が胸を支配する。

黎貴妃の頬を涙が伝った。

民からは稀代の悪女と、怨嗟の声で罵られ。

自らも、それに相応しい振る舞いをした。

両手は血に塗れ。

復讐だけが、生きる糧だった。

そんな女を、死なせたくない、と。

すべてを――命さえも捨て去ることを承知で、庇おうというのか。

くぐもった笑い声が聞こえた。沸儀の唇が、三日月を象ったように弧を描く。

「愚かなことだ。だが、そうだな。それが、余に刃を向ける理由となるならば、上出来だ。相手として不足はない」

沸儀の視線が、楊秀へと向けられる。極上の獲物を前にした獣の眼だ。自分に向けられたわけではないが、背筋が粟立ち肩が震えた。

「黎貴妃様。そこをお退きください」

「い、いけません！」

目の前で、楊秀が死ぬところなど見たくない。伸びてきた手に腕を摑まれ、黎貴妃は沸儀の元に引き寄せられた。

「これが欲しいか、韓楊秀。余に勝ったあかつきには、持って行くがよい」

「その言葉、忘れませんぞ」

黎貴妃は突き飛ばされ、玉砂利の上に倒れ込む。痛みを堪えながら体を起こせば、すでに戦いは始まっていた。

沸儀と楊秀の体軀は、ほぼ同等である。手の長さや胸の厚みも差はわずかしかない。ただ余裕が感じられるのは前者だ。剣と剣との激しい打ち合いに、黎貴妃は唇を震わせた。

重く鋭さを感じさせる一撃を、沸儀は片腕で簡単にいなしてしまう。無駄な動きが一切感じられない足捌きは、禁軍の将であり、気術兵でもある楊秀を相手にしているにもかかわらず乱れがなかった。

楊秀も強いが、沸儀はその一つ上を行く。

「手加減は無用だぞ、韓将軍。本気で向かってくるがいい」

「むろん、そのつもりです！」

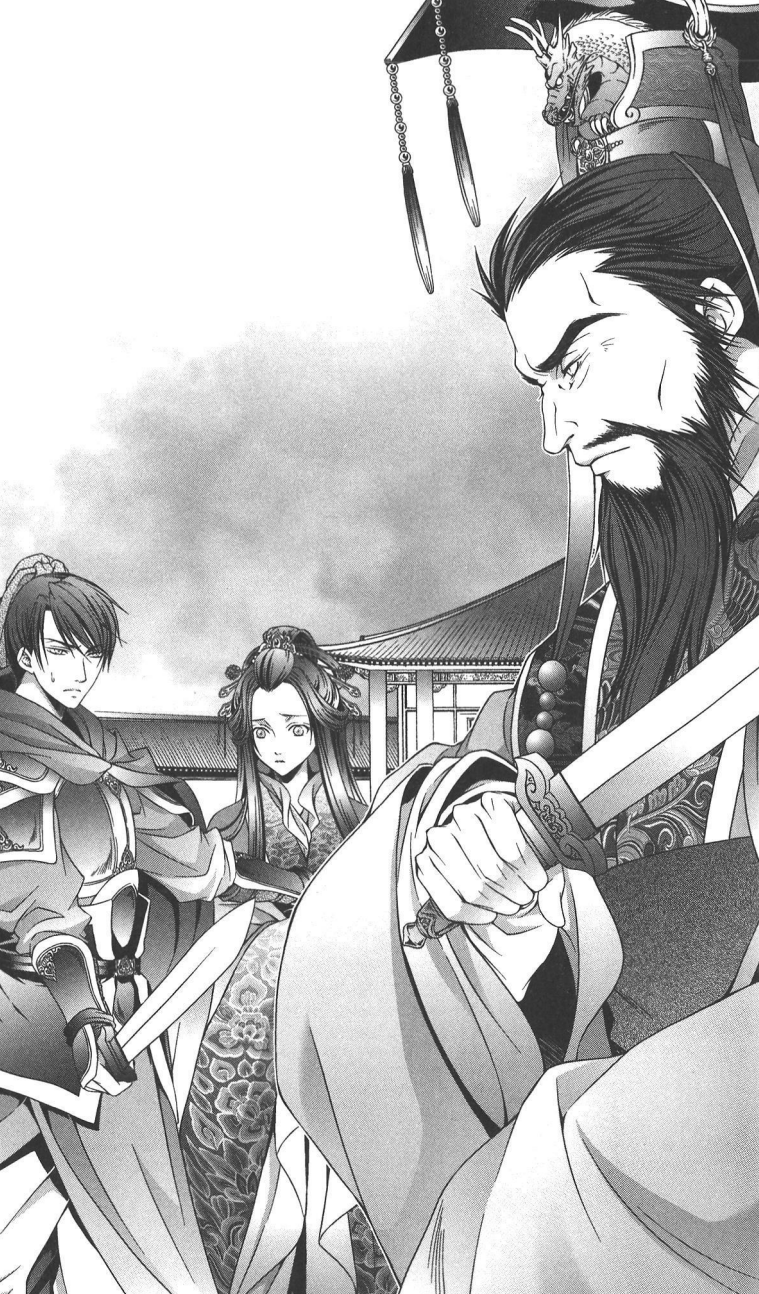
楊秀を取り巻く場の空気が変わった。重さを増した、とでも言うべきか。息苦しさに、黎貴妃はのどを押さえた。楊秀の体から、陽炎のようなものがふわりと立ち上る。

「――参ります」

剣を構えた、と思った時には、楊秀は沸儀の眼前に迫っていた。

勢いを載せた渾身の一撃には、さすがの沸儀も後退を強いられる。

楊秀を見つめる眼が、柳の葉のように細められた。



ぞっとするほど冷徹な瞳だ。だが一方では、狂喜しているようでもある。沸儀の周囲もまた、同じように空気が揺れ動く。

「よい剣だ。しかし、まだ足りぬ」

沸儀の顔に、凶悪な笑みが浮かぶ。

その眼差しが、地面に座り込んでいる黎貴妃へと向けられた。

「あれを殺せば、否応なく本気にならざるを得まい？」

「なっ！」

楊秀の顔色が変わった。

沸儀は、やると言えば躊躇なく刃を振り下ろすだろう。

「そうだ。もっと余を憎め」

――この男は、修羅だ。

争うことを糧とし、そのためならばこの世のありとあらゆるものを利用する。〝貪欲〟などという言葉では言い表せない。これは、本当に人間なのかと、疑ってしまいたくなる。

楊秀の足枷になってはいけないと、黎貴妃は距離を取ろうとした。しかし、一歩でも動けば、沸儀の刃が迫ってくるような錯覚に囚われ、ただ震えるしかできない。

自分の弱さを嘆いていると、不意に強い力に腕を掴まれた。体を持ち上げられたかと思えば、離れた場所に優しく降ろされる。

「待ってろ。絶対、兄ちゃんがなんとかしてやるからな」

頭を撫でる大きな手。昔から変わらないそれに、黎貴妃は縋りつきたい衝動に駆られた。しかし、ほのかな温かさを胸に残し、手はすぐに離れてしまう。顔を上げれば、槍を構えた洪采が楊秀と肩を並べていた。

「……まさか、あんたと共闘することになるとはね！」

「それはこっちの台詞だ！」

初めてとは思えないほど、息の合った攻撃を繰り出す二人に押され、さすがの沸儀も後退せざるを得ない。

それでも、表情は楽しげに歪められている。

「面白い」

左肩を狙った楊秀の一撃を剣で受け止め、がら空きとなった右側を狙った洪釆の攻撃を、槍の柄を摑み阻止する。

「もっと余を楽しませろ」

空気を震わせる哄笑（こうしょう）が、庭園に響き渡った。



頭が朦朧としていた。

なにもしていないのに、指先から力が抜けていくような感覚だ。春蘭は宙に漂いながら、今までのことを反芻した。

地脈を辿った先に出たのは、薄暗い室だった。痩せこけた男たちが円を描くように地面に座し、一心に呪歌を唱えていた。

集められた膨大な〝気〟は、よくもまあここまで練り上げたものだと、思わず感心してしまうほどに濃密だった。

守り神でなければ、あまりの息苦しさに、この場に近付くことさえできなかっただろう。

春蘭の体を形作る〝器〟は、じょじょに形を失いつつあった。指先からすでに光が零れるように、消滅が始まっている。そう時を待たずして、終わりが訪れるだろう。

古い記憶から新しい記憶まで、様々な光景が驚くほど色鮮やかに蘇った。

兄の顔や、母親、父親に、近所の邑人たち、なかにはおぼろげにしか思い出せない者もいたが、頭の隅に追いやっていただけで、忘れてはいなかったのだと感嘆した。

人としての最後の記憶は、雨が降っていた。輿に載せられ、人気のない路を運ばれた。崖から下に降ろされる際に、縄が体に食い込んで痛かった。

絶望に打ちひしがれていた時、兄が危険を承知で助けに来てくれた。

そういえば、邑を出た兄はどうしたのだろうか。守り神となってからは、人としての感情が希薄にな

り、縁があった者たちに意識を向けることはなくなってしまった。

やがて春蘭を知る者たちも亡くなり、気付けば長い年月が経っていた。

久方ぶりに声をかけたのが、玄楽だった。真名を奪われ、占を頼りに華安へと辿り着いた。半季にも満たない短い間だったが、春蘭はそこでたくさんの人と出会った。

結局、誰にも別れを告げることはできなかった。それだけが心残りである。

ふわり、ふわり、と春蘭は風に乗るように流れた。そして、見知った光を見つける。

楊秀がいた。洪采と、その背に庇っているのは黎貴妃か。三人の前に立つのは、沸儀だ。大量の気を身に纏い、圧倒的な力で楊秀と洪采を翻弄している。このままでは、いずれ二人は力尽きるだろう。

――助けてやりたい。

これは、〝春蘭〟としての気持ちだろうか。器が壊れたことで、人としての感情が混ざったか。風を操り、春蘭は傍に近付く。

「もうこいつ、人間じゃないだろ！」

「うるさい。さっさと手を動かせ」

洪采と楊秀が、言い合いのように言葉を交わしながら、沸儀に向かっていく。春蘭はそんな二人に目を凝らした。

洪采は左肩だけ気の巡りが滞っている。あれでは、まともな攻撃はできないだろう。

『どれ、痛みを和らげてやろう』

春蘭は己の気を集め、洪采の怪我をした肩を包み込むように覆った。今の春蘭では治癒はできないが、血を止めることや、痛みを緩和することはできる。

「な、んだ、これ……」

沸儀の一撃を、洪采は両腕で受けきった。続く攻撃を巧みに避けながらも、突如として左肩から消えた痛みに困惑しているようだ。よかった、と春蘭は安堵する。

『楊秀には、私の力をやろう』

守り神の〝神気〟は、地脈を流れる〝気〟とは質が違う。己は崩壊へ近付くことになるが、春蘭に躊躇いはなかった。

楊秀の負担にならない程度の〝気〟を、ゆっくりと胸部に埋め込まれた玉に流し込む。

「……体が！」

楊秀が驚きの声をあげた。肉体が纏う気の密度が濃さを増し、はっきりとわかるほど攻め立てる手に力が籠もる。洪采も左肩を庇った戦い方ではなく、両腕で自由自在に槍を振り回していた。

洪采にも、と思ったが、春蘭は己の力がほとんど残されていないことに気づいた。崩壊はすでに、体の半分まで及んでいる。ここでむりをすれば、一瞬にして春蘭は消えてしまうだろう。これ以上の助力は難しく、見守る以外に方法を持たない春蘭は、不安に心をざわめかせた。

二人の動きに沸儀は違和感を覚えたのか、地脈から取り込む気の量を増やす。楊秀が大胆な攻撃を加え、洪采がその隙をついて鋭い一撃を放つ。その息の合った行動には、さすがの沸儀も押されているようだ。

――だが、このままでは勝てない。

春蘭の想いが届いたように、沸儀から距離を取った二人は、素早く横目で互いを確認する。

「俺があいつの隙をつくる」

「止せ。隙をつくる前に、叩き斬られるのがおちだぞ」

「斬られても、隙がつくれれば問題ないさ」

不敵な笑みを浮かべた洪采は、槍を頭上で一閃させると、剣を構える沸儀に向かって突進した。相手の間合いには入らず、槍の長さを生かし牽制する。その間、楊秀は動かない。

「小賢しい」

沸儀は呟いたと同時に、踏み出した足に上半身を載せ、洪采を強引に己の間合いに納める。頬を洪采

の穂先が掠め、左耳を貫いた。
しかし、沸儀は顔色一つ変えずに、洪采の頭上目掛けて剣を振り下ろす。洪采はとっさに柄の部分で受け止めるが、体勢が不十分だった。剣を受けた部分から、槍が真っ二つに折れてしまう。
「ぐっ……！」
それを見た楊秀が、とっさに動こうとした時だった。
洪采は沸儀が体勢を整える前に、二つに折れた槍の穂先を地面に突き刺し沸儀の袍を縫い止める。それはわずかな間ではあったが、沸儀の動きを止めるには充分なものであった。
「今だ！」
洪采の合図よりも先に、楊秀は飛び出していた。身動きの取れない相手に、横合いから容赦ない一撃を浴びせかける。
だが、沸儀は避けなかった。
迫り来る刃を、己の右腕で受ける。剣が肉にめり込むが、それは切断まではいかずに骨の部分で止まった。
「馬鹿っ、手を放せ！」
洪采の叫びが響く。剣を抜こうとする楊秀だったが、深く食い込んでいるせいか引くことも押すこともできない。
「これで終いだ」
沸儀ががら空きとなった楊秀の懐に、剣を突き刺した。鎧甲を貫通し、鮮血が溢れる。楊秀はその場に力なく崩れ落ちた。黎貴妃の悲痛な叫びが木霊した。
「韓将軍！」
「とどめだ」
楊秀の頭部目掛けて振り下ろされた剣を、既のところで洪采が短剣で弾く。しかし、己は避けきれずに、怪我を負っていた左肩を切り裂かれる結果となった。
春蘭はとっさに、出血を抑えるために力を行使す

る。だが、楊秀と洪采は地面に蹲ったままぴくりともしない。全身に纏った〝気〟は乱れてはいるものの、消える気配がないことから、二人がまだ生きているとわかる。

もう一度、と春蘭は力を送り込もうとした。そこに沸儀の訝しむ声が響く。

「なにかあるな？」

その眼は、春蘭を捕らえていた。仲望のような体質でもない限り、肉体を持たない守り神を視認することはできない。

にもかかわらず、春蘭を見つめる眼差しには確信が滲んでいた。

「気の流れが異質だ」

春蘭はこの男が、宴で己の占を見破ったことを思い出した。気を視られるわけではないが、流れを感じることはできるのだ、と。

「面白い」と呟いた沸儀は、春蘭に向けて手を伸ばした。その途端、引き込まれるような感覚に春蘭は困惑する。

力を与えているわけではない。それでも、沸儀の玉に吸い込まれてしまいそうな錯覚を受ける。崩壊の進行が速まった。沸儀は地脈から気を得るように、春蘭の力を奪っているのだ。

「ほう。この力はなにかが違うな」

逃げなければ、と思うが動くことはできない。このままでは、沸儀に吸収され、〝春蘭〟は時を待たずして消えてしまうだろう。

諦観の念が胸裏を過った。

どうせ、己は時を待たずして消えてしまう。ここで沸儀に吸収されたところで、それが少しだけ早まったにすぎない。

ただ、楊秀たちだけは、どうにかして逃がしてやりたかった。彼らはまだ生きている。春蘭と違って、生きることができる。

『せめて、玉を』

――壊すことができるなら。

途切れそうになる意識を、春蘭は必死で繋いだ。そして、逆に玉へと力を込める。楊秀に力を分け与えた際とは違い、残っていたすべての気を一度に注ぎ込む。

「なんだ、これは……？」

異変を感じた沸儀が、春蘭から離れようと身を退ける。

逃がさない。

この男の狂気は、人々を苦しめる。

〝――それは、今を生きる者たちが受けなければならない痛みだ〟と、仲望は言った。

しかしこの男の狂気のせいで誰かが傷つくというなら、自分は何度でも命を張る。大切な人たちには、幸せであってもらいたい。

押し込もうとする春蘭と、撥ね除けようとする沸儀の根比べが続くかと思ったさなか、沸儀目掛けて躍り掛かる影があった。

「久し振りですね、陛下！」

掛け声と共に振り下ろされた一撃を、沸儀は危なげなく防ぐ。

奇襲だったにもかかわらず冷静に対処する相手に、それを仕掛けた玄楽は舌打ちした。その姿を一瞥した沸儀は、わずかに双眸を瞠った。

「ほう、その髪は鄭家の……生きていたか」

「地獄の淵から戻って来たんですよ！」

玄楽は胸部の玉を狙うように、鋭い攻めを繰り返す。

気術を使った容赦のない攻撃は、怪我を負っている沸儀を押していた。それを見た春蘭も、玉に注ぎ込む力を強める。

「む……」

再び違和感を覚えたのだろう。玄楽の剣を受け止めながら、沸儀は顔を顰めた。

「よそ見していいんですか？」

挑発するような口調に、沸儀の意識が玄楽へと戻される。だが、全身に纏う〝気〟は春蘭の介入を受

け、不安定な動きを見せていた。

『あと、少し……』

玉が神気に耐えきれず、震え始めている。だが、足りない。ありったけの気を注いでも、あと少しだけ。

沸儀の容赦ない一撃が、玄楽の利き腕を裂く。鮮血が白い玉砂利を赤く染め、玄楽が痛みに呻き声を漏らした。

「先ほどまでの威勢はどうした？」

剣を持ち替えた玄楽に、沸儀はここぞとばかりに激しく打ち据える。玉の異変よりも、目の前の敵を優先したのだろう。その動きに澱みはない。

「これで終いだ」

剣ごと玄楽を叩き斬ろうとでもいうように、沸儀が頭上に腕を振り上げた時だった。玄楽が会心の笑みを浮かべる。

「あんたの負けだ」

一本の矢が、空を切り裂いた。

そして、吸い込まれるように沸儀の胸――玉へと突き刺さる。ぱき、と小さな音を立て、玉に亀裂が入る。

刹那、春蘭の込めた神気が、玉から一斉に溢れ出した。〝気〟の残滓が、宙に溶けていく。罅は瞬く間に広がり、矢が地面に落ちると同時に玉が粉々に砕け散った。

「ぐぅ……！」

その隙を逃さず、玄楽は剣を弾き飛ばす。沸儀は顔を歪ませ後退ろうとするが、油断なく剣を構える玄楽の前で、制御の効かない力に意識を奪われ、呻き声をあげながらその場に昏倒した。

一度、足掻くように体を起こすが、やがて力尽きたように倒れ伏す。

「春蘭！」

もう二度と、聞くことのないと思っていた声が響く。ゆっくりと意識を向ければ、弓をかなぐり捨てて走り寄る仲望の姿があった。

それに、春蘭は胸中で嘆息する。

気を視ることができるからこそ、仲望が絶対に来られない後宮を、最期の場所にと選んだつもりだったのに。目の前で消えるなど、辛い光景を見せたくはなかったのに。

だが、伸ばされた手が春蘭に触れることはなかった。牽制するように投擲された匕首が、仲望の足下に突き刺さる。見れば、玄楽の足下にも同じように匕首が刺さっていた。

音もなく現れたのは、腕に赤子を抱いた黒衣の男だった。

顔の半分には醜い焼け跡が残り、窪んだ眼窩が凄味を増している。男を見た玄楽は顔を顰め、黎貴妃が青ざめた表情で「兎天……なぜ、祥安を」と呟いた。

「上出来ですよ、梁華。あなたが殺される瞬間を狙って攻撃するつもりでしたが、まさかこんな結末になろうとは」

兎天は立ち止まると、小さな瓶を黎貴妃に向かって投げた。とっさにそれを受け取った黎貴妃は、美しい顔に困惑の色を浮かべる。

「おい、兎天。これはどういうことだ？」

唸るような玄楽の声に、兎天は首を傾げた。

「あなたこそ、なぜここにいるのです。太子のことは任せろというから、私はしかたなく手を引いたのですよ？」

「太子は無事だ。呪いも消えた」

「それはよかった」

兎天は眼を細め、引き攣ったような笑みを浮かべる。そして、視線を黎貴妃へと戻した。そのか細い肩が、怯えたように戦慄く。

「梁華。あなたへの最後の任務です。それを飲みなさい」

「これは……」

「即効性の毒です」

黎貴妃が驚いたように息をつめる。毒を持つ手が、

微かに震えていた。

「子供のことは心配ありません。すぐにあなたの元へと送ってあげますよ」

「そんなっ、約束が違う！」

「化け物の子など、生きている方が不憫ではありませんか。感情が芽生える前に、葬ってしまった方が本人のためですよ」

祥安は薬で眠らされているのか、母親の悲痛な声を聞いても、ぴくりとも動こうとしない。黎貴妃は挑むように兎天を睨みつけた。

「それでも、祥安は私の子です。不憫かどうかは、あなたに決められるものではありません。その子が判断すべきことです」

化け物の子、と言われても、黎貴妃の顔に一切の迷いは見られなかった。それを、兎天は醒めた瞳で一笑する。

「ならば、余計にこの子の命が惜しいはず。あなたが化け物の子を産んだと認め、自害するのであれば、見逃してもいいでしょう。公子でさえなければ、火種にはなりませんからね」

「兎天。俺はなにも聞いてねぇぞ。なぜ、梁華が生きている」

険しい表情を浮かべる玄楽に、兎天は冷めた視線を向ける。

「教えたら、私の計画に反対したでしょう？　すべては民のためですよ。ここで公子派の筆頭である黎貴妃が倒れ、公子が行方知れずとなれば、博焚様の地位は盤石のものとなります」

だから、と兎天は黎貴妃に顔を向けた。その瞳は、早く毒を呷れと促しているように見える。黎貴妃は瓶を持つ手を震わせた。

「本当に、祥安を助けて……」

「もちろんです。私の目的は、この男への復讐ですから。力を封じ、権力を剝奪し、自由を奪う。己の我欲のためだけに生きてきたこの男にとって、それは最大の屈辱でしょうね」

兎天の眼は妖しい光を湛え、恍惚（こうこつ）とした表情で告げる。

描いてきた復讐が成就されたことで、舌が滑らかになっているのだろう。

「この男とは対極にある博焚様が、この男が壊した世界に平和をもたらす。それを、命が尽きるまで眺めていればいい。檻の中でね」

復讐のために殺すのではなく、復讐のために生かす――歪んでしまった心に、春蘭は兎天の恨みの深さを見た気がした。

「さあ、梁華」

兎天が甘い声で囁く。黎貴妃は震える手で瓶の栓を抜いた。

ひと思いに呷ろうとした時、くぐもった呻き声と、なにかが地面に落ちて割れる音が響いた。

「な、ぜ……」

兎天の胸から、槍の穂先が突き出ていた。崩れ落ちた背後にいたのは、洪采である。片手には、祥安が抱かれていた。

「なぜ、だって？　自分の胸に手を当てて訊いてみるんだな」

そして、もう一人。

黎貴妃は茫然としながら、割れた瓶を見つめていた。傍には、その華奢な体を掻き抱く楊秀の姿がある。

「なぜ、止めるのです。私は、死ぬべき、だったのに……」

黎貴妃ののどから嗚咽が漏れた。罪深い女なのにと、震える声で告げる。だが、楊秀は自嘲するように笑んで、首を振った。

「あなたが罪深いのならば、私も同じでしょう」

「違う。違います」

「いいえ、違わない。韓家の当主である私が陛下に刃を向けた瞬間、我が一族は罪人となります。一族郎等に至るまで、斬首（ざんしゅ）されてもおかしくはない。私はそれをわかっていて、あなたを選んだ」

楊秀は黎貴妃の艶やかな髪を、労るように撫でた。
「どうか、私と共に生きてください」
黎貴妃は迷うように洪釆を見た。固い表情を妹に向けた洪釆は、一拍の間を置いて、深い溜息をついた。
「――梁華は死んだ。黎貴妃なんて女も知らない」
それは、兄として精一杯の優しさだった。黎貴妃の腕に祥安を押し込むと、左肩を庇いながら洪釆は立ち上がった。
「守ってやれなくて、すまん。助けに行けなくて、すまん。なにも知らなくて、すまん――でも、俺はお前が生きているって知って、嬉しかった」
「兄さん……」
ふらついた体を支えたのは、玄楽である。黎貴妃を一瞥するが、すぐに洪釆へと視線を戻す。
「あいつらは撤収を始めた。そろそろ合流しないと、取り残されることになるぞ」
「腕は大丈夫ですか？」
「馬鹿。お前の怪我に比べれば、どうってことはねぇよ」
確かに、玄楽の傷は派手だが、満身創痍なのは洪釆の方だ。
春蘭が力を分け与えはしたが、傷が治るわけではない。じっとしているだけでも、かなりの痛みがあるだろう。
「お前の幸せを祈ってるよ」と、笑って洪釆は玄楽と共に姿を消した。去り際に、親の仇でも見るような眼で楊秀を睨みつけて。
玄楽はなにか言いたそうに仲望を見たが、結局なにも告げることなく立ち去った。どんな言葉も、今の仲望には慰めにならないと思ったのだろう。
「楊秀」
静けさが戻った中庭で、仲望の呼びかけに、楊秀は弾かれるように顔を上げた。そこには、苦渋の色が浮かんでいる。
楊秀にとっても、悩み抜いた末の決断だったはず

だ。

「仲望、私は……」

「以前、俺に提案した計画通りに行動すればいい」

「あれは、お前と春蘭のために」

「俺はもう必要なくなったんだ」

寂しげに、仲望は呟いた。その視線は楊秀ではなく、春蘭に向けられている。

「陛下が力を失ったとわかれば、花中書令が動く。公子派の面々も、黎貴妃と公子が姿を消したと知れば、保身のために太子派に寝返るだろう。お前が陛下に刃を向けたことも、うやむやになるはずだ」

陛下に逆らったのは俺も同じようなものだからな、と言って仲望は苦笑した。そして、楊秀の腕の中で涙を零す黎貴妃に眼を留める。

「死を選ぶことが、必ずしも贖罪に繋がるとは思わない。あなたが奪った命もあったが、あなたが与えた命もあったはずだ」

諭すような声に、黎貴妃は顔を歪めた。

「私は、生きても、いいの、です、か」

「わからない。きっと、あなたの手で命を絶たれた者たちは、あなたを深く恨んでいることだろう。でも、あなたの隣にいる男だけは、生きて欲しいと願ってる」

それだけは確かだ、と仲望は告げた。そして、楊秀の肩を促すように叩いた。

「そろそろ行った方がいい。騒ぎに乗じれば、宮中から出られるはずだ」

「すまない」

「礼は、無事に逃げ延びてからでいい」

楊秀は決意を滲ませた瞳で頷くと、黎貴妃と祥安を連れ足早に去って行った。

それを見届けた仲望が、ゆっくりとした足取りで春蘭に近付いてくる。

「……太子は無事だ。体を覆っていた黒い気も、きれいに消えた」

仲望が伸ばした両手は、春蘭の体をすり抜ける。

それでも、抱き締められている気持ちになるから不思議だ。

「守ると決めたのに、この様だ」

そんなことはない、と言いたかったが、春蘭には言葉を伝える余力すら残されていなかった。胸から下はすでに霧散し、全身を覆っていた光もじょじょに薄れ始めている。

三百年前、死を覚悟した春蘭の前に現れたのは、邑を護っていた守り神だった。

命の終わりを間近に迎えた守り神に替わり、春蘭はその役目を引き継いだ。人としては珍しく、守り神となる素質を担っていたからこそできたことだ。占の卦に、春蘭を生け贄とするように出た理由は、そこにあった。そして、春蘭は守り神として邑を護っていた。

「頼むから、消えてくれるな……！」

仲望の声に、春蘭は深い悲しみを覚えた。

生きたかった。

死ぬなと悲痛な声をあげるこの男の隣で、生きていたかった。

ゆっくりと、意識が溶けるように沈んでいく。仲望の姿がおぼろげになり、やがて視界が真っ白に染まった。

だが、その直後、強烈な光が薄れゆく春蘭の意識を繋ぎ止めた。

『――間に合ったようだな』

意識を取り戻した春蘭が見たのは、龍天山（りゅうてんざん）で助けた華安の守り神である龍の姿であった。

白銀の鱗（うろこ）を輝かせ、労るような眼差しを春蘭に注ぐ。本来の力を取り戻しつつあるのか、呪によって封印されていた時よりも、全身から放たれる〝神気〟は輝きを放っていた。

その背から、地脈に潜った際、これからは好きに生きよと、別れを告げた白桃（はくとう）が飛び降りる。

『そなたを助けて欲しいと、哀願されてな。そなたには呪術から救ってもらった恩がある。力となろ

う』

「バウゥ！」

白桃がひときわ大きな声で吼えると、不安げに仲望の周りをうろうろと歩き回る。

『しかし、これはずいぶんと酷い。すぐにでも消えてしまいそうだ』

「春蘭を助けることができるのですか！」

『ふむ。人の子よ。そなたは、私が視えるのか』

仲望が微かに頷いた。珍しいこともあるものだ、と龍神は眼を細めた。

『守り神として、生き延びることはできぬ。すでに真名は器と共に失われた。だが、人として生き延びる手はある』

「いったい、どうすれば」

『器の代わりとなるものが必要だ。それがなければ、たとえ人の姿に戻ったとしても、魂は形を維持できぬまま消えてなくなるだろう』

「器……」

龍神は仲望の右目を示した。仲望が釣られるように、己の目に触れる。

『気を集めることのできるそなたの瞳ならば、器の代わりとなるやもしれぬ』

「ならば、これを」

声が出るならば、叱り飛ばしていただろう。躊躇する素振りもなく己の右目を抉り出した仲望は、龍神にそれを掲げてみせる。大量の血が頬を伝い、官服を汚した。

「これで、いい、だろうか？」

『無謀な男だ。だが、その覚悟は気に入った』

わずかに呆れたような気配が伝わってくる。この守り神は、感情が豊かなようだ。

ぼんやりとしていれば、龍神の神気が春蘭を包み込む。心地よさに身を任せていると、龍神の声が響いた。

『意識はあるな？　私が力を貸そう。これがそなたの新しい器となる。気を馴染ませたら、人の姿に戻

るがよい』

仲望の眼は、玉と化していた。龍神がゆっくりと、今にも崩れそうな春蘭の魂を、己の力で支えながら新たな器へと導く。

春蘭は促されるまま、意識を仲望の手のひらに載る玉へと向けた。己の周囲を包む膜のような存在をはっきりと知覚すると、再び朗々とした龍神の声が響く。

『どうやら、上手い具合に馴染んだようだな。ああ、眠りについてはならん。辛いだろうが、人の姿に戻るよう念じるのだ。必要ならば、私の力を利用するといい』

微睡みそうになる意識を、春蘭は必死に繋いだ。そして、龍神の力を借りながら肉体を呼び戻す。周囲を包み込んでいた淡い光がじょじょに薄れ、春蘭はそっと瞼を開き――。

「……っ、この馬鹿者が！」

視界に映った男を叱り飛ばした。飛び起きるように体を起こすと、袖を破いて、仲望の右目に押し当てる。見る見る間に生地が赤く染まり、春蘭は奥歯を噛み締めた。

だが、仲望は構うことなく、春蘭を壊れ物を扱うような手付きで抱き締めてきた。その手が肩や腰に触れ、本物だとわかるなり回された腕に力が籠もった。

「生きてる……」

「当たり前だ」

「……もう二度と、会えない、かと」

背に回された腕が微かに震えていた。春蘭も同じだ。二度と、会うことはないと覚悟を決めた。それが、こんな形で呼び戻されるとは。

「仲望、見ろ」

春蘭は上衣の襟を緩めた。

ちょうど心臓に当たる部分に、白い玉のようなものが浮かび出ている。

「これは」

「気術兵ではないが、似たようなものだ」
「もしかして、これが壊れたら……」
「死ぬだろうな。あくまでも本来の器ではないものを代用としたのだ、この程度の弊害はしかたのないことだ」
　顔を引き攣らせる仲望を他所に、白桃が空に向かってひときわ大きく吼えた。守り神の力を失ってしまったため姿を見ることは叶わないが、役目を終えた龍神は龍天山に戻って行ったのだろう。
　邑を守れなくなってしまった、という後悔の念はある。だが、あそこで翰栄を見捨ててしまえば、世の荒廃が、やがて春蘭が守護する邑をも呑み込んだ。形は違えども、春蘭は邑を守ったのだ。
　礼を言い終えたのか、白桃は春蘭の元へと走り寄ると、興奮するように周囲を飛び跳ね出した。
「ぬしにも心配をかけたな、白桃」
「ウォン」
　尻尾を振りたくっていた白桃は、ふとなにかに気付いたのか、首を巡らせると、春蘭の裾を噛み引き摺り始めた。
「む。誰かくるのか。それはまずいな」
「……急ごう」
「こっちだ。まさか、こんな風に退路を使うことになろうとはな」
　玄楽への備えだったが、寝る間を惜しんで駆け回ったことは無駄ではなかったらしい。仲望と春蘭を背に乗せた白桃は、指示に従って回廊を走る。春蘭はその途中、顔を背後に向けた。
「さっさと帰るぞ。啓璋や友寧が待つ、鄭家に」
「きっと、たくさんの小言が待ってるぞ」
「望むところだ」
　春蘭は不敵に微笑んだ。

猩猩緋による襲撃があった、その三日後。
太子博焚の命により、皇帝沸儀が捕縛された。帝

位の簒奪である。しかし、官吏たちの大半が、博焚を支持した。沸儀の暴虐振りは、誰の目から見ても明らかなものであった。

猩猩緋の手に掛かり玉を破壊された沸儀は、気の暴走を受け、二度と剣の持てぬ体となった。半年後、華安より離れた離宮に幽閉。寵臣であった管招達（かんしょうたつ）は、自害。

そして、公子祥安と黎貴妃は混乱のさなか、母子ともに命を落としたと伝えられている――。



古めかしい門前に立つのは、十六、七の少女だ。すらりと伸びた背に反し、整った容貌にはまだあどけなさが残っている。

空を仰げば雲ひとつない晴天が広がり、春蘭は朝からの強い日差しに眩しげに目を細めた。今日は暑くなりそうだ。

「旅立ちにはよい日だな」

早朝ということもあり、門前を行き交う人の姿はまばらだ。華安ともしばらくはお別れかと思うと、寂しさが胸を過る。

五年という歳月が経てば、愛着が湧くというものだ。門に寄り掛かりながら、春蘭は己の格好を見下ろした。馬での旅なので、男物の旅装を着用している。髪は簡素に結い上げ、巾でくるんでいた。

蠍や蛇の侵入を防ぐために、袖や裾の部分は細く絞られ、万が一の備えとして胸当てもつけている。さすがに剣は持たせてもらえなかったが、護身用に短刀を懐に忍ばせておいた。

「おい、春蘭。ぼんやりしてる暇があったら、旦那様の支度を手伝って来いよ」

振り向けば、旅装に着替えた青年が門前に馬を繋いでいるところだった。背が高く、気の強そうな顔立ちをしているが、馬の鬣を撫でる手付きは驚くほど優しい。

「こらっ、啓璋！　なんて口きいてるの！」

奥から荷物を抱えて出てきたのは、友寧だった。啓璋よりも背は低いが、引き締まった体は同年代の若者たちと比べるとがっしりとしている。柔和な顔つきは相変わらずだが、今はこれでもかというほど

眉を吊り上げていた。
「はいはい。人前に出たら、ちゃんとすればいいんだろ」
聞き飽きた、とばかりに啓璋は適当に友寧をあしらう。一方、友寧は不真面目な同僚の態度に声を荒らげた。
「そういう問題じゃないよ！」
「怒鳴るなって。近所迷惑だろ」
「誰のせいだと思ってっ。言うことをきかないと、白雪をけしかけるからね！」
「はぁ？」
それは反則だ、と啓璋は顔を青くして訴えた。五年経っても、苦手なものはそのままらしい。そんな二人を尻目に、口で荷物を咥えた白桃が春蘭に歩み寄ってきた。
「ああ、ぬしも手伝いをしていたのか」
「バウッ！」
これが最後の荷物だからと、白桃はそれを地面に置くと玉の中へと戻ってしまった。
春蘭が守り神ではなくなってしまったにもかかわらず、白桃と白雪は傍を離れることはなかった。華安の龍神に預ける案も考えたが、一頭と一匹に頑なに拒まれ今に至る。
「しかし、時が経つのも早いな……」
春蘭が鄭家に戻って、はや五年。思い返せば、様々なことがあった。
朝廷では、帝位に就いた翰栄が、山積みとなっていた問題を次々と解決し、今では西の辺境や、小競り合いの絶えなかった地方も、だいぶ落ち着きを取り戻したと聞く。西に向かう商人たちの数も増えたらしい。
義賊と謳われた猩猩緋は、未だ地方に潜伏しているとも、五年前に消滅したとも言われている。ただ、彼らが再び世に出ることは一度としてなかった。陰で翰栄の手足となって働いているのではないか、というのが春蘭の推測だ。

太子派の筆頭であった興奏は、あっさりと引退した。姪である翠蓮を後宮に入れた直後より体調を崩し、出仕もままならない状態が続いたから、というのが表向きの理由である。

太子派と公子派が対立している時から体調が心配されていただけに、官吏たちは疑問を抱かずにそれを受け入れたそうだ。

しかし、内状は、興奏に権力が集中しやすい構造になったため、というのが直接の理由である。太子派の筆頭であり、中令省の最高責任者、そして四夫人の座にある翠蓮が男児を身籠もれば、外戚としての権力も手にすることになる。

五大夫の例もあるため、一箇所に権力が集中することはよくないと、興奏自らが申し出た結果である。もっとも、翰栄が暗にそう仕向けたと考えることもできるが。

一方、後宮に入った姉に対し、妹の玉翠は、避難した先の商家で出会った青年と恋仲になり、興奏の反対を押し退け駆け落ちした。

今は夫婦で行商を営み、各地を回っている。たまに届けられる文からは、幸せに暮らしていることが窺い知れた。

黎貴妃と共に姿を消した楊秀は、五年前の襲撃で命を落としたことになっている。韓家よりも、愛する女を選んだことに対するけじめなのだろう。彼らの消息はようとして知れないが、華国のどこかで今度こそ平穏に暮らしているはずだ。

春蘭が占師として世話になった黄海楼は、今では五年前よりも、有名な妓楼として花街で名を馳せている。

驚いたのは、妓楼で下男として働いている徐守真と妓女である呂紅燕がいつの間にか約束を交わす仲となっていたことだ。紅燕の年季があけるのを待って、所帯を持つのだという。

春蘭の友人だった祥琳は黄海楼一の名妓となり、ますます芸に磨きをかけている。月儀や蒼羽、蘇啓

も変わらずだ。

子慮は龍乎の隊長として人々に慕われながらも、騒ぎを起こしては文重たちを困らせている。冬雁のことも未だ諦めていないのか、妻を娶る気はさらさらないようだ。

そして、仲望は——春蘭を盾に、翰栄に口説き落とされ、側近として仕える羽目になった。啓璋と友寧は仲望の出世を純粋に喜び、本人は未だに夜逃げを本気で検討し続けている。

「馬の準備はできたぞ。しかし、本当にいいのか？なんなら商家に頼んで、荷馬車を一つ都合つけてくるけど」

「問題ない。いざとなれば、白桃の背に乗るから大丈夫だ」

「いや、大丈夫じゃねぇよ」

問題大ありじゃねぇか、と啓璋は肩を落とす。そうこうしている間に、旅装を整えた仲望が姿を現した。

切れ長の瞳に疲れを滲ませ、片足を引き摺るようにして歩く姿は相変わらず億劫げである。五年という歳月は、見た目に少年たちほどの変化を与えなかったが、それでも、貫禄がついたと思うのは贔屓目だろうか。

「もう、啓璋ってばいい加減に、春蘭様に対して言葉遣いを改めなよ」

「いや、私は気にしていないぞ。それに、ぬしらに〝様〟づけで呼ばれるのは慣れん。できれば、今までと同じように呼んでもらえればありがたいのだが……」

「慣れてください。あなたは鄭家の奥方になったんですから」

有無を言わせぬ友寧の口調に、春蘭は助けを求めて仲望を見上げる。昔は首が痛くなるほどの差があったのに、今は視線が肩に届くまでとなった。五年の間に、もっとも成長したのは他ならぬ春蘭自身だろう。



「あー、まあ、あっちでは使用人も増えるから。慣れないと、ね」

宥めるように頭を撫でられ、春蘭は己の不利を悟った。最近まで平然と会話していた相手に、いきなり敬語を使われるというのは、どうしても違和感が拭えない。

啓璋は今までとさほど変わらないが、真面目な友寧は、周囲の目がなくても春蘭を奥方扱いするようになってしまった。

「使えぬ奴め。ほら、準備ができたらさっさと行くぞ。〝治水〟とやらを始めるのだろう」

守り神としての力を失った春蘭が、毎日のように雨を気にしていた時、治水工事を提案したのは翰栄だった。

国を挙げての一大事業となるが、華国が抱える職業難の解決にもなり、無事に完成すれば、洪水で苦しむ民を救えるのだという。これは翰栄が太子の時から考えていたもので、後宮の縮小や、宮中の金の流れを見直し、ようやく実現の目処が立ったのだということだった。そして、その責任者の一人として抜擢されたのが仲望だ。

計画を立案するだけで、五年という歳月がかかった。むろん、物資の調達や人足の雇用など、やるべきことはまだまだ山積みだ。この件では、かなりの人数の官吏が、治水工事のために割かれることとなった。

「わっ、待って。留守の間、屋敷を見てくれるお隣さんに挨拶してきちゃうから！」

「おーい、友寧。お前も敬語が抜けてるぞー。だめだろ」

揚げ足を取ったとばかりに、啓璋が意地の悪い笑みを浮かべる。

「啓璋ほどじゃないからいいんだよ！」

ほら行くよ、と友寧は啓璋を引っ張って行ってしまった。

「旦那様は行かなくてもいいのか？」

「俺は形式張った挨拶を、ご当主相手にちゃんと済ませておいたから。友寧たちは、家僕の者たちに挨拶に行ったんだよ」

そうか、と春蘭が頷いていると、仲望は困った様子で頬を掻いた。どこか戸惑っている風にも見える。

「……春蘭の気持ちが少しわかった」

「うむ？」

「慣れない呼称は、使うもんじゃないな。聞いているこっちが、気恥ずかしくなった」

春蘭が鄭家に嫁いだのは、春先のことだった。治水の件で、異動の辞令が出た。華安を離れることになるから、一緒に来てほしい――妻として、と仲望に告げられたのだ。

宴は内輪だけで行われた。忍びで翰栄や、翠蓮が顔を出すという思わぬ出来事はあったが、春蘭はその夜から、鄭家の〝居候〟ではなく、〝嫁〟となった。

唯一、ずっと仲望の嫁になれと言い続けていた楊秀に、報告できないことだけが心残りではあったが。

「旦那様」

試しにもう一度呼んで見れば、確かに仲望の目が不自然に泳いでいる。照れるにしても、もう少しわかりやすい反応をすればいいものを、と春蘭は呆れてしまった。

「ぬしこそ、啓璋と友寧には昔から呼ばれているのだから、今更ではないか」

「あの二人には、ね」

「まあ、私も仲望と呼ぶ方が楽だがな」

友寧に聞かれると睨まれるんだ、と告げれば苦笑が返ってきた。

「さて、そろそろ馬に乗っておくか」

門前には三頭の馬が繋がれている。旅のために、購入したものだ。春蘭が仲望に手伝ってもらいながら馬上に登ると、眼前にはいつもとは違う景色が広がっていた。

視線が高いというのも、不思議な感覚だ。後ろに重みが掛かったかと思うと、仲望が春蘭を抱え込む

ようにして鞍に跨がる。

密着することに慣れたつもりではいたのだが、夫婦となった今は、なぜか妙に気恥ずかしさを感じてしまう。居心地の悪さを紛らわすために春蘭は口を開いた。

「……そういえば、旅の途中で私の邑にも寄るのだろう？」

「ああ。春蘭がずっと守ってきた邑を、この目で見ておきたいからね」

「私もだ。あそこには、もう崩れてしまっているが、父と母の墓がある。社の傍に小屋を建て、そこでずっと私を守ってくれていた」

会えるかどうかはわからないが、あそこには先代の守り神も眠っている。二度と起きることのない眠りだ。白桃も喜ぶだろう。

「そうか……それはぜひ、挨拶しなければならないな」

騒がしい声が響いたと思うと、啓璋と友寧が言い合いをしながら戻ってきた。春蘭と仲望の姿を見ると、二人は大慌てで鐙に足をかける。

「真名を取り戻せなかったことを、後悔してるかい？」

仲望の問いに、春蘭は瞼を伏せた。華安へ来た目的は、奪われた真名を取り戻すことだ。結局、その望みは叶わず、春蘭は守り神としての力を失ってしまった。

幸いにも邑が洪水の被害にあったという話は聞こえてこない。だが、治水工事が完成するまでには長い年月がかかる。この先も邑が無事だという確証はない。

それでも、これが春蘭の選んだ〝未来〟なのだ。

「ぬしは未だにそんなことを気にしていたのか？」

「いや、まあ……」

「邑を守るという先代の守り神の遺志を、最後まで貫けなかったことに対する後悔はある。だが、守り神の力は失ったが、代わりに〝今〟がある」

三百年前、春蘭は死を覚悟した。生きたいと願いながらも、死を選ばなければならなかった。それでも、悠遠の時を経た今、自分は〝春蘭〟として生きている。

「それに、治水工事に携わるぬしを手伝うことで、私も微力ながら邑を守れるではないか」

「そうか……」

振り向けば、仲望は優しげな笑みを湛えていた。

「では、行くか」

仲望はゆっくりと馬を走らせた。

春蘭は馬上から、朝日に照らされる町並みを眺める。

大路へと出れば、すでに齷齪（あくせく）と働き始めている人々の姿が見えた。店頭に品物を並べる者もいれば、暑さを凌ぐために打ち水をする者もいる。馬に気付いた者たちは慌てたように脇に寄り、滲んだ汗を短服の袖で拭いていた。

誰もが、笑みを浮かべているわけではない。中には声を荒らげる者や、浮かぬ足取りで荷物を肩にかける者もいる。

だが、その変哲のない平穏な日常こそが、なによりも掛け替えのないものなのだと、春蘭は知っていた。

「今日は暑くなりそうだな」

生きたいと心から願った世界は、どこまでも美しかった。

華国神記　了

あとがき

人と人とが繋がり、造られていく世界。それを、春蘭を中心とした、様々な人物の視点で語り、ここに一つの終わりを迎えました。

世界は、目に見える繋がりよりも、見えない繋がりによって成り立っている気がします。春蘭の〝世界〟は、生前も、守り神となってからも小さな邑だけでした。目に見える繋がりで造られた世界です。でも、人として暮らすうちに、様々な人と知り合い、その人物が自分の知らない誰かと繋がっていることを知ります。それが本当の〝世界〟なのだと。

春蘭が華安にやってきた直後に真実を突きつけられたら、結果は変わらなかったとしても、玄楽を――人間を恨んだことでしょう。そうならなかったのは、春蘭が自分も知らない間に、繋がりの輪の一部となっていたからです。一巻から最終巻までを通し、少しでも春蘭に共感していただけたのならば幸いです。ニート一直線だった仲望も、最後の最後でようやく男気を見せてくれました。四年間のぐうたら生活とはおさらばです（笑）。

構想自体は「魂葬屋奇談」を書くあたりから考えていたのですが、いざ執筆するぞという段階で、外枠の世界観だけを残し、中身はがらりと変わった物語へと成長しました。春蘭も当初は十代後半の女性で、仲望はその相方という役回り。なにも変わらなかったのは、洪采と梁華、

兎天の三人だけです。執筆途中で新しく生まれた登場人物もいれば、名前や外見、生い立ちまで考えたのに本編に出ることなく終わってしまった人物もいました。最初のプロットを見返すと、あまりの違いに思わず笑ってしまうほどです。

でも、最後のシーンだけは――春蘭と仲望の決断だけは変わりませんでした。

「華国神記」シリーズに携わってくださった方々に心からお礼を申し上げます。たくさんの方に支えられ、ようやく終幕を迎えることができました。小説家も、目に見えない繋がりの部分がとても大きい職業だと思います。

そして、本書を手にとったくださった読者の皆様にも、心からのお礼と感謝を。

次回作は新シリーズです。

「華国神記」とはまた違った雰囲気となります。新しい物語をお届けできる日を楽しみにしています。

九条　菜月

ご感想・ご意見をお寄せください。
イラストの投稿も受け付けております。
なお、投稿作品をお送りいただく際には、編集部
(tel:03-3563-3692、e-mail:mail@c-novels.com)
まで、事前に必ずご連絡ください。

C・NOVELS Fantasia

隻眼の護り人
——華国神記

2012年10月25日　初版発行

著　者　九条菜月
発行者　小林敬和
発行所　中央公論新社
〒104-8320　東京都中央区京橋2-8-7
電話　販売 03-3563-1431　編集 03-3563-3692
URL http://www.chuko.co.jp/

ＤＴＰ　ハンズ・ミケ
印　刷　三晃印刷（本文）
大熊整美堂（カバー・表紙）
製　本　小泉製本

©2012 Natsuki KUJO
Published by CHUOKORON-SHINSHA, INC.
Printed in Japan　ISBN978-4-12-501221-6 C0293

定価はカバーに表示してあります。落丁本・乱丁本はお手数ですが小社販売部宛お送り下さい。送料小社負担にてお取り替えいたします。

●本書の無断複製(コピー)は著作権法上での例外を除き禁じられています。また、代行業者等に依頼してスキャンやデジタル化を行うことは、たとえ個人や家庭内の利用を目的とする場合でも著作権法違反です。

第10回 C★NOVELS大賞 募集中！

あなたの作品がC★NOVELSを変える！

みずみずしいキャラクター、はじけるストーリー、
夢中になれる小説をお待ちしています。

賞

大賞作品には 賞金100万円

刊行時には別途当社規定印税をお支払いいたします。

出版

大賞及び優秀作品は当社から出版されます。

応募規定

❶プリントアウトした原稿、❷表紙＋あらすじ、❸エントリーシート、❹テキストデータを同封し、お送りください。

❶プリントアウトした原稿

「原稿」は必ずワープロ原稿で、40字×40行を1枚とし、90枚以上120枚まで。

※プリントアウトには通しナンバーを付け、縦書き、A4普通紙に印字のこと。感熱紙での印字、手書きの原稿はお断りいたします。

❷表紙＋あらすじ（各1枚）

表紙には「作品タイトル」と「ペンネーム」を記し、あらすじは800字以内でご記入ください。

❸エントリーシート

C★NOVELSドットコム[http://www.c-novels.com/]内の「C★NOVELS大賞」ページよりダウンロードし、必要事項を記入のこと。

※❶❷❸は、右肩をダブルクリップで綴じてください。

❹テキストデータ

メディアは、FDまたはCD-R。ラベルにペンネーム・本名・作品タイトルを明記すること。必ず「テキスト形式」で、以下のデータを揃えてください。

ⓐ原稿、あらすじ等、❶❷でプリントアウトしたものすべて　ⓑエントリーシートに記入した要素

応募資格

性別、年齢、プロ・アマを問いません。

選考及び発表

C★NOVELSファンタジア編集部で選考を行ない、大賞及び優秀作品を決定。2014年2月中旬に、C★NOVELS公式サイト、メールマガジン、折り込みチラシ等で発表する予定です（一次選考通過者には短い選評をお送りします）。

注意事項

- 複数作品での応募可。ただし、1作品ずつ別送のこと。
- 応募作品は返却しません。選考に関する問い合わせには応じられません。
- 同じ作品の他の小説賞への二重応募は認めません。
- 未発表作品に限ります。ただし、営利を目的とせず運営される個人のウェブサイトやメールマガジン、同人誌等での作品掲載は、未発表とみなし、応募を受け付けます（掲載したサイト名、同人誌名等を明記のこと）。
- 入選作の出版権、映像化権、電子出版権、および二次使用権など、発生する全ての権利は中央公論新社に帰属します。
- ご提供いただいた個人情報は、賞選考に関わる業務以外には使用いたしません。

締切

2013年9月30日（当日消印有効）

あて先

〒104-8320　東京都中央区京橋2-8-7
中央公論新社『第10回C★NOVELS大賞』係

主催・C★NOVELSファンタジア編集部

（2012年9月改訂）

9784125012216

ISBN978-4-12-501221-6

C0293 ¥900E

1920293009001

定価 本体900円＋税



猩猩緋の襲撃があった宴の後、皇帝から後宮に入るよう命じられた春蘭は、隷属を狙う玄楽から逃れるため命を受け入れる。仲間に迷惑をかけまいという春蘭の想いを知った仲望は自身の無力さを噛みしめ、剣の修練を始めた。そこに届いた再びの宴開催の報。猩猩緋が乗り組んで来るのを承知のうえでの布告に、皇帝の思惑は？　そして玄楽が守り神の力を欲する理由とは？　中華ファンタジー、いよいよ完結。